

多賀城市内の遺跡 2

—平成28年度ほか発掘調査報告書—

高崎古墳群
新田遺跡
市川橋遺跡
山王遺跡
高崎遺跡
志引遺跡

平成29年3月

多賀城市教育委員会

序 文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡や、多くの埋蔵文化財包蔵地があり、それらは市域の約4分の1にも及んでおります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であり、当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用に努めているところです。

本書は、平成27年度と平成28年度に国庫補助事業として実施した19件の発掘調査の成果を収録したものです。そのなかで、新田遺跡第111次調査では奈良時代の道路跡、第115次調査では土壌から10世紀初め頃の土器がまとまって出土しました。また、市川橋遺跡第92・94次調査では東西大路から南へ1条目の東西道路を、山王遺跡第170~176次調査では南北大路から西へ7条目の南北道路をそれぞれ発見し、平安時代のまち並みの一端が明らかになりました。

いずれの調査も、規模としては大きなものではありませんが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、本市の新たな歴史像の解明につながるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成29年3月

多賀城市教育委員会

教育長 小畠 幸彦

例　　言

- 1 本書は、国庫補助事業による平成27年度に実施した発掘調査3件と、平成28年度に実施した発掘調査16件の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
- 3 平成14年4月1日の測量法の改正に従い、本書では経緯度の基準を世界測地系で表示している。また、本書で報告している調査では、平成23年3月11日の東日本大震災以降に測量した座標を用いているが、震災以前の座標値と整合させるために、再測量の成果に基づき、震災以前に行った調査については東に約3m、南に約1mの補正をかけている。なお、図版中の世界測地系数値における小数点以下を省略して表示しているが、有効数字は小数点以下3桁である。
- 4 掘戻中の高さは、標高値を示している。
- 5 土色は、『新版標準土色帖』(小山・竹原：1996)を参考にした。
- 6 執筆担当は、下記のとおりである。図版作成等は各執筆担当者と遺物整理員が行った。また、遺物の写真撮影は村上詩乃・茂泉光雄・早坂優子が担当した。本書の編集は村松稔が行った。
I・III・XI・XII：村松稔　　II・VI・X：畠山未津留　　IV：丹野修太　　V：小原駿平
VII：石川俊英　　VIII：村上詩乃　　IX：熊谷　満
- 7 本調査のうち、山王遺跡第170～176次調査については、平成29年2月25・26日に行われた第43回古代城柵官衙遺跡検討会資料集で一部内容を公表しているが、それと本報告書で記載内容が異なる場合には、本報告書の内容が優先するものである。
- 8 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

I	遺跡の地理的・歴史的環境	1
II	高崎古墳群第12次調査	3
III	新田遺跡第109次調査	6
IV	新田遺跡第111次調査	8
V	新田遺跡第115次調査	30
VI	市川橋遺跡第92・94次調査	51
VII	山王遺跡第160次調査	93
VIII	山王遺跡第161次調査	100
IX	山王遺跡第166次調査	111
X	山王遺跡第169次調査	119
XI	山王遺跡第170～176次調査	133
II	高崎遺跡第109次調査	197
III	志引遺跡第5次調査	200

調査要項

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 菊地昭吾(平成28年9月30日まで)
教育長 小畠幸彦(平成28年10月1日から)
- 2 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 板橋秀徳
- 3 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター
主幹 武田健市 副主幹 村松稔 研究員 石川俊英 熊谷満
技師 昌山未津留 丹野修太 小原駿平 調査員 村上詩乃 茂泉光雄
- 4 調査協力者 伊藤寿子 菊池キワ子 菊池和也 高橋妙子 戸枝武治 小幡善吉 長谷良正
蜂谷啓一 鈴木秀夫 菅野弘大 下山貴司 越前谷信之 山崎洋史 山崎恵
佐藤慎治 倉知大輔 鈴木章弘 松田幸憲 武藤友紀子 阿部はるこ 阿部真紀子
阿部和子 阿部勝雄 川村陽介 根田能臣 根田奈美 湯口弘樹 石橋学
毛利新悦 菊地郁弥 菊地奈津子
株式会社サンエイ 株式会社LateralKids
- 5 調査従事者 赤間悟 渥美静香 阿部純一 阿部信夫 石徹白和人 上村博 氏家雅夫 大泉清吉
小川勝彦 横川良谷 加藤義宏 河東美雄 川村善蔵 菊地清喜 工藤正好
小針美香 小松まり 小松美樹 斎光也 西條金三 斎藤勝彦 斎藤義治
酒巻和枝 櫻井良博 佐々木一郎 佐々木正範 佐藤みゆき 白石三枝子 菅原博
杉原次郎 鈴木三男 須田英敏 鈴木優子 戸枝瑞枝 中島弘 濱田茂樹
平塚孝志 平塚武慶 福原寛 星芳子 幕田裕子 松川謙二 丸子美和
村上喜代中
- 6 整理従事者 阿部麻衣子 川名直子 小泉絢子 佐藤ゆかり 千葉都美 千葉貴久江
宮城ひとみ 村上和恵 内海美由紀 加藤京子 滝野とし子

調査一覧

平成27年度

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	山王遺跡第160次	山王三区64	平成28年3月1日～3月25日	32m ²	石川
2	山王遺跡第161次	山王字掲下し2-1、2-11、2-28	平成28年3月29日～3月15日	257m ²	畠山
3	志引遺跡第5次	東田中二丁目410-1、410-2の各一部	平成28年3月7日～3月24日	115m ²	武田

平成28年度

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
4	高崎古墳群第12次	高崎二丁目230-3	平成28年4月11日～4月20日	84m ²	村松 畠山
5	新田遺跡第109次	南宮字一里塚33-4	平成28年4月26日～4月27日	18m ²	村松
6	新田遺跡第111次	山王字南寿福寺21-9	平成28年7月4日～8月31日	68m ²	丹野
7	新田遺跡第115次	新田字西後21-1	平成28年11月14日～12月8日	39m ²	小原
8	市川橋遺跡第92次	城南二丁目5-1	平成28年5月23日～6月30日	19m ²	畠山
9	市川橋遺跡第94次	城南二丁目5-13	平成28年10月27日～12月16日	26m ²	畠山
10	山王遺跡第166次	山王字四区5-1ほか	平成28年6月1日～6月21日	40m ²	丹野
11	山王遺跡第169次	南宮字町24-6	平成28年8月22日～10月12日	20m ²	畠山
12	山王遺跡第170次	山王字山王四区80番3外の一部（区画No.7）	平成28年9月6日～11月4日	49m ²	村松 石川
13	山王遺跡第171次	山王字山王四区91番1外の一部（区画No.6）	平成28年9月6日～11月4日	35m ²	村松 石川
14	山王遺跡第172次	山王字山王四区91番1外の一部（区画No.5）	平成28年9月6日～11月4日	39m ²	村松 石川
15	山王遺跡第173次	山王字山王四区91番1の一部（区画No.4）	平成28年10月31～12月24日	42m ²	村松・石川 熊谷・小原
16	山王遺跡第174次	山王字山王四区91番1の一部（区画No.3）	平成28年10月31～12月24日	38m ²	村松・石川 熊谷・小原
17	山王遺跡第175次	山王字山王四区91番1の一部（区画No.2）	平成28年10月31～12月24日	52m ²	村松・石川 熊谷・小原
18	山王遺跡第176次	山王字山王四区91番1の一部（区画No.1）	平成28年10月31～12月24日	51m ²	村松・石川 熊谷・小原
19	高崎遺跡第109次	高崎二丁目20-2	平成28年11月8日	60m ²	村松

凡 例

1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。

S A : 柱列跡 S B : 据立柱建物跡 S E : 井戸跡 S D : 溝跡 S K : 土壌

P it : 柱穴及び小穴 S X : その他の遺構

2 奈良・平安時代の土器の分類記号は「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II」(多賀城市教育委員会 2003) に従った。詳細は下記のとおりである。

(1) 土師器壺

A類: ロクロ調整を行わないもの

B類: ロクロ調整を行ったもの

　B I類: ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

　B II類: ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

　B III類: ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

　B IV類: ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

　B V類: ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

B I・B II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する

(2) 土師器甕

A類: ロクロ調整を行わないもの

B類: ロクロ調整を行ったもの

(3) 須恵器壺

I類: ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

II類: ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

III類: ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

IV類: ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

V類: ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

I・II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する。

3 瓦の分類は「多賀城跡 政府跡 図録編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1980)、「多賀城跡 政府跡 本文編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1982) の分類基準に従った。

4 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期存続中に降灰し、承平4年（934年）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え方（宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998）と、『扶桑略記』延喜15年（915年）7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考え方がある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・塙原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中山久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。当市教育委員会では考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

I 遺跡の地理的・歴史的環境

多賀城市の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南北に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉・塩釜線沿いには、標高5～6mの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城や付属寺院の多賀城廃寺と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

高崎古墳群は、北西側に張り出す低丘陵の先端付近に立地し、その範囲は東西約120m、南北約140mの広さを有する。現在確認できる古墳は1基のみである。これまで、古墳の周辺で11回の発掘調査が実施されており、古墳時代後期の窯跡や古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が発見されている。

新田遺跡は、標高5～6mの微高地に立地し、その範囲は東西約0.8km、南北約1.6kmの広さを有する。縄文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では大小の溝で区画されて屋敷跡が多数発見されている。このうち、寿福寺地区では12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。

市川橋遺跡は、標高2～3mの沖積地に立地し、その範囲は東西約1.4km、南北約1.6kmの広さを有する。多賀城跡南面に広く占地し、山王遺跡と同様に古代の方格地割に基づくまち並みが形成されている。

山王遺跡は、標高3～4mの微高地に立地し、その範囲は東西約2km、南北約1kmの広さを有する。これまで弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ1町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいなどを構成する建物跡や井戸跡などが多数発見されている。

高崎遺跡は、低丘陵の西端部に立地し、その範囲は東西約1.3km、南北約1kmの広さを有する。これまで、古墳時代から近世までの遺構・遺物が発見されている。古代では、多賀城廃寺跡の西側で約80軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸跡などが発見されている。また、井戸尻地区では大量の灯明皿が一括廃棄された状況で検出され、周辺で万灯会のような仏教儀式が執り行われていたと考えられている。

志引遺跡は、標高20mほどの低丘陵の西端部に立地し、その範囲は東西、南北とも約100mである。古代の遺物が散布するほか、土壇状の高まりに三重塔を線刻した板碑が建てられている。



第1図 調査地の位置

1：山王通路第160次、2：山王通路第161次、3：志引通路第5次、4：高崎古道群第2次、5：新田通路第100次、6：新田通路第115次、7：新田通路第111次、8：山川通路第2次、9：山川通路第117次、10：山王通路第166次、11：山王通路第167次、12：山王通路第170次、13：山王通路第171次、14：山王通路第172次、15：山王通路第173次、16：山王通路第174次、17：山川通路第175次、18：山王通路第176次、19：山王通路第109次。

II 高崎古墳群第12次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、高崎二丁目地内における宅地造成工事に伴う確認調査である。平成27年1月14日に、地権者より当該地における宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、対象範囲の西側で最大0.8mの切土造成を行い、擁壁工事として西側隣接地境界で幅0.7m、深さ最大1.36m、東側隣接地境界で幅0.6～1.0m、深さ最大1.36mの掘削を行うことから、遺跡への影響が懸念された。このため、遺跡保存に向けた協議を行い、確認調査を行うこととなった。

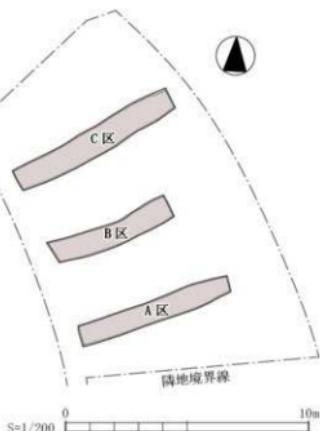
平成28年4月5日に調査に関する依頼書及び承諾書及びの提出を受け、4月11日より現地調査を開始した。調査にあたっては、東西方向の試掘トレントを3箇所（A区、B区、C区）を平行に設定し、重機による表土除去を行った。その結果、0.3～0.6mの深さで地山となる岩盤層を検出したが、いずれの調査区も岩盤は重機による削平を受けており、遺構は確認できなかった。また、岩盤が切れるC区東端部についても、旧地盤は擾乱によって失われていた。4月18日に測量と調査区全体の写真撮影を行い、4月20日の重機による埋め戻しをもって、全ての現地発掘調査を終了した。

2 調査成果

今回の調査では、旧地盤が削平や擾乱によって失われており、遺構や遺物は発見できなかつた。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



A区全景（東から）



B区全景（東から）

写真図版 1



C区全景（東から）



C区東端深堀状況（南東から）

写真図版2

III 新田遺跡第109次調査

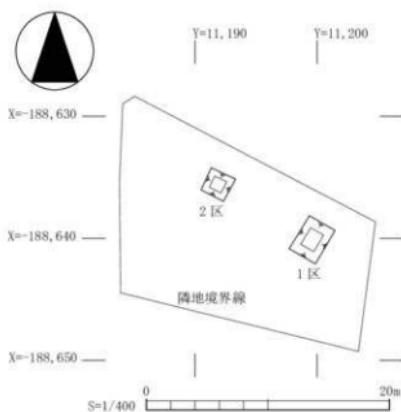
1 調査に至る経緯・経過と調査成果

本件は、個人住宅建設に伴う確認調査である。平成28年4月4日、地権者より当該区における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、住宅部の基礎工事の際に直径40cm、長さ3.0mの柱状改良を53箇所に施す計画であった。当該地の南側隣接地で第91次調査を実施しており、遺構検出面まで0.9～1.0mであることを確認していることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、柱状改良以外の基礎工法では建物を支えるための十分な強度が得られないことから、確認調査を実施することとなった。その後、4月21日に地権者から調査に関する依頼書と承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

調査は平成28年4月26日から実施し、重機を使用して表土を除去した。現地表から約1.5～1.8mの深さまで掘り下がったが、遺構や遺物は確認できなかった。4月27日に調査位置の図面作成を行い、すべての調査を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区平面図



1区調査状況



2区調査状況

写真図版 1

IV 新田遺跡第111次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字南寿福寺地内における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。平成28年5月19日、地権者より当該区における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅の基礎工事の際に直径16cm、深さ8mの柱状改良を40箇所に施すことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、遺跡保存の協議を行ったものの、申請どおりの工法で着手することに決定したことから、本発掘調査を実施することとなった。6月3日に地権者から発掘調査に関する依頼書・承諾書の提出を受け、7月4日より現地調査を開始した。

はじめに、重機による住宅建築部分の盛土・表土（I層）除去から取りかかり、現表土下約60cm以下の黒褐色土（II層）上面で遺構を確認した。7日より作業員を動員し、遺構の平面精查と搅乱の掘り下げを行った。次いで、13日からII層の掘り

下げを人力で行い、III層上面で遺構を検出した。III層上面で検出した遺構の掘り下げや写真撮影、平面図・断面図の作成を行い、8月3日からIII層の掘り下げを行った。IV・VI層上面で溝跡を検出し、遺構の掘り下げや写真撮影、平面図・断面図を作成した。17日にはV層上面を精査し、性格不明の窪地状の遺構を検出した。遺構の掘り下げと写真撮影を行い、23日以降には、調査区の全景写真撮影、平面図・断面図を作成した。25日には補足調査、31日には埋戻しと調査器材の搬出を行い、現地調査の一切を終了した。

2 調査成果

（1）層序

今回の調査で確認した層序は以下の通りである。（第2図）

I層：現代の表土や盛土、耕作土層などで、厚さは約60cm～70cmである。

II層：炭化物や褐色砂質土小ブロックを多く含む黒褐色土である。厚さは15cm前後で、中世の遺構検出面である。

III層：灰褐色砂質土で厚さは10cm～40cmである。中世の遺構検出面である。

IV層：調査区北端に分布する均質な黄灰色シルトで、厚さは20cmである。中世の遺構検出面である。

V層：調査区北端に分布する均質な黄橙色シルトで、厚さは10cm～15cmである。

VI層：調査区中央から南にかけて分布する均質な浅黄橙色土である。中世・古代の遺構検出面である。

VII層：調査区中央から南にかけて分布する黒褐色土で、厚さは10cm～15cmである。

VIII層：調査区中央から南にかけて分布する均質な浅黄橙色土で、古墳時代の遺構検出面である。

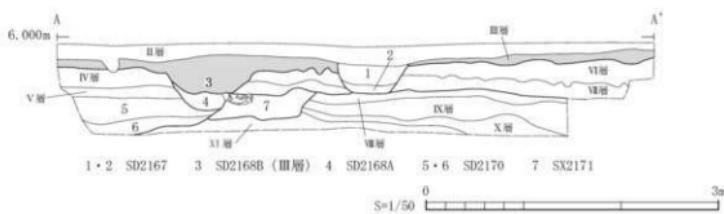
IX層：調査区中央から南にかけて分布する均質な浅黄灰色土である。



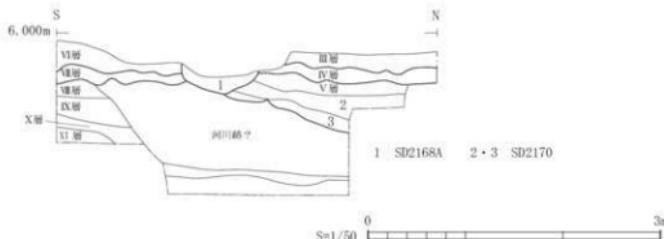
第1図 調査区位置図

X層：調査区中央から南にかけて分布する均質な浅黄白色シルトである。

XI層：調査区中央から南にかけて分布する均質な浅黄灰色土である。



第2図 調査区東壁断面図



第3図 調査区西壁断面図

(2) 発見した遺構と遺物

II層上面で溝跡・土壤・小柱穴、III層上面で溝跡と小柱穴、IV層上面で溝跡と道路側溝、VII層上面で性格不明遺構を確認した。

【VII層上面】

S X2171(第4図)

【位置】調査区中央東側に位置する。

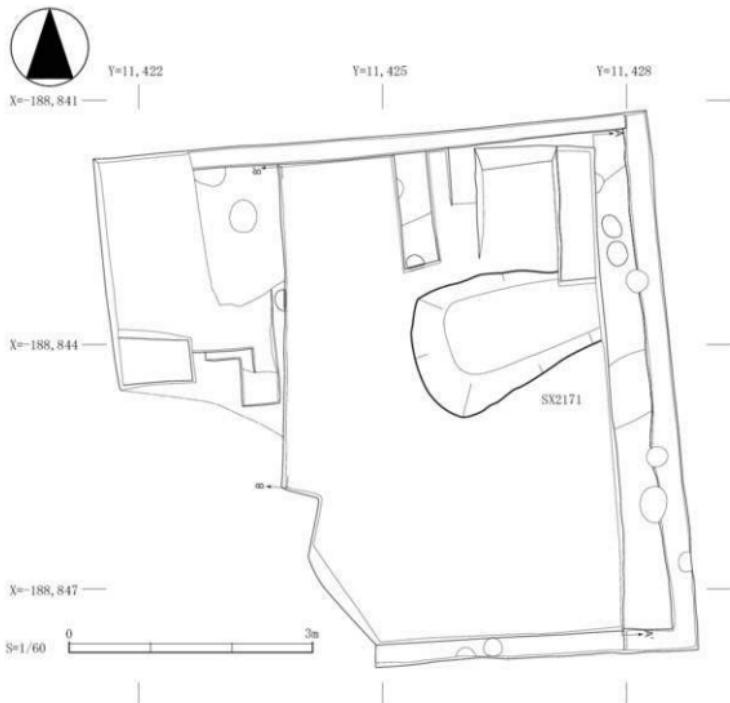
【重複】重複はない。

【平面形・規模・方向】調査区の東側へ延びており、全体の形状は不明である。南北方向で約1m～1.6m、東西方向で2.3m以上、深さは25cmである。

【埋土】黄褐色ブロックを少量含む暗褐色土である。

【壁・底面】壁は外側へやや開きながら立ち上がり、底面はおおよそ平坦である。

【遺物】土師器壺（第5図1～3）・甕（第5図4～5）（第6図6～7）・鉢（第6図8）・瓶（第6図9）・器台（第6図10）・土玉（第6図11）が出土している。



第4図 第VII層検出遺構平面図

【VI層上面】

S D2170溝跡（第7図）

【位置】調査区の北端に位置する東西方向の溝跡であり、位置関係から第37次調査S X1777及び第49次調査S X1905東西道路跡の南側溝と同一のものである。遺構の大半が調査区より北側へ延びており、今回の調査では南辺の一部を確認した。

【重複】重複はない。

【方向・規模】上幅は2.1m以上、下幅は未検出である。方向は東で測ると北に約15度偏している。長さは3.4m以上あり、周辺の調査で確認した長さを合わせると24.5m以上である。

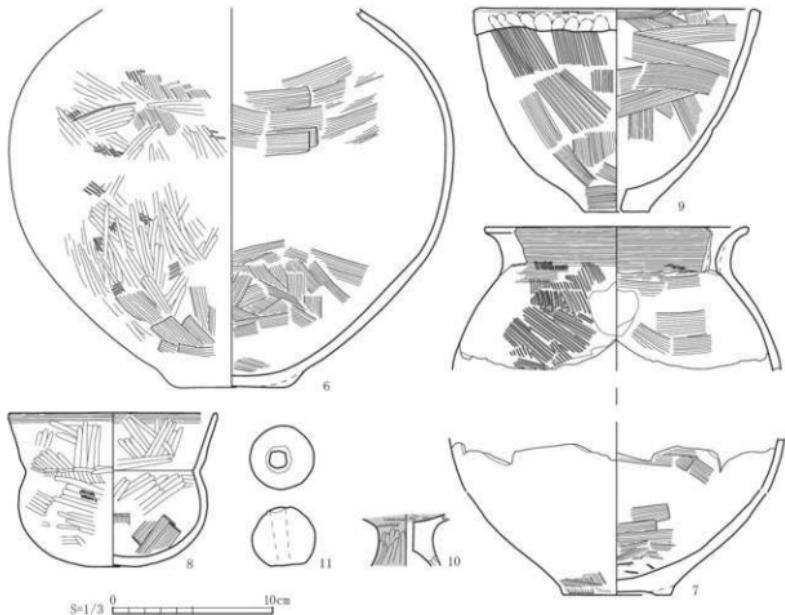
【壁・底面】壁は非常に緩やかに立ち上がっている。底面は今回の調査では確認できなかった。

【埋土】a層：自然堆積層（第2図IV～V・5層）とb層：人為埋土（第2図6層）の2層に大別される。1層は基本層IV層である均質な黄灰色シルト、2層は基本層V層である均質な黄橙色シルト、3層は河川の洪水起源と思われる、にぶい黄橙色の砂層で、粗砂層と細砂層が互層状に堆積している。4層は埋戻しによる人為埋土で、黒褐色粘土ブロックを含む灰黄褐色粘質土である。

【遺物】遺物は出土していない。



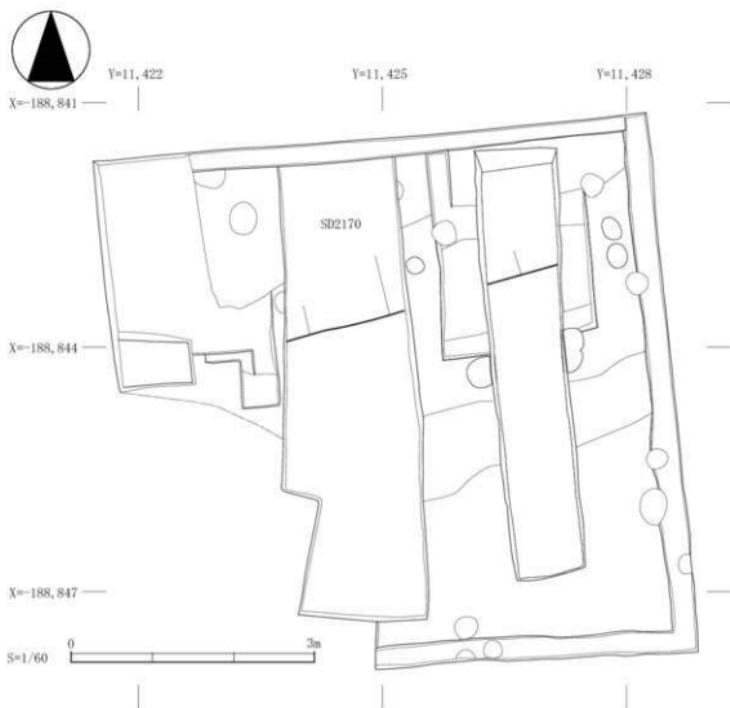
第5図 S X2171出土遺物（1）



(単位: cm)

番号	種類	遺構 層位	特徴		口径 底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面					
1	土師器 壺	SX2171 1層	口: ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ 体: ヘラミガキ	口: ヘラミガキ→ヨコナデ 体: ヘラナデ	(15.4) 4/24	(8.8) 7/24	31.5	-	R1
2	土師器 壺	SX2171 1層	口: ヨコナデ→ハケメ→ヘラミガキ 体: ハケメ→ヘラミガキ	口: ヘラミガキ・ヨコナデ 体: ヘラナデ→ヘラミガキ	(15.0) 4/24	-	-	3-1	R2
3	土師器 壺	SX2171 1層	口: ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	口: ハケメ→ヘラミガキ	(17.6) 3/24	-	-	-	R9
4	土師器 甕	SX2171 1層	口: ハケメ→ヨコナデ 体: ハケメ	口: ヨコナデ→ハケメ 体: ヘラナデ	(17.4) 23/24	(7.5) 24/24	22.7	3-2	R4
5	土師器 甕	SX2171 1層	口: ハケメ→ヨコナデ 体: ハケメ	口: ヘラナデ→ヨコナデ 体: ヘラナデ	(20.8) 11/24	-	-	-	R8
6	土師器 甕	SX2171 1層	体: ハケメ→ヘラナデ・ヘラミガキ	体: ヘラナデ	- (7.0) 24/24	-	-	-	R3
7	土師器 甕	SX2171 1層	口: ハケメ→ヨコナデ 体: ハケメ	口: ハケメ→ヨコナデ 体: ヘラナデ	(16.3) 5/24	(6.8) 12/24	-	-	R7
8	土師器 鉢	SX2171 1層	口: ヨコナデ→ヘラミガキ 体: ハケメ→ヘラミガキ	口: ヨコナデ→ヘラミガキ 体: ヘラナデ→ヘラミガキ	(12.9) 6/24	(2.6) 18/24	9.6	3-3	R6
9	土師器 瓶	SX2171 1層	口: 指オサエ 体: ハケメ	口: ヘラナデ 体: ヘラナデ	(17.2) 9/24	4.1 24/24	12.8	3-4	R5 単孔.0.8
10	土師器 器台	SX2171 1層	体: ハケメ→ヘラミガキ	体: ヘラナデ・ヘラミガキ	-	-	-	3-5	R10 内外面赤彩
11	土玉	SX2171 1層	-	-	直径: 4.0 厚み: 4.0	長さ: 3.1 重さ: 55g	3-6	R11	

第6図 SX2171 1層 出土遺物 (2)



第7図 第VI層検出遺構平面図

【IV・VI層上面】

S D2169溝跡（第8図）

【位置】調査区西端に位置する南北方向の溝跡である。中央部西側で東西方向のSD2168と接続する。また、位置関係から、第37次調査SD1739や、第66次調査SD1977と同一の遺構と考えられる（第17図）。

【変遷】ほぼ同位置で2時期の変遷を確認した（A→B期）。

【方向・規模】方向は北で測ると西に約8度偏している。長さは2.4m以上あり、周辺の調査で確認した長さを合わせると45m以上である。

A期

上部がB期にはぼ壊されており、残存状況は極めて悪い。

【規模】上幅1.2m以上、下幅50cm以上、深さ70cmである。

【壁・底面】壁は底面から50cmの高さまで急に立ち上がり、そこから緩やかに開く。底面は概ね平坦である。

【埋土】調査区北壁で2層に分層される。1層は黄褐色小ブロックを多く含む暗褐色土、2層が埋戻しによる人為埋土で、黄褐色粘土ブロックを多く含む黒色粘質土である。

【遺物】遺物は出土していない。

B期

【規模】上幅1.0m以上、下幅25cm以上、深さ70cmである。

【壁・底面】壁は底面から15cmの高さまで急に立ち上がり、そこから緩やかに開く。底面は概ね平坦である。

【埋土】調査区北壁で4層に分層される。1層は基本層III層に対応し、2層は褐色粘土小ブロックを含む暗褐色土、3層は酸化鉄を微量含む黒褐色土、4層が黄褐色粘土小ブロックを含む黒褐色粘質土である。

【遺物】無釉陶器壺（第9図2）の破片が出土している。

S D2168溝跡（第8図）

【位置】調査区中央部に位置する東西方向の溝跡である。調査区西端で南北方向のS D2169と接続する。

【変遷】ほぼ同位置で2時期の変遷を確認した（A→B期）。

【方向・規模】方向はB期で測ると、東で測ると北に約8度偏する。長さは4.8m以上である。

A期

【規模】上幅60cm以上、下幅15cm～30cm、深さ20cmである。

【埋土】黄灰色粘土ブロックを多く含む灰褐色土である。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや丸みを帯びている。

【遺物】遺物は出土していない。

B期

【規模】上幅0.4m～1.2m、下幅40cm、深さ25cmである。

【埋土】III層によって覆われる、にぶい黄褐色砂質土の単層である。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸があるものの、概ね平坦である。

【遺物】施釉陶器折縁深皿（第9図1）の破片が出土している。

〔III層上面〕

S D2167溝跡（第10図）

【位置】調査区中央部に位置する東西方向の溝跡である。

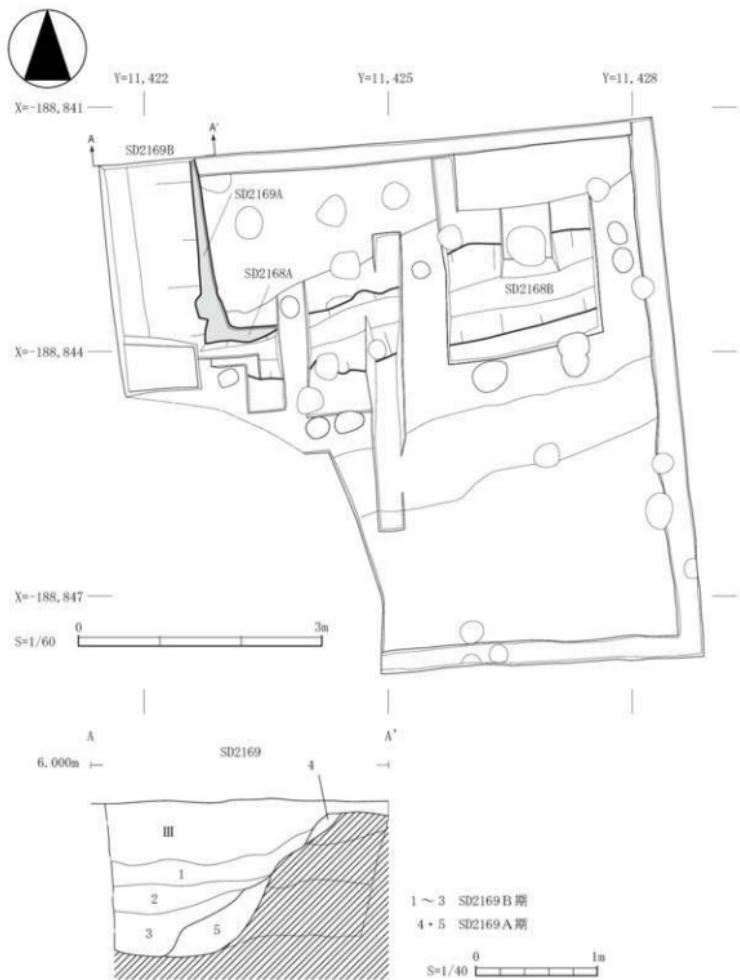
【重複】小柱穴と重複しており、これらより古い。

【方向・規模】方向は東で測ると北に約13度偏する。上幅0.7m～1.0m、下幅30cm～50cm、深さ30cmで、長さは4.0m以上である。

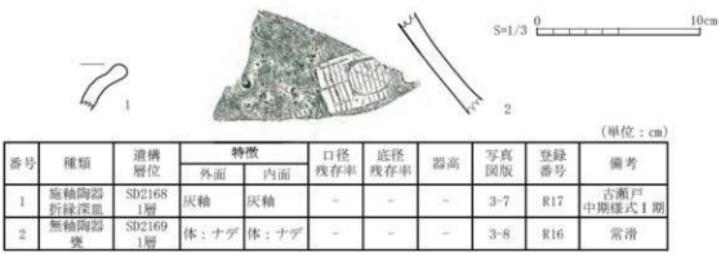
【埋土】2層に分けられ、1層は炭化物や焼土粒を微量含む暗褐色土、2層はVI層起源の黄褐色ブロックをやや多く含む暗褐色土である。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

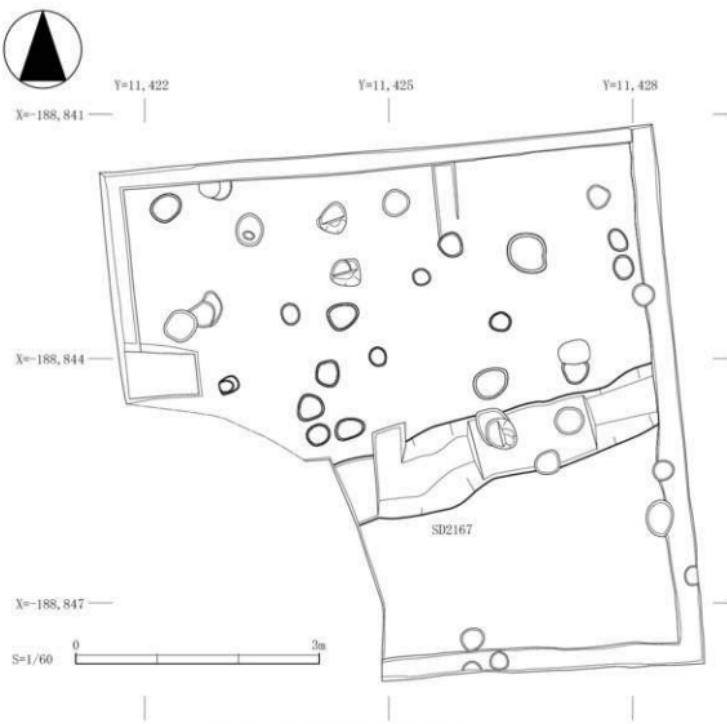
【遺物】かわらけ小皿（第11図1）、古代の軒平瓦（第11図2）の破片が出土している。



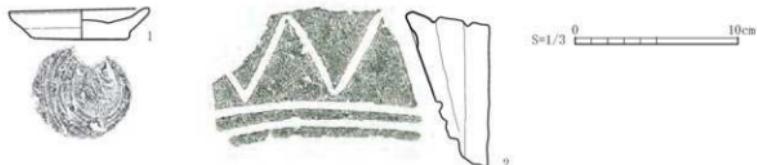
第8図 第IV・VI層検出遺構平面・断面図



第9図 SD2168・2169溝跡出土遺物

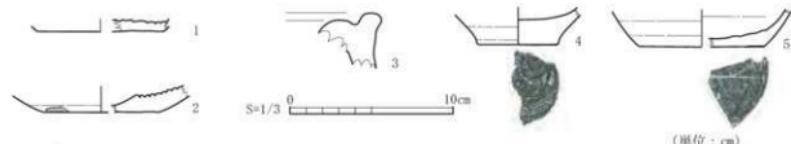


第10図 第III層検出遺構平面図



番号	種類	遺構層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	かわらけ 小皿	SD2167 1層	口～体：ロクロナデ 底部：回転糸切り一無調整	口～体：ロクロナデ	8.5 19/24	5.8 21/24	1.85	3-9	R14	
2	軒平瓦	SD2167 1層	瓦当面：二重沈線 頭部：鉢面文・二重沈線	布目痕	-	-	-	3-10	R15	多賀城政府 1期

第11図 SD2167溝跡出土遺物



番号	種類	遺構層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	施釉陶器 鉢皿	III層	底部：回転糸切り露胎	底部：鉢口露胎	-	(7.7) 4/24	-	3-11	R28	古瀬戸
2	施釉陶器 鉢皿	III層	体：ヘラナデ→ロクロナデ 底部：回転糸切り露胎	底部：鉢口露胎	-	(7.0) 3/24	-	3-12	R29	古瀬戸
3	無釉陶器 盤	III層	口：ロクロナデ	-	-	-	-	3-13	R27	常滑6b
4	かわらけ 小皿	III層	体：ロクロナデ 底部：回転糸切り一無調整	体：ロクロナデ	-	(7.6) 4/24	-	3-14	R25	ヘラ記号 「-」?
5	須恵器 环	III層	体：ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り	体：ロクロナデ	-	(7.6) 4/24	-	3-15	R26	ヘラ記号 「-」?

第12図 III層出土遺物

【II層上面】

I層による擾乱の影響を受けており、遺構の残存状況は極めて悪い。

S D2164溝跡（第13図）

【位置】調査区南部から中央部にかけて位置する南北方向の溝跡である。

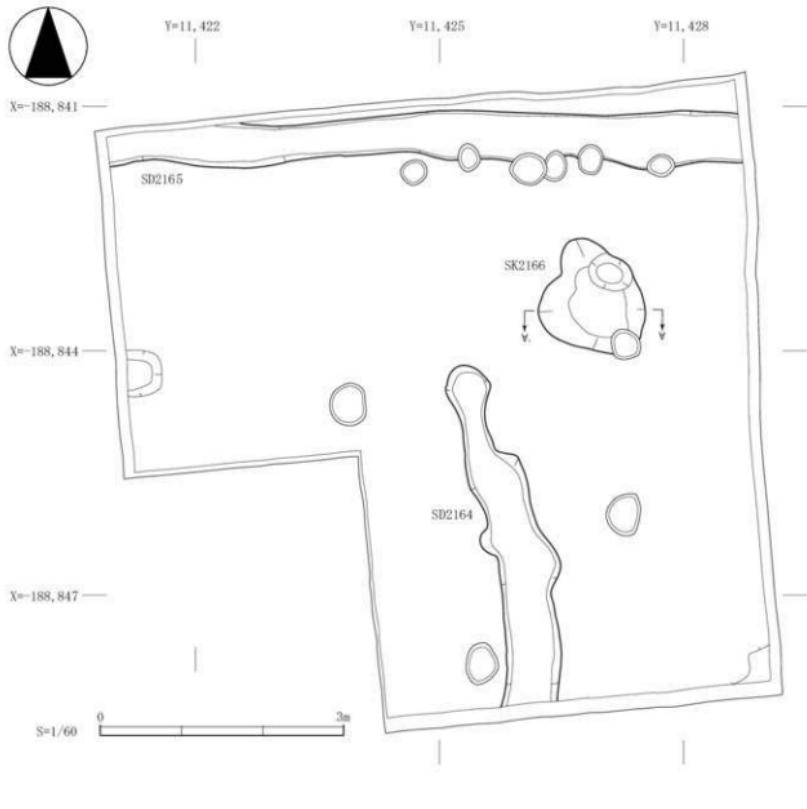
【重複】重複はない。

【方向・規模】方向は南で測ると東に約12度偏する。上幅20cm～70cm、下幅10cm～15cm、深さ20cmで、長さは4.2m以上である。

【埋土】黄灰色ブロックを多く含む黒褐色土である。

【壁・底面】壁はやや急に立ち上がり、底面は平坦である。

【遺物】遺物は出土していない。



第13図 第II層検出遺構平面図・断面図

S D2165溝跡（第13図）

【位置】調査区北端に位置する東西方向の溝跡である。

【重複】重複はない。

【方向・規模】方向は東西方向に平行する。上幅40cm～60cm、下幅35cm～50cm、深さ2cm～4cmで、長さは7.7m以上である。

【埋土】暗褐色砂質土である。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

【遺物】遺物は出土していない。

S K2166土壤（第13図）

【位置】調査区中央東側に位置する。

【重複】重複はない。

【方向・規模】方向は東西方向に平行する。長軸1.5m、短軸1.3m、深さ15cmである。

【埋土】灰褐色ブロックをやや多く含む黒褐色土である。

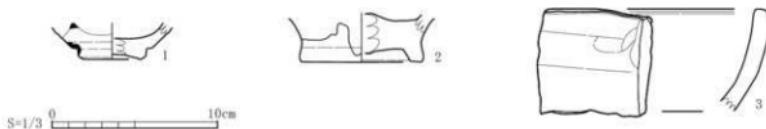
【壁・底面】壁は非常に緩やかに立ち上がり、底面は不整形である。

【遺物】遺物は出土していない。

堆積層出土の遺物

III層からは、施釉陶器卸皿、無釉陶器甕、かわらけ小皿、須恵器杯が出土している（第12図1～5）。

II層からは、施釉陶器天目茶碗、白磁四耳壺、無釉陶器片口鉢が出土している（第14図1～3）。



番号	種類	遺構 層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	施釉陶器 天目	II層	铁轴	铁轴	-	(3.4) 12/24	-	3-16	R33	古瀬戸後 B期C類
2	白磁 四耳壺	II層	底部: ケズリ出し高台	-	-	(7.4) 9/24	-	3-17	R31	
3	無釉陶器 片口鉢	II層	口縁: ロクロナデ 体: ロクロナデ→ケズリ	口縁: ロクロナデ 体: ロクロナデ→鉢底	-	-	-	3-18	R36	

第14図 II層出土遺物

3 まとめ

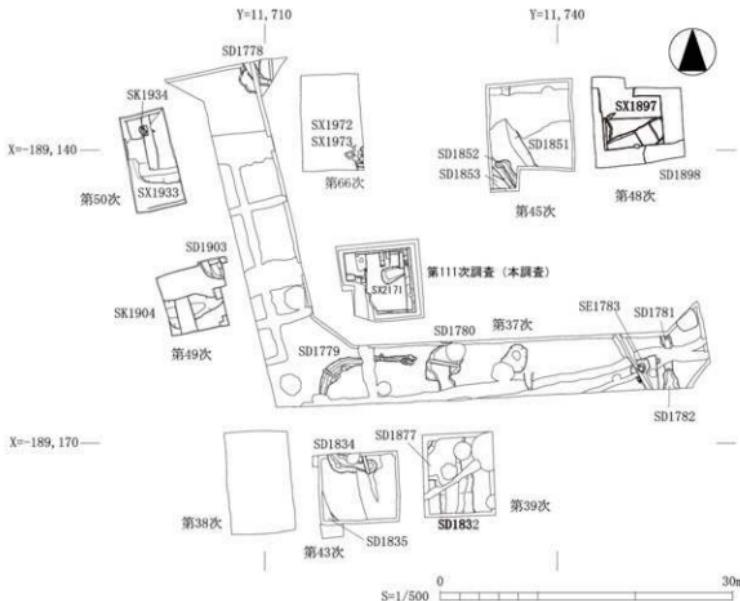
ここでは、遺構を検出した層位と出土遺物から、その年代について検討する。

(1) 古墳時代前期

VII層上面で検出したSX2171から、土師器壺・甕・鉢・瓶・器台・土製品が出土している(第5・6図1~11)。

1~3は蓋で、複合口縁のものである。1は最大径が体部中央よりやや下部に位置する球洞のものであり、2はやや長胴気味のものである。底部には輪台充填技法が認められる。外面の調整について見てみると、口縁部はいずれもヨコナデであり、頸部は1・3がハケメ後にヘラミガキ、2がヨコナデ後にハケメ調整を施している。体部はいずれも最終調整がヘラミガキである。内面は口縁部では1・2がヘラミガキ後にヨコナデ、3がハケメ後にヘラミガキを施し、体部はいずれもヘラナデが最終調整である。このような例は、周辺の調査において山王遺跡第58次調査SD1233から出土しており、丹羽編年第二II A~II B段階、辻編年III-1~III-3期に収まるものと位置づけている(多賀城市教育委員会2006)。

4~7は甕である。4・5・7は口縁部が短く外反しており、4・6・7では最大径がいずれも体部中央から中央よりやや上部に位置している。いずれも口径が器高に対して小さく、底部には輪台充填技法が認められる。外面の調整について見てみると、口縁部はいずれもヨコナデ、体部は4・5・7がハケメ、6はハケメ後にヘラナデまたはヘラミガキを施す。内面の口縁部はいずれもヨコナデ、体部はいずれもヘ



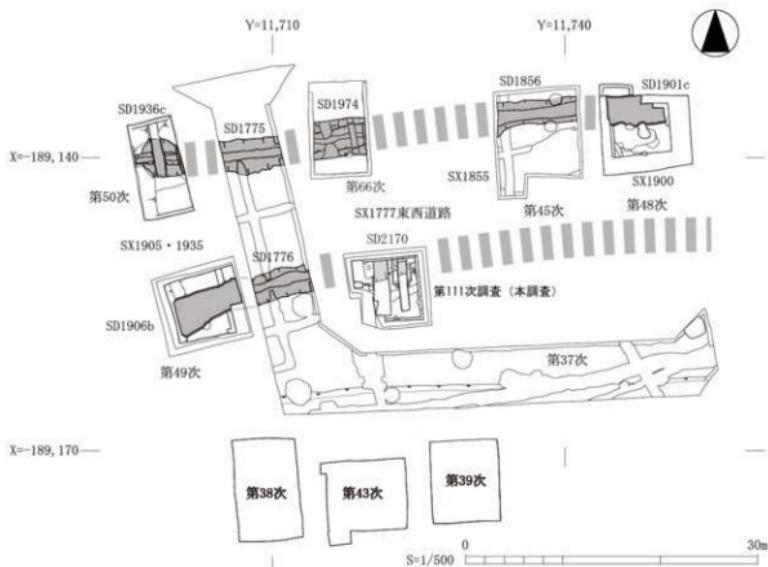
第15図 古墳時代前期の遺構配置図

ラナデを施す。このような例は、周辺の調査において新田遺跡第39次調査SD1832から出土しており、その年代を丹羽編年II A～II B段階、辻編年III-1～III-3期に収まるものと位置づけている（多賀城市教育委員会2009）。

8は鉢で、底部は小径で平底を呈する。口径は12.9cmと器高の9.6cmに比べ大きく、頭部のくびれは少ない。調整についてみてみると、外面体部がハケメ後にヘラミガキ、外面口縁はヨコナデ後にヘラミガキを施している。内面体部はヘラナデ後にヘラミガキ、内面口縁はヨコナデ後にヘラミガキを施している。このような例は、周辺の調査において山王遺跡第58次調査基本層V層から出土しており、その年代を古墳前期でも古い段階にあたる可能性を示しつつ、辻編年II-2期と位置づけている（多賀城市教育委員会2006）。

9は瓶で複合口縁をもつ。底部立ち上がりから体部中央まではやや内轉し、体部中央から垂直気味に立ち上がる。口径は17.2cmと器高の12.8cmに比べ大きく、底部に0.8cmの単孔が認められる。調整を見てみると、外面体部ハケメ、外面口縁部は指によるオサエを施し、内面は全面ヘラナデを施している。このような例は仙台市沼向遺跡第9次調査SI914（仙台市教育委員会2010）で確認されており、また、同第10次調査SI1005（仙台市教育委員会2010）で確認された鉢については、内面口縁部にオサエが認められ、やや調整に差異がみられるものの、本遺跡出土の鉢と同様のものと考えたい。これらの鉢については、青山編年の中釜3式新段階に類似しており（青山2011）、その年代とどらえたい（注1）。

以上、SX2171から出土した土師器の年代が丹羽編年II A～II B段階、辻編年II-2期～III-3期、青



第16図 奈良時代の遺構配置図

山編年塩釜3式新段階の間に収まるものと考えられ、この遺構の年代も概ね古墳時代前期に該当するものと想定される。

(2) 奈良時代

VI層上面で検出したSD2170については、位置関係から奈良時代の東西道路跡（第37次調査SX1777、第49次調査SX1905）の南側溝と同一のものである。これまでの調査成果より、南北に素掘りの側溝を伴っており、南側溝で2時期（a→b期）、北側溝3時期（a→c期）の変遷を確認している。

今回確認したSD2170と、第49次調査SD1906南側溝と比較すると、以下2点の相違が認められる。

① 埋土

SD2170では自然堆積であるa層と人為的な埋土であるb層に大別できるのに対して、SD1906では2時期ともに人為的な埋土は確認できていない。

② 壁の立上り

DS2170では比較的明瞭に南壁の立上りが確認されるのに対して、SD1905では中央より東側は南に大きく開口するような状況である。

上記のうち、①については人為的な埋土の所在が問題となるが、第50・66次調査で確認した北側溝の埋土をみると、最も古いc期で人為的に埋め戻された痕跡が確認できる。この点を考慮するならば、SD2170 b層は北側溝a期に対応する可能性が高い。

一方、②については、道路跡の廃絶時の様相を推測する手がかりとなる。SX1777及びSX1905道路後については、いずれも最終段階は平安時代の遺構検出面となるにぶい黄褐色砂質土で覆われている。側溝埋土上面にも厚く堆積している状況であり、洪水などの自然災害により供給されたものと考えられる。第49次調査SD1906の南壁が南側に向かって開口するような状況は、洪水等の影響により削られた痕跡を示している可能性も考えられよう。

(3) 中世

IV・III・II層上面が中世の遺構検出面である。このうち、II層の炭化物が多量に混入する黒褐色土は新田遺跡寿福寺地区で広く確認されており、第4・11次調査の成果より14世紀後半頃に堆積したことが明らかとなっている。本調査区周辺ではこの層を境に下層のものを中世I期、上層のものを中世II期と捉えており、今次調査ではIV・III層上面が中世I期、II層上面が中世II期に対応する。

【中世I期】

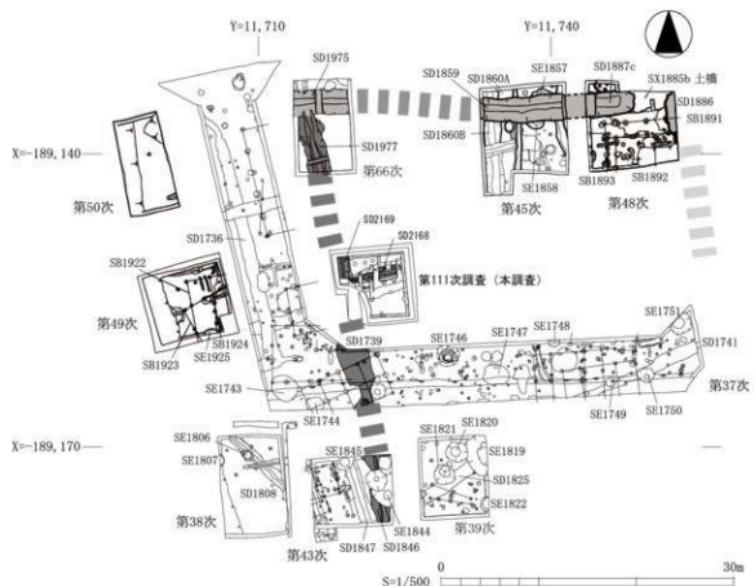
IV層上面で検出したSD2168・SD2169については、B期の堆積土から古瀬戸中期様式I期の折縁深皿（第9図1）が出土していることから、B期については14世紀初頭以降のものである。なお、SD2168は、北側隣接地で実施した第37次調査SD1739溝跡や第66次調査SD1977溝跡と同一のものである。これまでの調査では複数時期の変遷は確認されていなかったが、今回の調査で2時期の変遷があることを新たに確認した。

III層上面のSD2167については直接年代を反映するような遺物は出土していないが、II層に覆われるところから14世紀後半が下限年代となる。II層から古瀬戸後期様式II期の天目茶碗（C類）が出土しており、年代的にも一致している。

【中世II期】

II層上面で確認したSD2164・2165、SK2166のほか、数基の小穴がある。周辺の成果をみると、当

該期には南北310m、東西200m以上の範囲にわたり大規模な区画溝を巡らせた屋敷郡が形成され、「在庁官人の居館群」と推測されている（齊藤1992）。今次調査区は建物等は確認されず閑散とした様相であり、屋敷内の空闊地であったと考えられよう。



第17図 中世の遺構配置図

引用・参考文献

- 愛知県市史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』2012

青山博樹『土師器の編年⑦東北』『古墳時代史の鉢組み-古墳時代の考古学1-』同成社 2011

仙台市教育委員会『沼向遺跡第1～3次調査-宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書I-』

仙台市文化財調査報告書第241集 2000

仙台市教育委員会『沼向遺跡第4～34次調査-宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書III-』

仙台市文化財調査報告書第360集 2010

多賀城市教育委員会『山王遺跡第58次調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第86集 2006

多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡2-平成20年度発掘調査報告書-』多賀城市文化財調査報告書第95集 2009

多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡2-平成21年度発掘調査報告書-』多賀城市文化財調査報告書第99集 2010

多賀城市教育委員会『山王遺跡第66・68次調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第100集 2010

多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡2-平成22年度発掘調査報告書-』多賀城市文化財調査報告書第103集 2011

辻秀人「東北南部における古墳出現期の土器編年 その2」『東北学院大学論集 歴史学・地理学』第27号 1995

宮城県考古学会『平成19年度 宮城県遺跡調査成果発表会』2008



SK2166土壤断面（西から）



Ⅱ層上面検出遺構全景（北東から）

写真図版1



III層上面検出遺構全景（北東から）



S D2169 B期溝跡（南から）

写真図版 2



S D2169堆状況（南から）



S X2171遺物出土状況（北東から）

写真図版3



調査区東壁断面（西から）



VII層上面検出遺構全景（北東から）

写真図版 4



VII層上面検出遺構全景（南から）

写真図版 5



写真図版 6

V 新田遺跡第115次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は新田字西後における個人住宅新築工事に伴う本発掘調査である。平成28年9月28日に、地権者より当該地における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅基礎として直径0.14m、長さ5mのパイレを26本打ち込む内容であり、遺跡への影響が懸念された。

このため、遺跡保存のための協議を行ったが、現計画での工事実施が望ましいとの結論に達し、記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。その後、平成28年11月3日に地権者より調査に関する依頼書と承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

調査は11月14日から開始し、初めに重機を使用して盛り土の除去を行ったところ、現地表下80cmほどで暗褐色粘質土（II層）に到達した。15日より作業員を動員して、遺構の精査を行った。18日には第一面での平面・断面図作成を開始し、II層の掘り下げを行ったところ、21日には黄褐色砂質土層（III層）上面で遺構を確認した。28日より第2面の平面・断面図の作成を行った。12月5日には重機による埋め戻しを行い、8日には器材の撤収等含め、現地発掘調査に係る一切を終了した。

2 調査成果

(1) 層序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。（第3図）

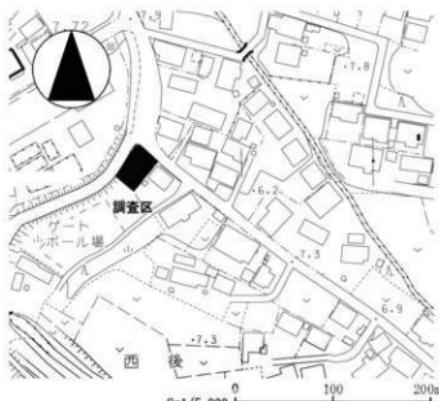
I 1層：現代の盛土層。コンクリート塊含む。厚さは80～90cmである。

I 2層：現代の盛土層。砂粒を多く含む。厚さは14～26cmである。

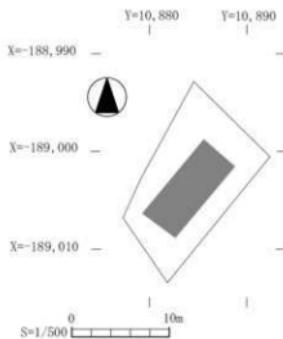
I 3層：現代の盛土層。グライ化した暗緑灰色粘質土。厚さは6～15cmである。

II 1層：暗褐色粘質土。古代の遺構確認面。厚さは6～22cmである。

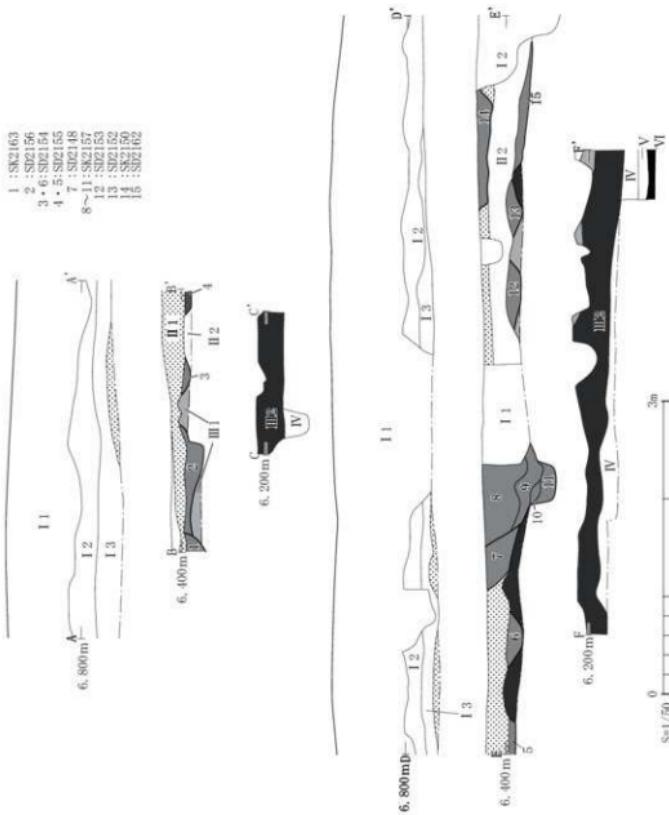
II 2層：灰黃褐色砂質土。黄褐色土ブロックを少量含む。堆積土中に白色小砂粒が混入しており、厚さは



第1図 調査区位置図



第2図 調査区模式図



第3図 調査区壁断面図

20～24cmである。

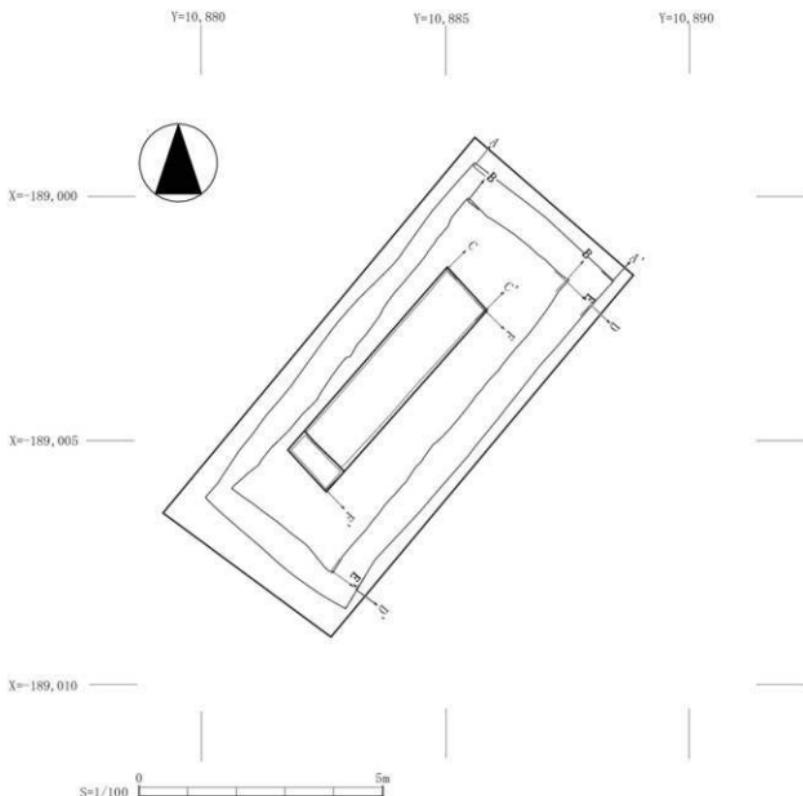
III1層：黄褐色砂質土。古墳時代の遺構確認面。厚さは8～12cmである。

III2層：黄褐色砂質土。酸化鉄を少量含む。厚さは20～40cmである。

IV層：暗褐色粘質土。酸化鉄を多量に含む。厚さは10～20cmである。

V層：褐灰色粘質土。黄褐色土ブロックを少量含む。厚さは約20cmである。

VI層：黒褐色粘土。酸化鉄を少量含む。厚さは約10cmである。



第4図 IV層上面全体図

（2）発見遺構と遺物

【Ⅲ層上面】（第5図）

S D2152溝跡

【位置・形態】調査区南西で検出した。

【重複】他の遺構とは重複しない。

【方向・規模】東西方向の溝跡であり、東で南に2度偏し、S D2153、S D2155及びS D2156とほぼ平行する。最大幅78cm、検出面からの深さは15cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】黄褐色土ブロックを少量含む暗褐色砂質土である。

【遺物】土師器及び須恵器の小片が出土している。

S D2153溝跡

【位置・形態】S D2152の北側で検出した。S D2153、S D2155及びS D2156とほぼ平行する。

【重複】調査区中央部から東半でピット群を切る。

【方向・規模】東西方向の溝跡であり、西で北に6度偏する。最大幅64cm、検出面からの深さは8cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや起伏がある。

【埋土】黄褐色土ブロックを少量含む暗褐色砂質土である。

【遺物】土師器小片が出土している。

S D2154溝跡

【位置・形態】調査区北東端で検出した。

【重複】S D2155と重複しており、これより新しい。

【方向・規模】南北方向に延びる溝跡であり、北で東に7度偏する。最大幅55cm、検出面からの深さは11cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】暗褐色砂質土である。

【遺物】土師器小片が出土している。

S D2155溝跡

【位置・形態】調査区北側で検出した。

【重複】S K2161及び小ピット群と重複しており、これより古い。

【方向・規模】東西方向に延びる溝跡であり、東で北に6度偏する。S D2152及びS D2153、S D2156とほぼ平行する。最大幅56cm、検出面からの深さは13cmである。

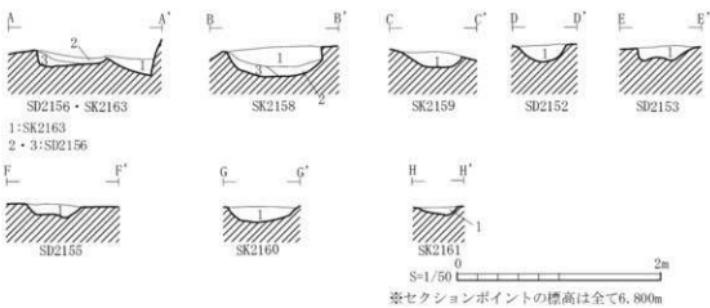
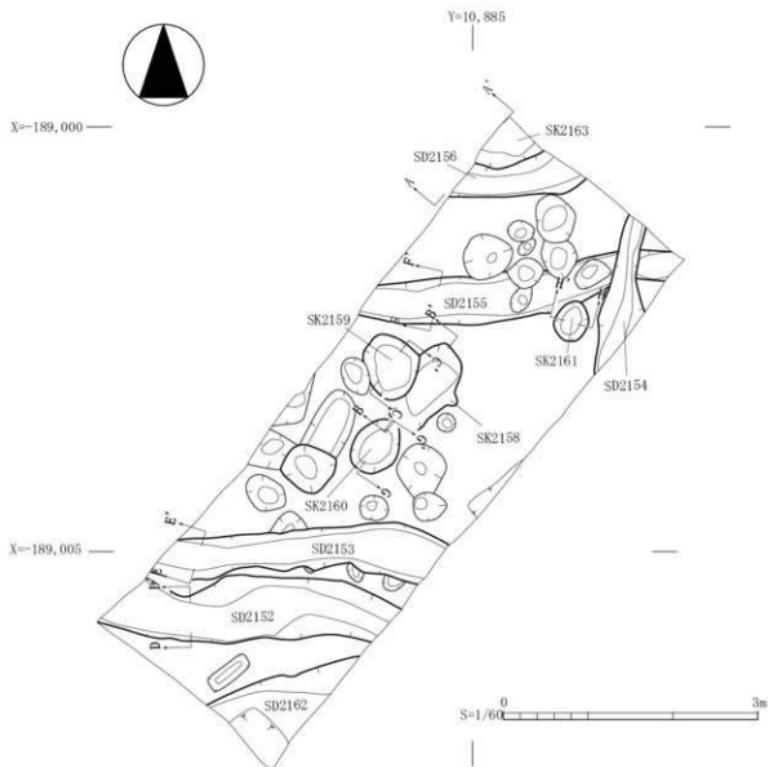
【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】暗褐色砂質土である。

【遺物】土師器小片が出土している。

S D2156溝跡

【位置・形態】調査区北西端で検出した。



第5図 III層上面遺構全体図

【方向・規模】東西方向に延びる溝跡であり、東で北に6度偏する。SD2152及びSD2153、SD2155とはほぼ平行している。最大幅56cm、検出面からの深さは8cmである。

【重複】SK2163と重複しており、これより古い。

【壁・底面】壁は北西端で垂直気味に立ち上がる。

【埋土】2層に分けられる。1層はにぶい黄褐色砂質土であり、2層は褐色砂質土である。

【遺物】土師器小片が出土している。

S K2158土壤

【位置】調査区中央部で検出した。

【重複】SK2159と重複しており、これより古い。

【平面形・規模】東に舌状の膨らみを有する楕円形であり、長軸1.1m、短軸44cm、検出面からの深さは29cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】3層に分けられる。1層は黒褐色粘質土であり、2層はにぶい黄褐色砂質土であり、3層は暗褐色砂質土である。

【遺物】土師器壺（B類）および土師器甕（B類）が出土している。

S K2159土壤

【位置】調査区中央部西寄りで検出した。

【重複】SK2158と重複しており、これより新しい。

【平面形・規模】平面は楕円形であり、長軸71cm、短軸65cm、検出面からの深さは16cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】黒褐色粘質土。層中に多量の炭化物を含む。

【遺物】土師器小片が出土している。

S K2160土壤

【位置・形態】SK2158の南西で検出した。

【重複】他の遺構とは重複しない。

【平面形・規模】長軸67cm、短軸54cm、検出面からの深さは15cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】黒褐色粘質土。

【遺物】土師器小片が出土している。

S K2161土壤

【位置】調査区北東で検出した。

【重複】SD2155と重複しており、これより新しい。

【平面形・規模】円形の土壤である。長軸48cm、短軸39cm、検出面からの深さは8cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底部はほぼ平坦である。

【埋土】黒褐色砂質土。層中に炭化物、土器片を含む。

【遺物】土師器甕（B類）が出土している。

S D2162溝跡

【位置・形態】調査区南西で検出した。

【重複】南西端部で擾乱に壊される。

【方向・規模】確認出来る最大幅72cm、検出面からの深さ15cmであり、東で北に8度偏する。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】褐色砂質土である。

【遺物】土師器甕（B類）が出土している。

S K2163土壤

【位置】調査区北西隅で検出した。

【重複】S D2156と重複しており、これより新しい。

【平面形・規模】大部分が調査範囲外のため平面形の全容は不明であるが、確認できる深さは最大16cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底部はほぼ平坦である。

【埋土】黒褐色砂質土。層中に炭化物、土器片を含む。

【遺物】土師器甕（B類）が出土している。

〔Ⅱ層上面〕(第6図)

S D2147溝跡

【位置・形態】調査区西南から北東方向に延びる溝跡である。このうち南西部、中央部、北東部に3つのサブトレーンチを設けた。

【重複】S K2149と重複しており、これより新しい。

【方向・規模】北で東に31度偏する。検出面からの深さは30cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は比較的平坦である。

【埋土】2層に分けることができる。1層はよく締まる褐色砂質土であり、黄褐色土ブロックを含んでいる。2層は暗褐色砂質土である。

【遺物】3つのサブトレーンチのうち、T 2から近現代の陶器甕が出土しており、S D2147は近現代の遺構と考えられる。

S D2148溝跡

【位置・形態】調査区北東で検出した溝跡である。

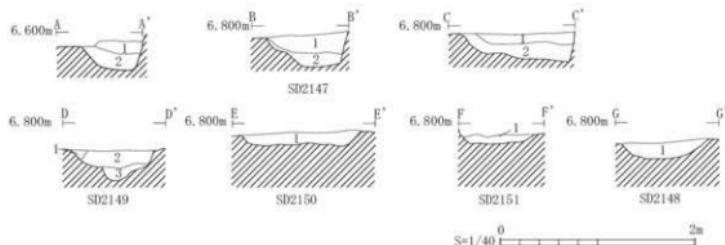
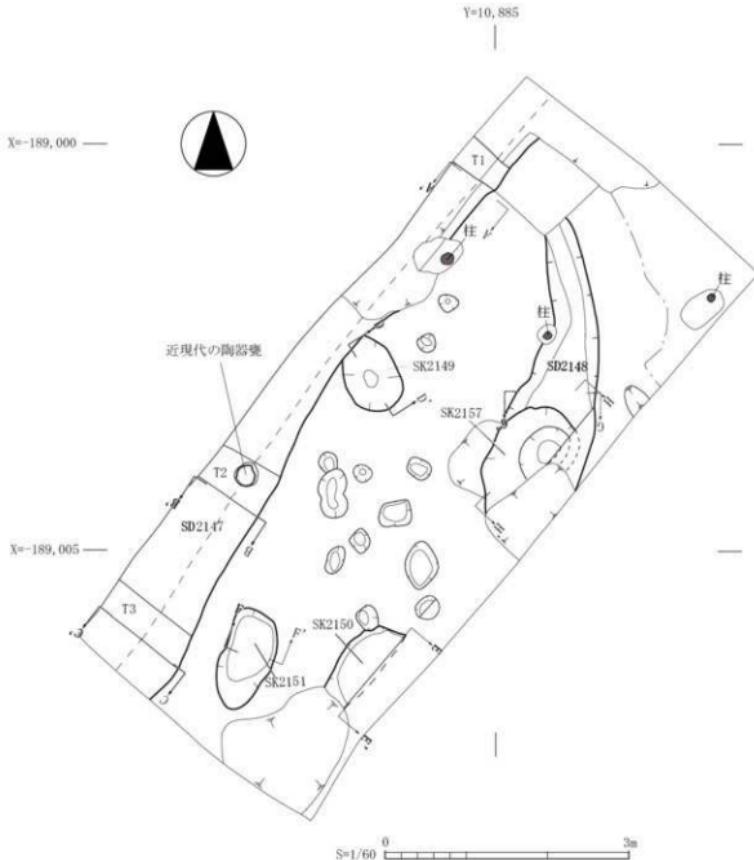
【重複】S K2157と重複しており、これより古い。

【方向・規模】北半部は北で西に13度偏し、南半部は北で東に18度偏している。検出面からの深さは18cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】暗褐色砂質土である。

【遺物】土師器坏（B類）・甕（B類）のほか、須恵器坏が出土している。



第6図 II層上面遺構全体図

S K2149土壤

【位置】調査区中央やや北西寄りで検出した。

【重複】北西端がS D2147と重複しており、これより古い。

【平面形・規模】平面は楕円形であり、長軸87cm、短軸67cm、検出面からの深さは30cmである

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は中央で窪む。

【埋土】3層に分けられる。1層は黒褐色粘質土である。2層は黄褐色粘質土ブロックを少量含む黄褐色砂質土である。3層は黒褐色砂質土である。

【遺物】遺物は出土していない。

S K2150土壤

【位置】調査区南西で検出した。

【重複】北西端で小ピットに切られ、南西端は擾乱によって壊されている。

【平面形・規模】平面は楕円形であり、長軸1.1m、短軸47cm、検出面からの深さは12cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】黄褐色土ブロックを含むにぶい黄褐色砂質土である。

【遺物】遺物は出土していない。

S K2151土壤

【位置】調査区南西で検出した。

【重複】他の遺構とは重複しない。

【平面形・規模】平面は楕円形であり、長軸1.2m、短軸60cm、検出面からの深さは11cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

【埋土】にぶい黄褐色砂質土である。

【遺物】土師器及び須恵器の小片が出土している。

S K2157土壤（第7図）

【位置】調査区中央東寄りで検出した。Ⅲ層上面の精査時に検出したものであるが、後に調査区壁面での土層観察によりⅡ層上面へ帰属することが分かった。

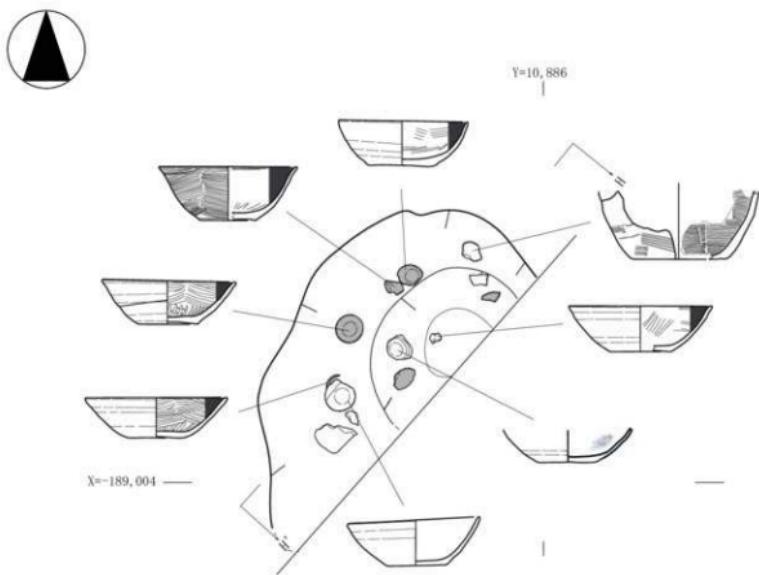
【重複】S D2148と重複しており、これより新しい。

【平面形・規模】東半部は調査範囲外であるため全容は不明だが、本来的には楕円形であったと考えられる。長軸は1.5m、短軸は71cm、壁面で確認したⅡ層上面からの深さは75cmである。

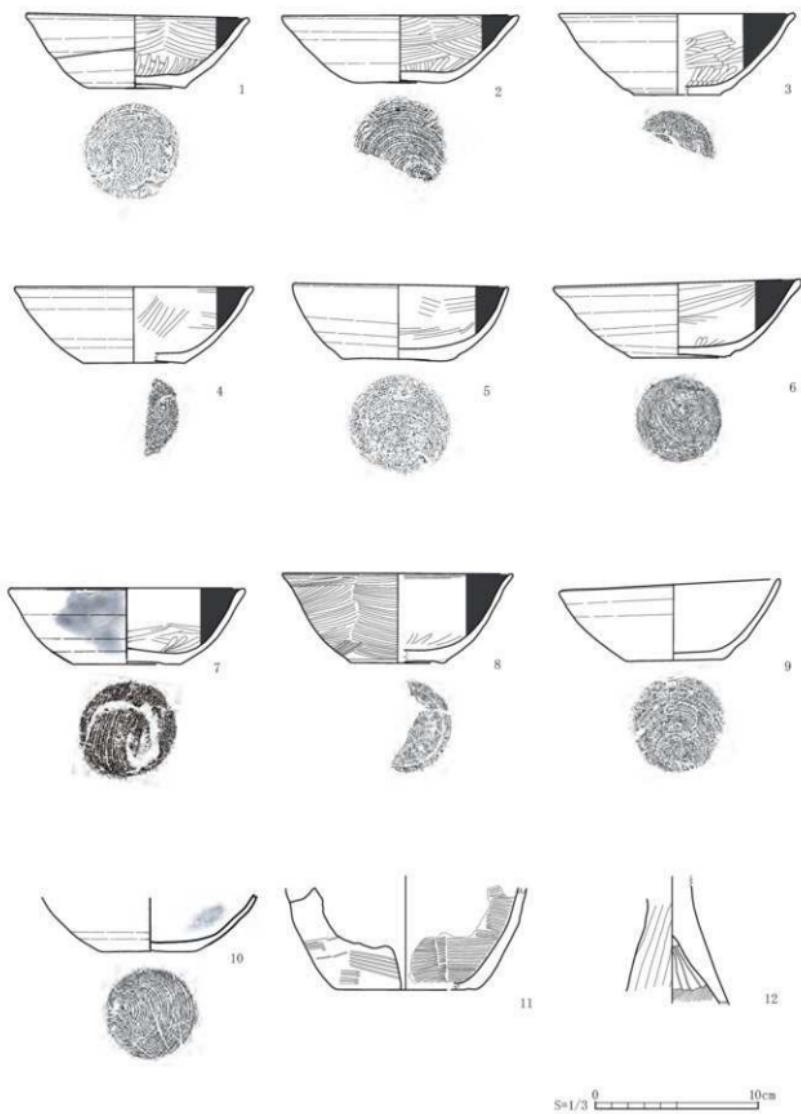
【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、中央やや北東寄りで一段窪む。

【埋土】4層に分けられる。1層は黒褐色粘質土であり、土器・炭化物を多く含んでいる。2層は暗褐色砂質土であり、土器片を含む。3層はにぶい黄褐色砂質土である。4層は黒褐色砂質土であり、黄褐色土ブロックを少量含む。

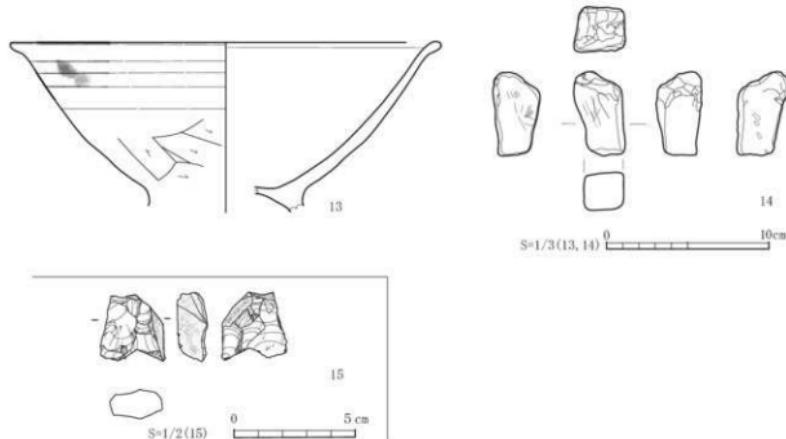
【遺物】完形の土師器壺B V類、須恵系土器壺等数点がまとめて出土しているほか、土師器甕B類、須恵系土器鉢、砥石が出土している（第8図1～11、第9図13・14）。



第7図 SK2157土壤平面・断面図



第8図 SK2157土壤・II層出土遺物(1)



番号	種類	遺構	層位	特徴		口径 口径 残存率	底径 底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号
				外面	内面					
1	土師器 环	SK2157	1層	クロナデ 底部：回転糸切無調整	ヘラミガキ →黒色処理	13.7 24/24	6.1 24/24	4.5	4-2a 4-2b	R2
2	土師器 环	SK2157	1層	クロナデ 底部：回転糸切無調整	ヘラミガキ →黒色処理	(14.4) 7/24	(5.8) 18/24	4.2	4-4	R3
3	土師器 环	SK2157	1層	クロナデ 底部：回転糸切無調整	ヘラミガキ →黒色処理	(14.4) 4/24	(5.2) 10/24	5.0	-	R15
4	土師器 环	SK2157	2層	クロナデ	ヘラミガキ →黒色処理	(14.7) 9/24	(6.2) 9/24	6.7	-	R11
5	土師器 环	SK2157	4層	クロナデ 底部：回転糸切無調整	ヘラミガキ →黒色処理	(13.1) 13/24	6.5 24/24	4.7	4-6	R5
6	土師器 环		II層	クロナデ	ヘラミガキ →黒色処理	(15.0) 15/24	5.4 24/24	4.6	4-5	R12
7	土師器 环	SD2148	1層	クロナデ 底部：回転糸切無調整	ヘラミガキ →黒色処理	(14.4) 4/24	3.2 24/24	4.7	4-9	R6
8	土師器 高台付环	SK2157	4層	クロナデ →ヘラミガキ	ヘラミガキ →黒色処理	(14.1) 2/24	(5.8) 10/24	5.5	4-3	R7
9	須恵系土器 环	SK2157	1層	クロナデ 底部：回転糸切無調整	クロナデ	(13.6) 10/24	6.1 24/24	4.7	4-1	R1
10	須恵系土器 环	SK2157	1層	クロナデ 底部：回転糸切無調整	ロクロナデ 油煙付着	-	5.7 24/24	-	4-7a 4-7b	R9
11	土師器 甕	SK2157	1層	刷毛目 底部：縦状圧痕	ヘラナデ	-	(9.0) 6/24	-	4-10	R4
12	土師器 高环		II層	ケズリ	-	-	-	-	4-11	R21
13	須恵系土器 鉢	SK2157	1層	ロクロナデ 油煙付着	ロクロナデ	(26.4) 2/24	-	-	4-8	R18
14	砥石	SK2157	3層	砾灰岩 擦痕あり	-	長 5.2	幅 3.0	厚 2.8	4-13	R13
15	剥片		II層	黑曜石（湯の倉産）	-	長 2.8	幅 12.7	厚 1.2	4-12	R22

第9図 SK2157 土壌・II層出土遺物 (2)

3 まとめ

(1) II層上面検出遺構について

古代の遺構検出面であり、SK2157およびSD2148から10世紀前葉頃の土器が多量に出土している。本調査区は多賀城跡周辺に広がるまち並みの外縁部にあたり、平安時代の集落跡と考えられる。現代の搅乱によって多くの遺構が破壊されている。

(2) III層上面検出遺構について

古墳時代中期の遺構検出面である。土壌5基、溝跡6条のほか、ピットが数基確認されている。ピットには明瞭な掘方埋土と柱痕跡を残し、建物または柱列を構成していたと考えられるものも認められるが、狭域での調査であり、配列が判別可能なものは確認されなかつた。

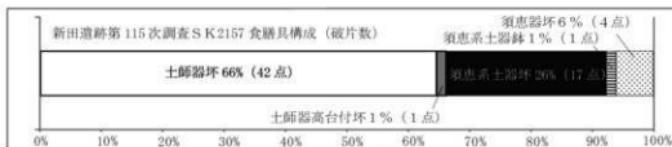
(3) SK2157出土土器について

土器の概要

SK2157からは1層から4層に渡って平安時代の土器が多量に出土しており、形態を良好に保つ個体も複数認められる。層ごとに見た土器の特徴に目立った違いは無く、2層と4層の土器が接合していることから、各層の時間的な差は想定し難い。土器群は土師器、須恵系土器、須恵器で構成される。食膳具のうち、最も多いものが土師器であり、須恵系土器がこれに次ぐ。須恵器については破片がわずかに含まれるのみである(第10図)。

土師器はすべてロクロを用いたB類であり、壺・高台付壺・甕が組成する。底部調整の判別可能な壺計10点に関しては全てBV類であり、手持ちヘラケズリや回転ヘラケズリ等の再調整が施されたものは確認できない。内面にヘラミガキのち黒色処理が施されており、底部内面はいずれも放射状ミガキである。形態の復元可能な壺は5点あり、底径/口径比は0.36～0.5の値を示している。高台付壺は内外面にミガキを行い、内面には黒色処理が施されている。底部から体部にかけてゆるやかに立ち上がり、口縁部は外反する。矮小な高台が付属し、器形は塊状を呈する。底部には菊花状のオサエ痕を持つ。

須恵系土器は壺と鉢があり、一部に油煙の付着する個体が確認できる。10世紀中葉以降出現する小型壺は出土していない。壺の底部はいずれも回転糸切無調整である。



第10図 SK2157土壤出土土器の食膳具構成

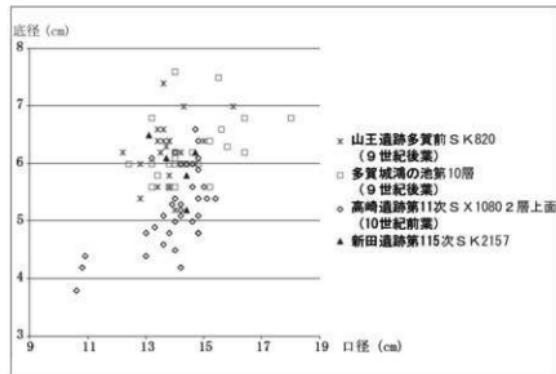
年代

次にSK2157出土土器の年代について述べる。須恵系土器壺・鉢類が含まれることから、9世紀中葉までは遡り得ず、古くとも9世紀後葉以降のものと考えられる。また、土師器壺の法量分布を比較すると、9世紀後葉の土器(山王多賀前SK820・多賀城跡鴻の池第10層)と10世紀前葉の土器(高崎S X1080 2層上面=灰白色火山灰自然堆積層上層)との中间的な様相を示している(第11図)。9世紀後葉頃の土器と

表1 周辺遺跡における10世紀前後の主要な土器群

遺跡名及び調査次数	遺構名	年代	掲載文献
多賀城跡 第61次	鴻の池地区第10層	9世紀後葉	多賀城跡調査研究所年報1991
山王遺跡 多賀前地区	S K820		宮城県170集
山王遺跡 伏石地区	S K3047		宮城県174集
市川橋遺跡 第72次	S X3400	9世紀後葉～10世紀初頭	多賀城市95集、多賀城市107集
高崎遺跡 第11次	S X1080		多賀城市37集
山王遺跡 第4次	S K161		多賀城市史 第4巻
山王遺跡 第9次	S X543	10世紀前葉	多賀城市26集
山王遺跡 町地区	S K2861		宮城県175集
多賀城跡 第37次	S D1221B-4層		多賀城跡調査研究所年報1980
多賀城跡 第61次	鴻の池地区第7層	10世紀中葉	多賀城跡調査研究所年報1991
多賀城跡 第62次	S K2175・2182		多賀城跡調査研究所年報1992
多賀城跡 第66次	S E2315		多賀城跡調査研究所年報1995
多賀城跡 第68次	S X2449	10世紀後葉～11世紀前葉	多賀城跡調査研究所年報1997
多賀城跡 第4次	S K078		『本文編』『補遺編』
多賀城跡 第66次	S X2319		多賀城跡調査研究所年報1995

される多賀城跡第61次調査鴻の池地区第10層出土土器群（多賀城跡調査研究所1992）では、土師器壺におけるBV類の占める割合が5割弱であるのに対して、SK2157で出土した底部判別可能な土師器壺は全てBV類である。また、客観的ではあるものの、組成中に須恵系土器を一定量含み、且つ須恵系土器小型壺・小皿類を含まない。よって、9世紀後葉の中でも新しい時期とされる山王遺跡多賀前地区SK820出土土器（宮城県教育委員会1996）や市川橋遺跡第72次調査SX3400出土土器（多賀城市教育委員会2009）より新しく、10世紀中葉頃の鴻の池地区第7層出土土器（多賀城跡調査研究所1992）や多賀城跡第37次調査SD1221-B第4層出土土器（多賀城跡調査研究所1981）より古い時期とみられる。以上の特徴から、SK2157出土土器の年代は概ね10世紀前葉頃と考えられる（第12図）。

第11図 SK2157土壤土師器法量分布図
灰白色火山灰落下

山王多賀前 S K820 市川橋 72次 S X3400 多賀城 61次 第10層	山王 4次 S K161 高崎 11次 S X1080 2層上面 新田 115次 SK2157	多賀城 61次 第7層 多賀城 37次 SD1221-B 第4層
9世紀後葉	10世紀前葉	10世紀中葉

第12図 SK2157土壤出土土器の年代的位置付け

(4) 黒曜石剥片について

堆積層中からは、古墳時代中期のものと考えられる土師器のほか、黒曜石剥片が出土している。二次加工の痕跡は認められず、一部に自然面を残す。他に小剥片等は確認されておらず、本調査区付近に石器製作の場が存在した可能性は低い。灰色と黒色の縞状をなし、白色含有物が確認できることから、加美町湯の倉産の黒曜石とみられる。近傍の新田遺跡第73次調査(多賀城市教育委員会2012)においても、古墳時代のものと思われるラウンドスクレイバー(湯の倉産黒曜石製)が出土しており、市内西部で盛んに使用された石材であることが窺える。

引用・参考文献

- 多賀城跡調査研究所『多賀城跡調査研究所年報1980』1981
多賀城跡調査研究所『多賀城跡調査研究所年報1991』1992
多賀城跡調査研究所『多賀城跡調査研究所年報1992』1993
多賀城市教育委員会『山王遺跡第9次調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第26集 1991
多賀城市教育委員会『高崎遺跡—第11次調査報告書—』多賀城市文化財調査報告書第37集 1995
多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡2－平成20年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第95集 2009
多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡2－平成23年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第108集 2012
宮城県教育委員会『山王遺跡Ⅲ 多賀前地区遺物編』宮城県文化財調査報告書第170集 1996
宮城県教育委員会『山王遺跡Ⅳ 多賀前地区考察編』宮城県文化財調査報告書第171集 1996
村田晃一「土器からみた官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』1994
村田晃一「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号 1995
柳澤和明「東北の施釉陶器-陸奥を中心に-」『古代の土器研究—律令的土器様式の西東3—』1994



II層上面遺構検出状況（北東から）



II層上面遺構完掘状況（北東から）

写真図版 1



S K 2157 土器出土状況（北東から）



S K 2157 土器出土状況（南西から）

写真図版 2



III層上面遺構検出状況（北東から）



III層上面遺構完掘状況（北東から）

写真図版 3



IV層上面検出状況（北東から）



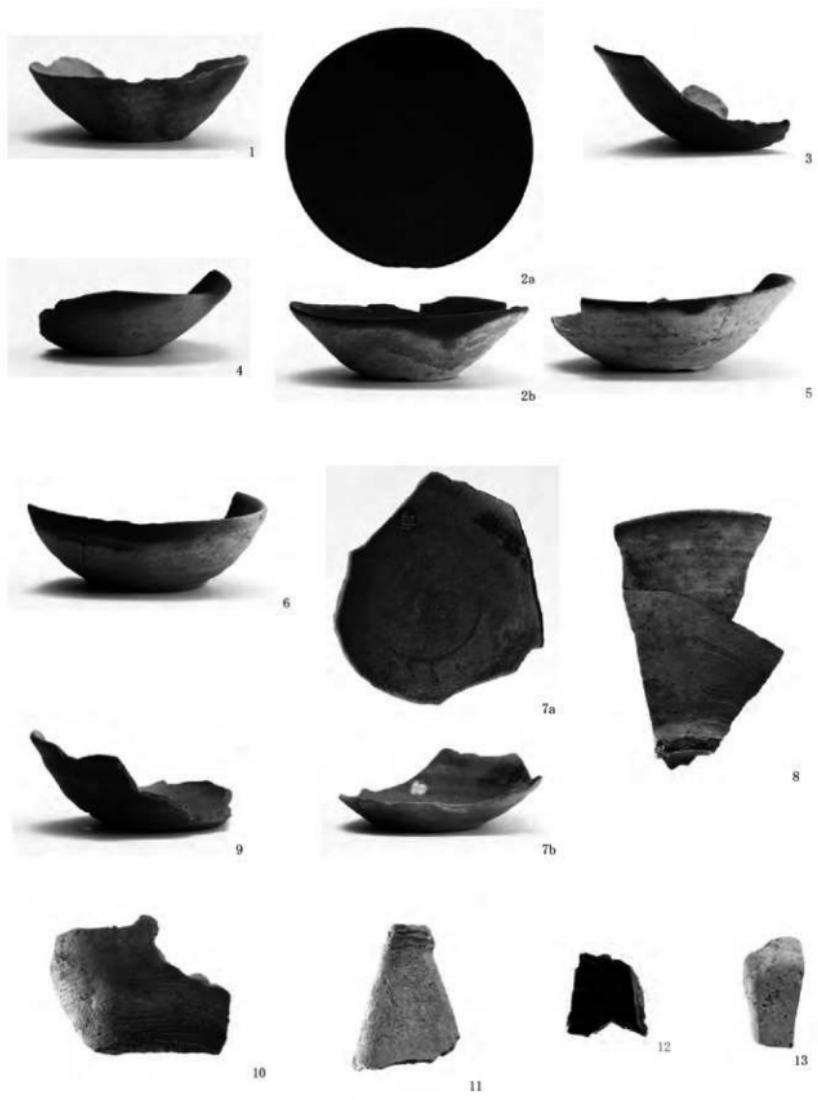
調査区東側壁断面（北西から）

写真図版 4



調査区東壁断面（北東から）

写真図版 5



写真図版 6

VI 市川橋遺跡第92・94次調査

本件では、調査地が隣接する市川橋第92次調査と第94次調査の成果を合わせて報告する。

1 経緯と経過

(1) 市川橋第92次調査

本件は、城南二丁目地内における個人住宅新築工事に伴う本発掘調査である。平成28年4月に、地権者より当該地での個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅部の基礎工事として直径200mmの柱状改良杭27本を深さ8.5mまで打ち込むことから、遺跡への影響が懸念された。このため、地権者と遺跡保存のための協議を行ったが、建物を支えるための地耐力が十分に得られないとの理由から、当初計画の基礎工法で施工することとなつた。4月30日、地権者により調査に関する依頼書及び承諾書の提出を受け、5月23日より現地調査を開始した。

5月23、24日の2日間、重機で現地表面より約2mの深さまで掘り下げ、翌26日より作業員による遺構の検出作業に着手した。その結果、調査区の東半分が南北方向の旧流路によって浸食を受けており、基本層が残るのは西側半分の狭い範囲に限られることが分かった。そのため、調査区西側から検出作業を開始し、5月31日にⅢ層上面で最初の遺構となる整地層(SX3547)と南1道路側溝(C期)を確認した(SX3551)。6月3日、調査区内に測量基準点を設置し、遺構の図面作成に着手した。同7日、Ⅲ層上面の全景写真撮影を行い、IV層上面の検出作業に移った。その結果、調査区北側で小溝(SD3548)および土壌(SK3552)を確認した。9日、遺構の検出最終面となるVII層上面で、南1道路(A・B期)に関連すると思われる溝(SD3549・SD3550)を確認した。VII層の調査終了後、調査区東側の流路跡および木樋の図面を作成し、6月15日に調査区の全景写真を撮影した。6月16日、全ての現場器材の撤収を行い、21日の重機による埋め戻しをもって、現地調査的一切を終了した。

(2) 市川橋第94次調査

本件は、城南二丁目地内における個人住宅新築工事に伴う本発掘調査である。平成28年9月に、地権者より当該地での個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅部の基礎工事として直径500mmのパイル24本を深さ5mまで打ち込むことから、遺跡への影響が懸念された。このため、地権者と遺跡保存のための協議を行ったが、建物を支えるための地耐力が十分に得られないとの理由から、当初計画の基礎工法で施工することとなつた。10月22日、地権者より調査に関する依頼書及び承諾書の提出を受け、11月27日より現地調査を開始した。

11月27、28日の両日、重機で現地表面より約2mの深さまで掘り下げた後、31日より作業員による遺構の検出作業に入った。その結果、11月8日にⅢ層上面で南1道路の南側溝(C期: SD3557)および南北



第1図 調査区位置図

方向の溝（SD3554～3556、SD3558）、ピット（P1～3）を確認した。12月9日、調査区内に測量基準点を設置し、遺構平面図の作成に着手した。12月10日、安全確保のため調査区内の堆土を場外へ搬出した後、翌11日よりこれら遺構の掘り下げに着手した。24日、概ねⅢ層上面の調査が終了したことから、作業をⅣ層（整地層）上面の検出作業に移行し、新たに南北溝（SD3558）とピットを確認した。また調査区の中央から北側では整地層（IV層）が切り、そのまま北へ続く落ち込み（SX3559）を確認した。29日にⅣ層の検出状況の写真を撮影するとともに、調査区の断面図を作成し、12月2日に調査区の全景写真を撮影した。12月8日に現場器材の撤収と重機による埋め戻しを行い、現地調査的一切を終了した。

2 市川橋遺跡第92次調査 調査成果

（1）市川橋遺跡第92次調査層序（第2図）

今回の調査では、現在の表土以下9層の堆積を確認した。

I 1層：現代の盛土層で厚さは約2.2mである。

I 2層：盛土以前の表土・水田耕作土で、厚さは30cmである。

II 層：オリーブ黒色粘質土層で、厚さは20～30cmである。灰白色火山灰のブロックを含む。

III 層：暗緑灰色粘土層である。調査区全面に分布し、炭化物や土器片を多く含む。整地層（SX3547）およびC期南1道路側溝（SD3551）の検出層である。

IV 層：緑黒粘土層である。調査区北側の一部に残る。整地層上面の堆積層と考えられる。

V 層：暗灰色粘質砂層で、厚さ4cm程度である。砂が主体であるが灰色粘土を含んでおり、粘性が高い。調査区北側の一部に残る。整地層上面の堆積層と考えられる。

VI 層：鈍い黄橙色粘土層で、厚さ4～10cmの整地層である。灰色や黒色の小ブロックを含むため、濁っている。調査区北側の一部でのみ観察できる。

VII 層：にぶい黄橙色粘土層で、厚さは40cmである。下層ほど砂が多く含み、砂質土に変化する。地山となる基盤層である。遺構の最終確認面であり、A期およびB期の南1道路側溝を発見した。

（2）市川橋遺跡第92次調査 発見遺構

今回の調査第92次調査では、Ⅲ層上面およびⅣ層、VII層上面で

道路跡、溝跡を発見した。

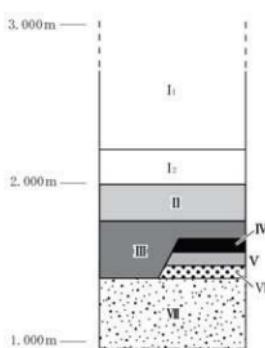
【VII層上面検出遺構】

S X3561南1東西道路跡

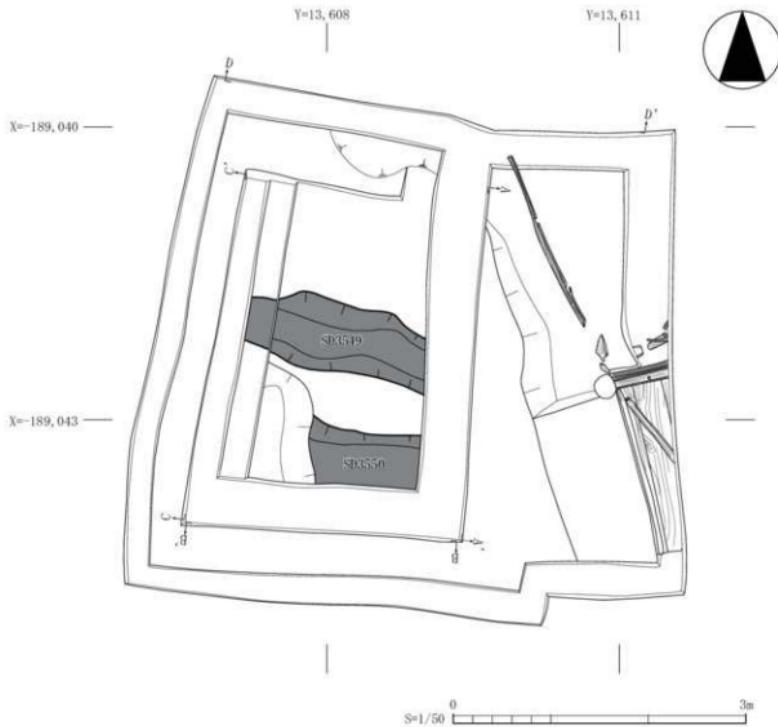
調査区全域が南1東西道路跡である。南端部でⅢ層を介在して南側溝SD3549～3551を確認しており、Ⅲ層に覆われるA・B期、Ⅲ層上面のC期の3時期の変遷があると判断した。路面について最も新しい段階がⅢ層上面の整地SX3547が相当すると考えられるが、Ⅲ層下層については明らかでない。以下、南側溝について時期ごとに記載する。なお、後述するとおり、第94次調査でもⅢ層上面でC期に相当するSD3557南側溝を発見している。

S D3549南1道路南側溝（第3図）

【位置・形態】調査区中央で確認した東西方向の溝跡で、南1道路（A



第2図 層序模式図



第3図 S D 3549・3550南1道路南側溝平面図（VII層上面）

もしくはB期)の南側溝と考えられる。

【重複】重複は無い。

【方向・規模】方向は、西で約17度北に偏している。規模は1.9 m以上、上端は約60～80cmであり、検出面から深さ8cmを測る。底面に比高差はなく、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】オリーブ黒色粘土である。地山VII層由来の小ブロック（径1～5cm）を混入する。

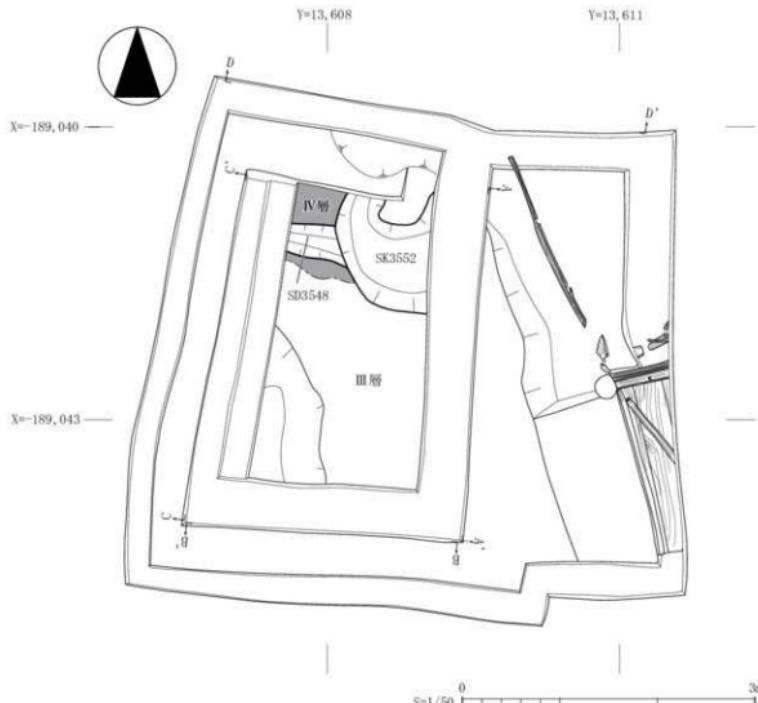
【遺物】須恵器壺、須恵器甕、土師器壺が出土している。

S D 3550南1道路南側溝（第3図）

【位置・形態】調査区中央で確認した東西方向の溝跡で、南1道路（AもしくはB期）の南側溝と考えられる。

【重複】重複は無い。

【方向・規模】溝の南辺が調査区外であり、溝の全容は不明である。残存する北辺で見ると、方向は西で約11度北に偏しており、規模は1.15m以上、上端は約70cm以上である。検出面から深さ15cmを測る。底面に比高差はなく、壁は緩やかに立ち上がる。



第4図 IV層上面検出遺構平面図

【埋土】オリーブ黒色粘土である。地山VII層由来の小ブロック（径1～5cm）を混入する。

【遺物】出土していない。

【IV層上面検出遺構】

S D3548溝跡（第4図）

【位置・形態】調査区北側で確認した東西方向の溝である。

【重複】東側でSK3552と重複し、それよりも古い。

【方向・規模】規模は60cm以上、上端は約40cmで、深さは検出面から12cmを測る。

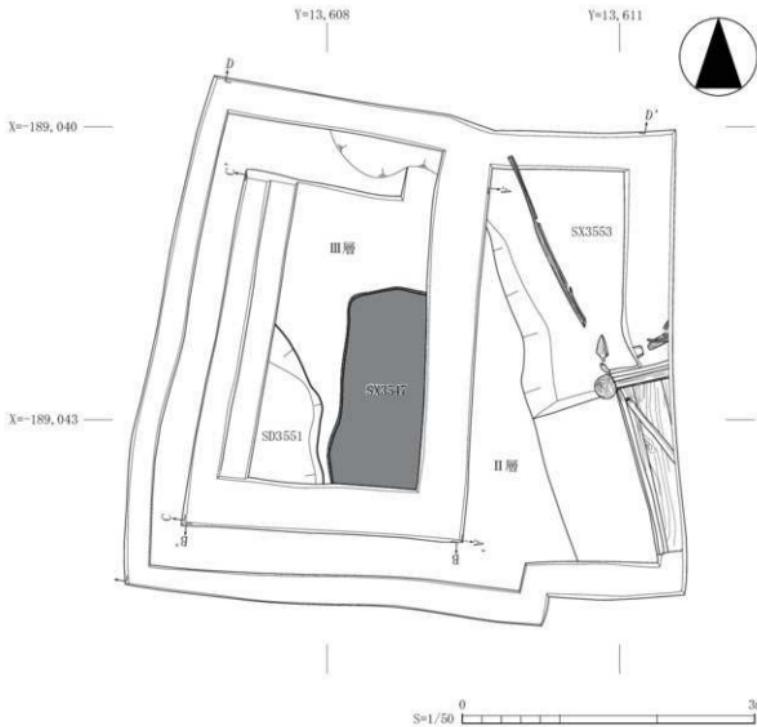
【埋土】暗緑灰色粘質土（III層）が流れ込み、遺構を覆う。

【遺物】出土していない。

S K3552土壤（第4図）

【位置・形態】調査区北東角で確認した馬蹄形の浅い土壤である。

【重複】SD3548と重複し、それよりも新しい。



第5図 II・III層上面検出遺構平面図

【方向・規模】規模は長辺で1.3m以上、短辺で1mである。深さは検出面から10cmを測る。

【埋土】暗緑灰色粘質土（III層）が流れ込んでいる。

【遺物】須恵器甕、土師器壺（B類）、土師器甕（A・B類）が出土している。

【II層上面検出遺構】

S X3547整地層（第5図）

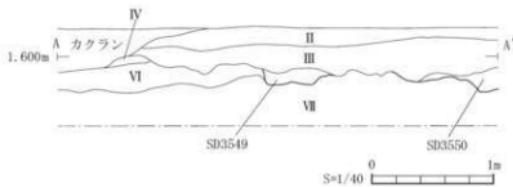
【位置・形態】調査区南東部で確認した整地層である。南北では調査区の南端から中央にかけて、東西では東端から中央にかけて確認できる。

【重複】重複は無い。

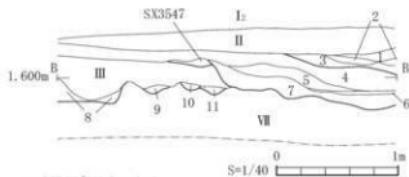
【方向・規模】規模は南北の長辺で2m、東西の短辺で80cm、厚さは5cm前後である。調査区外への広がりを南壁の一部で確認できる。

【土質】暗緑灰色粘質土に黄橙色のブロックを多量に混入する。

【遺物】須恵器壺（II・III類）、須恵器甕、土師器（B類）、土師器甕（A・B類）が出土している。

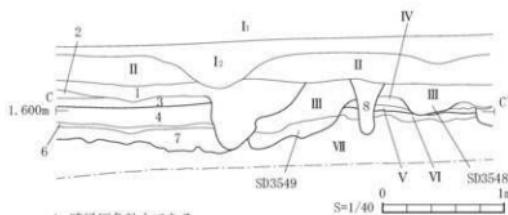


第6図 調査区中央断面図



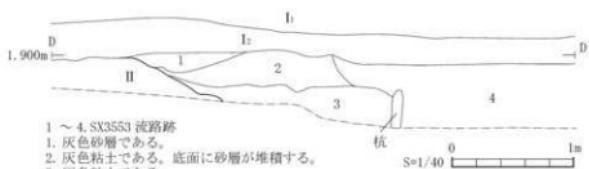
1. 暗緑灰色粘土である。
2. 灰オリーブ色砂質土である。
3. 暗緑灰色粘土で炭化物を含んでいる。
4. 暗緑灰色粘土の水性堆積で、灰白色火山灰と炭化物の沈殿がある。
- 5 ~ 7. SX3551 (南1道路 南側溝)。
- 8, 9, 11. オリーブ黒色粘土で、VII層由来の地山ブロック（径1～5cm）を含む。
10. 喜馬色粘土で均質である。

第7図 調査区南壁断面図



1. 暗緑灰色粘土である。
2. 灰オリーブ色砂質土である。
3. 暗緑灰色粘土で炭化物を含んでいる。
- 4 ~ 7. SX3551 (南1道路 南側溝)。
8. 暗緑灰色粘土で、VII層に由来するブロック（径1～5cm）を多く含む。

第8図 調査区西壁断面図



- 1 ~ 4. SX3553 流路跡

1. 灰色砂層である。底面に砂層が堆積する。

2. 灰色粘土である。

3. 灰色粗砂である。調査区東側の SX3553 を覆う。

第9図 調査区北壁断面図

S D3551南1道路南側溝（第5図）

【位置・形態】調査区南西角で確認した土壌状造構であるが、西隣接地で実施された第94次成果との対応関係より、南1道路（C期）の南側溝と推測される。調査区外の南側と西側に広がっている。

【重複】重複は無い。

【方向・規模】調査区外へ広がるため、全容は不明であるが、確認できる範囲での規模は、長軸1.5m以上、短軸80cm以上、深さは25cm以上である。

【壁】底面から緩やかに立ち上がる。

【埋土】南・西断面で観察すると3層に分けることができる（第7図）。5は暗緑灰色粘質土で水性堆積による炭化物の沈殿がみられる。6は緑黒色粘土で水性堆積の沈殿層である。7は暗緑色粘土で底面にVII層の小ブロックを混入している。

【遺物】須恵器壺（III類）、須恵器甕、土師器壺（B II類）、土師器甕（A・B類）、馬の歯が出土している。

〔II層上面検出遺構〕

S X3553流路跡（第5図）

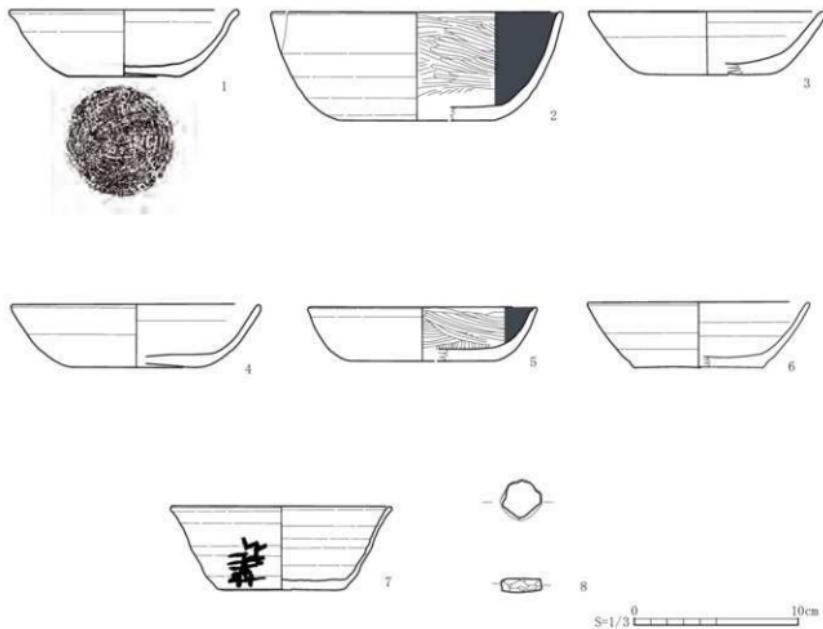
【位置・形態】調査区東側で確認した南北方向の流路跡である。

【重複】重複は無い。

【方向・規模】方向は北で約15度西に偏する。規模は南北で4.1m以上、幅は1.5m以上である。深さは検出面から50cmを測る。調査区南側では流路の中央部分に木桶が設置されている。木桶の東側は調査区外のため確認できないが、規模は南北1.9m、幅は60cm以上、深さは20cmである。床面には3枚の板材を並べ、側板は厚さ4cmの1枚板を使用している。木桶の北端側板は上下2枚の板を差し込んで塞がれており、中央上部には水抜きのためと思われる直径5cmの穴が開けられている。固定されておらず、可動式の貯水施設と考えられる。木桶の北側延長線には構造物がなく、土留め状の板が杭打ちで立てられ、調査区の外へと延びる。それぞれの材の接合には、すべての部分で和釘が使用されていることから、明治以前の遺構の可能性が高い。

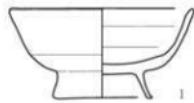
【埋土】灰色砂である。

【遺物】出土していない。



番号	種類	遺構	層位	特徴		口径	底径	器高	写真	図版	登録番号	備考
				外面	内面							
1	須恵器・坏		III 層	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り	ロクロナデ 3/24	(13, 8) 3/24	6.7 24/24	4.0	13-1	R6	IIa類 ヘラガキ「×」	
2	土師器・坏		III 層	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り	ヘラミガキ 4/24	(17, 4) 8/24	9.4 8/24	6.6	13-2	R8	BIII類	
3	須恵器・坏	SX3547		ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り	ロクロナデ 5/24	(14, 4) 14/24	9.2 14/24	3.9	13-3	R2	III類	
4	須恵器・坏	SX3547		ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り	ロクロナデ 4/24	(15, 0) 4/24	8.0 9/24	3.8	13-4	R4	III類	
5	土師器・坏	SX3547		ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り	ヘラミガキ 12/24	(13, 8) 12/24	9.6 16/24	3.3	13-5	R9	B I類 線刻あり	
6	須恵器・坏	SX3551		ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り	ロクロナデ 5/24	(13, 5) 9/24	7.8 9/24	4.0	13-6	R3	III類	
7	須恵器・坏		III 層	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り	ロクロナデ 14/24	(13, 5) 24/24	7.7 24/24	5.1	13-7	R1	III類 墨書「□」	
8	土器片製円盤		II 層	須恵器窯転用	最大径2.55 最大厚0.85			5.1	13-9	R12		

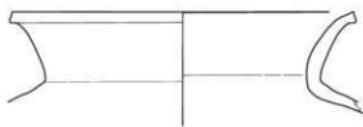
第10図 S X3547・3551、II・III層出土遺物



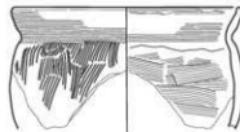
1



2



3



4



5



6



0 10cm
S=1/3

(単位: cm)

番号	種類	層位	特徴		口径	底径	格	器高	写真	登録番号	備考
			外面	内面							
1	須恵器 高台付杯	III 層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ロクロナデ	(11.2) 21/24	6.1 24/24	5.5	13-8	R7		
2	土師器 甕	III 層	ロクロナデ	ロクロナデ	(27.6) 5/24	—	—	13-10	R14	B類	
3	須恵器 甕	III 層	ロクロナデ	ロクロナデ	(21.0) 9/24	—	—	13-11	R5		
4	土師器 甕	III 層	口縁部: ナデ→ヨコナデ 体部: ハケメ	ヨコナデ	(13.8) 7/24	—	—	13-12	R10	B類	
5	土師器 甕	III 層	ロクロナデ→ヘラケズリ 底部: ヘラ切り	ロクロナデ→ ヘラナデ	—	6.3 24/24	—	13-13	R11	B類	
6	石製品	III 層	先端部に使用痕跡	長さ: 18.65 最大幅: 5.95 最大厚: 4.9				13-14	R13		

第 11 図 III 層出土遺物

3 市川橋遺跡第94次調査 調査成果

(1) 市川橋遺跡第94次調査層序（第2図）

今回の調査では、現在の表土以下7層の堆積を確認した。

I 1層：現代の盛土層で厚さは約2.4mである。

I 2層：盛土以前の表土・水田耕作土で、厚さは30cm前後である。

II 層：オリーブ黒色粘土層で、厚さは20cmである。灰白色火山灰の

ブロックを含む。

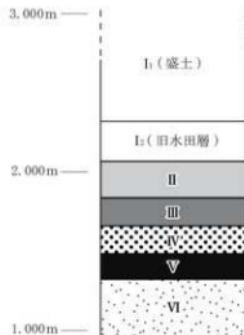
III 層：暗緑灰色粘土層で、厚さは20cmである。遺構検出層であり、

南1道路南側溝（C期・S D3557）、南北方向の溝（S D3558）、ピット1～3を確認した。

IV 層：灰色粘土層で、厚さは20cmある。浅黄色の小ブロック1～3cmからなる人為整地層である。遺構検出層であり、整地層を切る落ち込み（S X3559）、南北方向の溝（S D3560）を確認した。
調査区北側ではS X3559の落ち込みによって削平されている。

V 層：黒色粘土層で、厚さ10～20cmである。VI層に由来する浅黄色ブロック（径5～10cm）を多く含む。

VI 層：灰オリーブ色粘土層で厚さは40cm以上である。本調査区の地山層である。上面は凹凸を繰り返し、乱れている。



第12図 層序模式図

(2) 市川橋遺跡第94次調査 発見遺構

今回の調査では、III層上面およびIV層で遺構を発見した。

【IV層上面検出遺構】

S X3559（第11図）

【位置・形態】調査区を東西に縦断する北側への落ち込みである。

【重複】S D3560と重複し、それよりも古い。

【方向・規模】落ち込みの上端でみると、方向は西で約12度北に偏している。立ち上がりは確認できず、底面は平坦に調査区外北へ広がる。規模は東西上端で4.6m以上、落ち込みの南北幅は4m以上である。落ち込みは緩やかで、IV層からVI層に達する。底面の比高差は少なく、緩やかに波打っている。深さはIV層検出面から東側で50cm、西側で20cmであり、西から東へ緩やかに低くなる。

【埋土】III層（暗緑灰色粘質土）の流れ込みによって覆われる。

【遺物】出土していない。

S D3560溝跡（第11図）

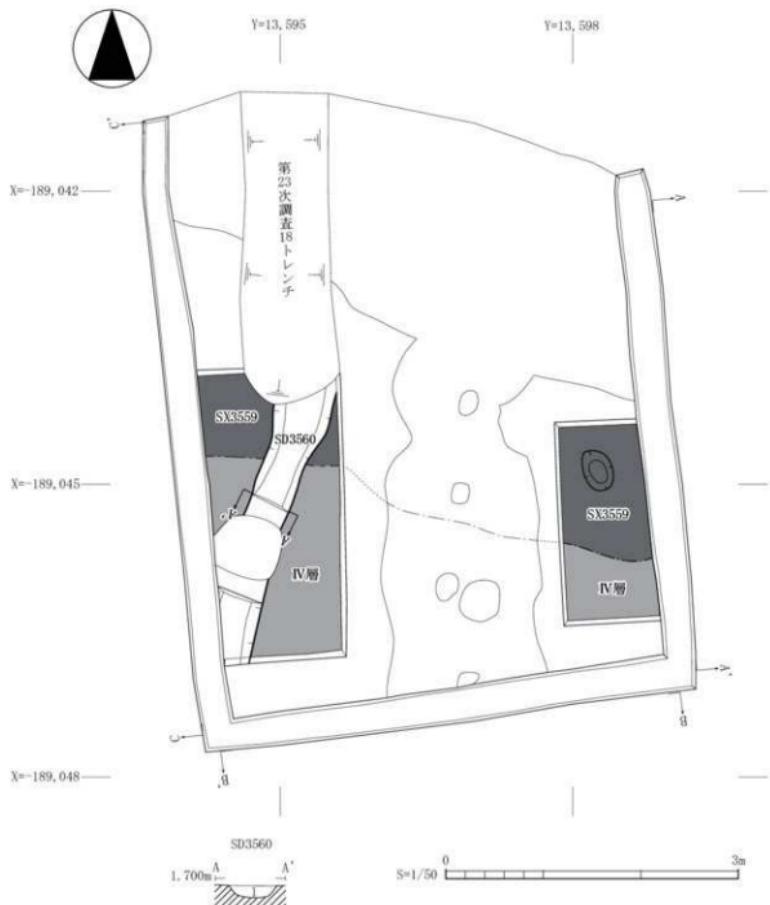
【位置・形態】調査区西側で確認した南北方向の溝跡である。北側は搅乱によって壊されている。

【重複】S X3559と重複し、それより新しい。

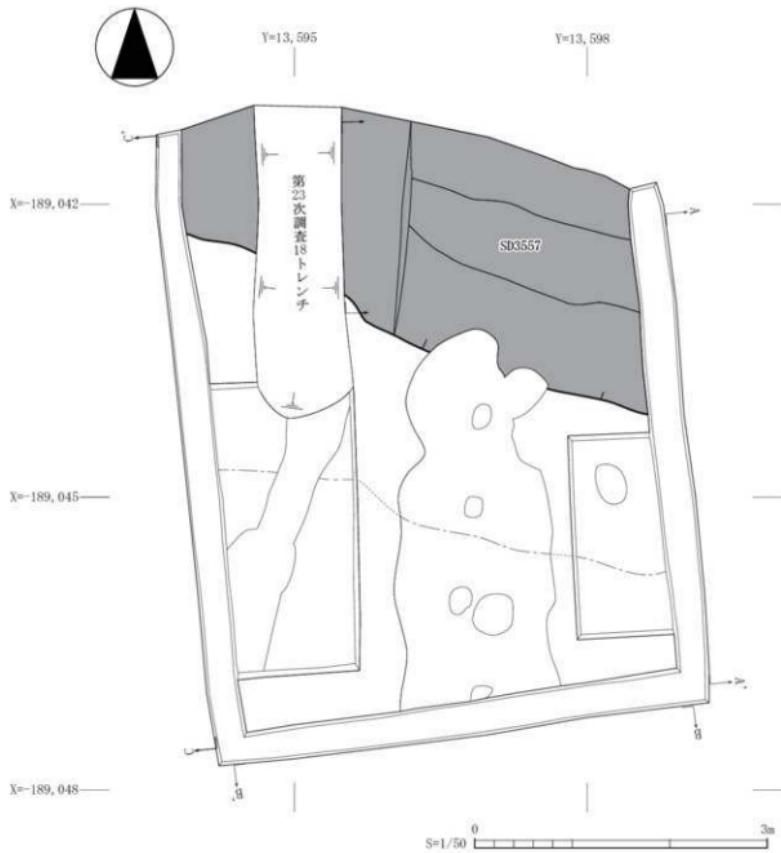
【方向・規模】方向は、北で約30度東に偏している。規模は3m以上、上端は約40～50cmであり、検出面から深さ15cmを測る。底面に比高差はなく、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】黒褐色土で、全体に少量の炭化物を混入する。

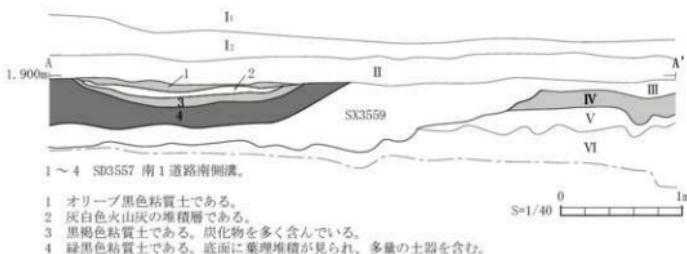
【遺物】土師器坏（B類）、土師器壺（A類）、須恵器坏が出土している。



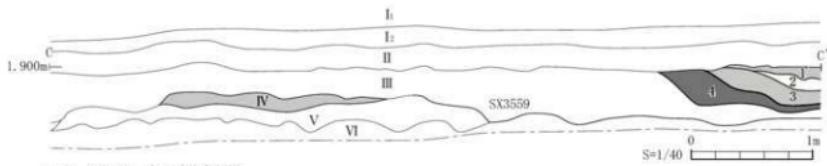
第13図 IV層（整地層）上面検出遺構平面図



第14図 III層上面SD3557溝跡南1道路南側溝検出状況



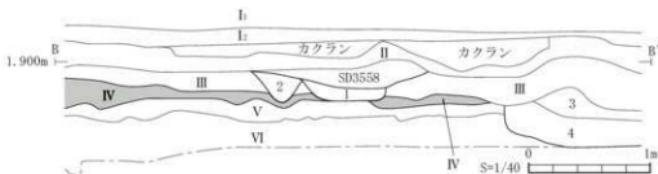
第15図 調査区東壁断面図



1~4 SD3557 南1道路南側溝。

- 1 オリーブ黒色粘質土である。
- 2 灰白色火山灰の堆積層である。
- 3 黒褐色粘質土である。炭化物を多く含んでいる。
- 4 緑黒色粘質土である。底面に葉理堆積が見られる。

第16図 調査区西壁断面図



- 1 灰白色粘質土である。全体に地山小ブロック（径1~3cm）を含む。
- 2 オリーブ黒色粘質土である。全体に地山小ブロック（径1~3cm）を含む。調査区平面での検出はない。
- 3 灰色粘質土である。水性堆積層で全体に炭化物を含む。調査区平面での検出はない。
- 4 灰色粘質土である。水性堆積層である。調査区平面での検出はない。

第17図 調査区南壁断面図

【III層上面検出遺構】

S D3557南1道路南側溝（第12図）

【位置・形態】 調査区北側で確認した東西方方向の溝で、南1道路の南側溝（C期）と考えられる。北辺の立ち上がりは調査区外であるため、全容は不明である。

【重複】 重複は無い。

【方向・規模】 方向は西で約20度北に偏している。規模は全長5m以上、上端幅は約2.1m以上で、深さは検出面から60cmを測る。底面から約27度の角度で立ち上がる。

【埋土】 4層に細分され、灰白色火山灰の堆積層を含む。底面に葉理状堆積が見られ、多量の土器を含む。

【遺物】 土師器（B I・B Ia・B II・B IIc・B V・V類）、土師器甕（A・B類）、須恵器壺（I・II・IIa・III・V類）、須恵器瓶、須恵器甕、製塙土器、平瓦（II Ba類）、漆紙文書、骨が出土している。

S D3558溝跡（第16図）

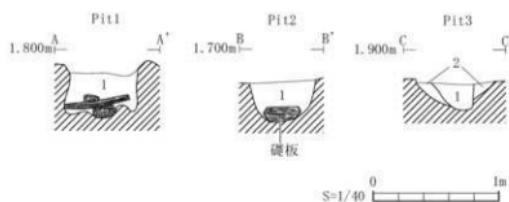
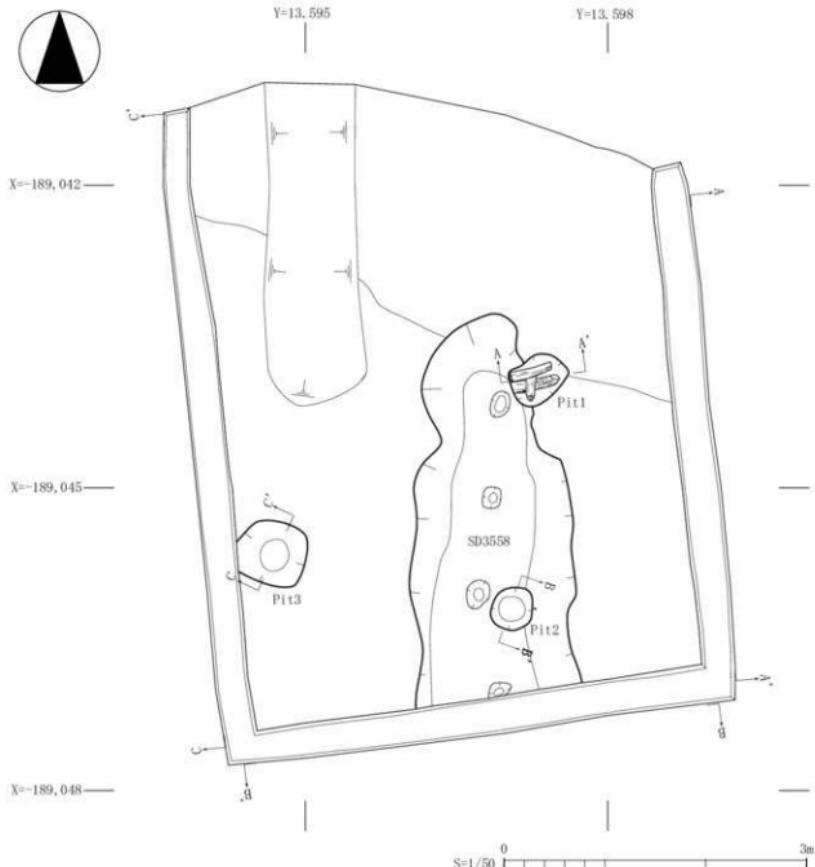
【位置・形態】 調査区南側で確認した南北方向の溝である。調査区の中央から南へ延びる。

【重複】 SD3557と重複し、それよりも新しい。

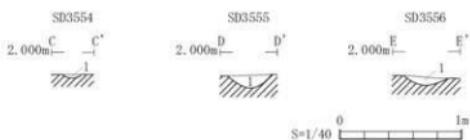
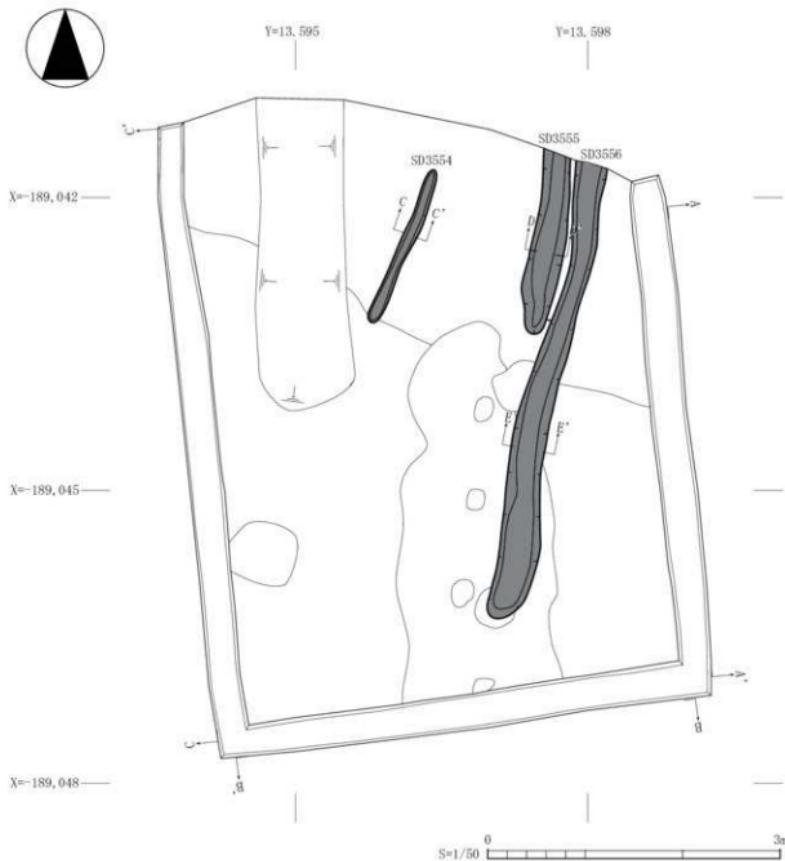
【方向・規模】 規模は全長1.5m以上、上端幅は最も広い部分で65cmである。中央部の深さは検出面から15cmを測る。壁は約20度の角度で非常に緩やかに立ち上がる。

【土質】 オリーブ黒色粘質土である。全体に均質で、多量の炭化物を含む。

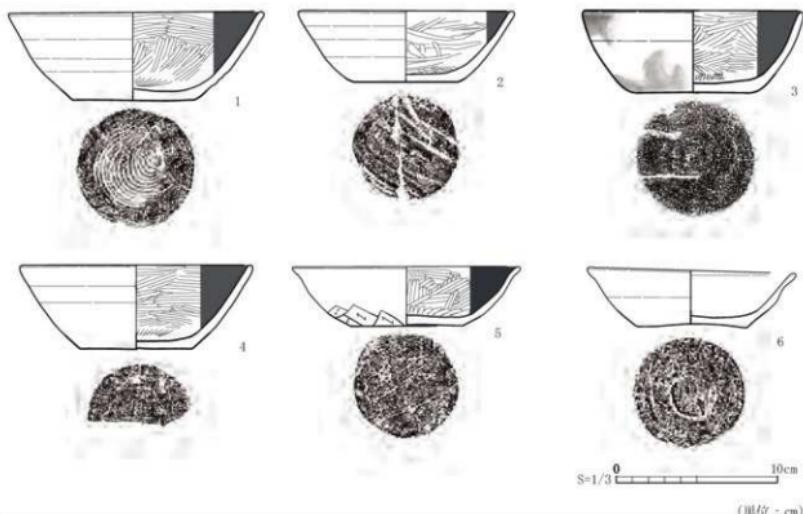
【遺物】 土師器壺（B II類）、土師器甕（B類）、須恵器（III類）、須恵器甕が出土している。



第18図 III層SD3558溝跡・Pit1～3平面・断面図



第19図 III層上面 SD3554・3555・3556溝跡平面・断面図



(単位: cm)

番号	種類	遺構	層位	特徴		口径	底径	器高	写真回版	登録番号	備考
				外面	内面						
1	土師器 坏	SD3557	4層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ロクロナデ	(15.5) 18/24	7.4 24/24	5.5	14-1	R2	B II c類 油煙付着
2	土師器 坏	SD3557	4層	ロクロナデ-手持ちヘラケズリ 底部: 回転ヘラ切り	ヘラミガキ ・黒色処理	(13.3) 19/24	6.4 24/24	4.4	14-2	R3	B II 類
3	土師器 坏	SD3557	4層	ロクロナデ 底部: 手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ ・黒色処理	(13.5) 15/24	7.0 21/24	5.0	14-3	R12	B I 類 外面油煙付着
4	土師器 坏	SD3557	4層	ロクロナデ 底部: 手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ ・黒色処理	(14.2) 7/24	6.8 11/24	5.2	14-4	R13	B II 類
5	土師器 坏	SD3557	4層	ロクロナデ 底部: 手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ ・黒色処理	(13.9) 2/24	6.9 24/24	3.7	14-5	R19	B II 類
6	須恵器 坏	SD3557	4層	ロクロナデ 底部: 回転ヘラ切り	ロクロナデ	(12.8) 12/24	6.9 24/24	3.5	14-6	R1	B II a類

第20図 SD3557溝跡出土遺物(1)

ピット1 (第16図)

【位置・形態】調査区中央で確認したピットである。

【重複】SD3557、SD3558、SD3556と重複する。SD3557、SD3558より新しく、SD3556より古い。

【方向・規模】規模は長軸50cm、短軸40cmである。中央部の深さは検出面から30cmを測る。壁は底面から垂直に立ち上がるが、材が壁に当たる部分は横方向に拡幅されている。ピット内には、半蔵した丸太材が交互に5段重ねて配置され、材の隙間に平瓦(II A類)の破片1点が充填される。底面には凹凸があり、最下段の材は底面に沈み込んでいる。

【土質】暗灰色粘質土で、炭化物を多く含む。

【遺物】土師器坏(B II類)、土師器甕(B類)、須恵器(III類)、須恵器甕、平瓦(II A類)が出土している。

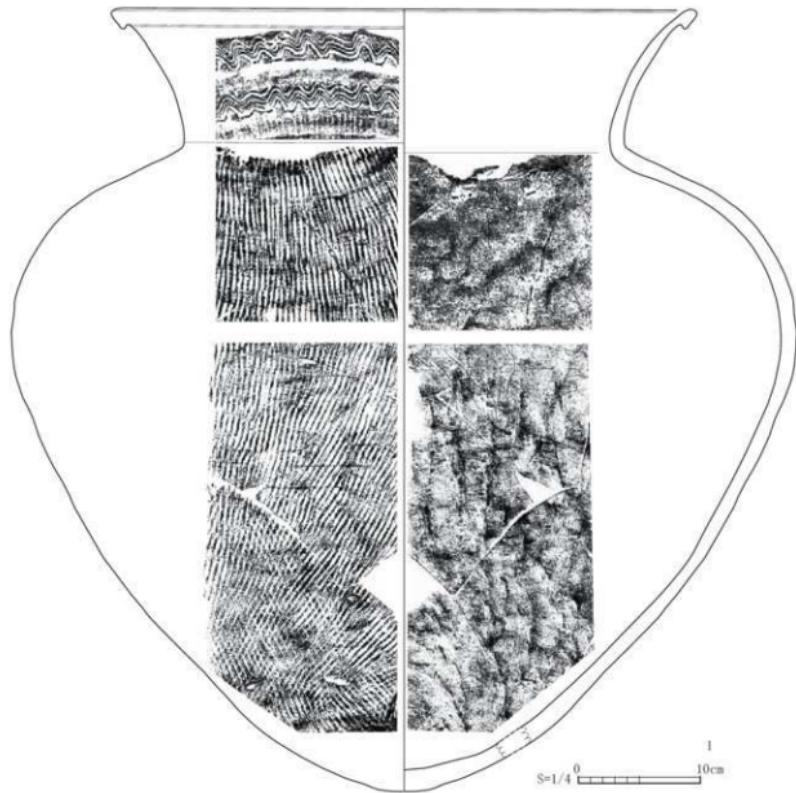
ピット2 (第16図)

【位置・形態】調査区南側で確認したピットである。



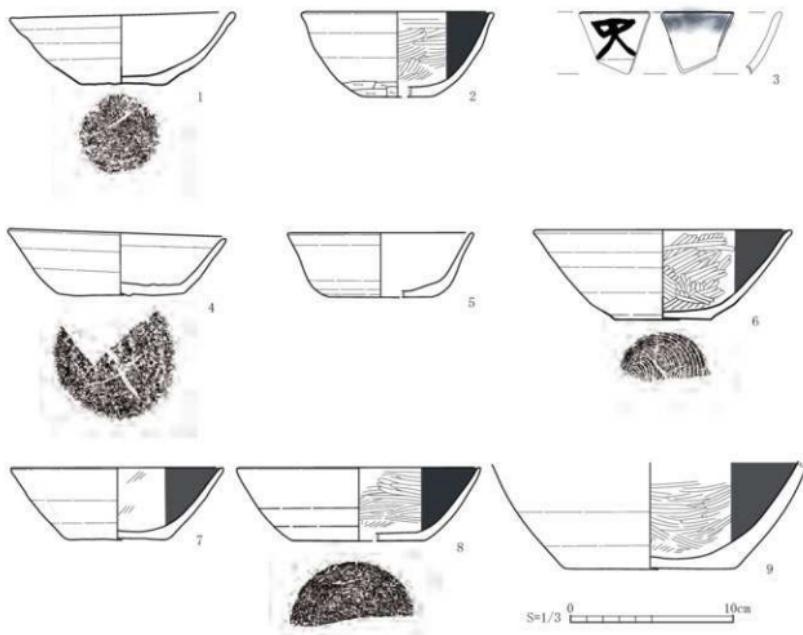
番号	種類	遺構	層位	特徴		口径 底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
				外面	内面					
1	須恵器 壺	SB3557	4層	口クロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	12.1 24/24	5.7 24/24	3.7	14-7	R24 V類 漆紙付着
2	須恵器 甕	SD3557	4層	口クロナデ→ヘラケズリ ヘラナデ	ロクロナデ→ 3/24	(19.7) 3/24	—	—	15-11	R21 B類

第 21 図 S D3557 滝跡出土遺物 (2)



番号	種類	遺構	層位	特徴		口 径	様 式	底 径	器 高	写真 図版	登録 番号	備考
				外面	内面							
1	須恵器・甕	SD3557	4 層	口縁部：波状文 底部：平行叩き	当て具痕跡	47.0 24/24	—	64.8	—	R23	—	(単位：cm)

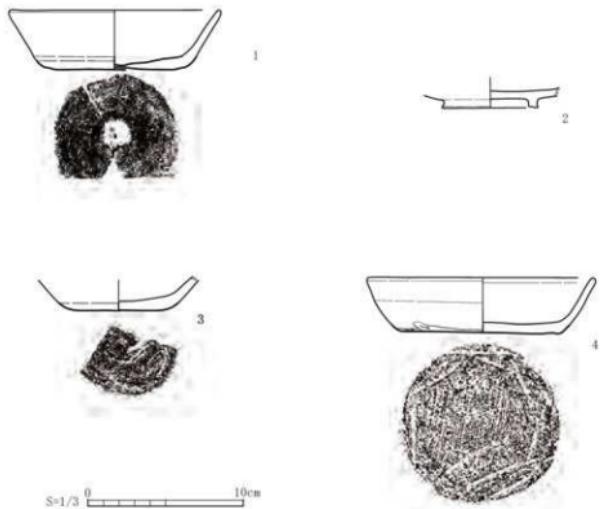
第22図 SD3557溝跡出土遺物（3）



(単位: cm)

番号	種類	遺構	層位	特徴		口 径	残 存率	底 径	残 存率	器高	写真 図版	登録 番号	備 考
				外面	内面								
1	須恵器 壺	SD3557	2 層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ロクロナデ	(13.8) 22/24	5.3 24/24	4.3	4.3	15-1	R4	V類	
2	須恵器 壺	SD3558		ロクロナデ 底部: 手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ ・黒色処理	(11.5) 4/24	4.4 11/24	5.2	5.2	15-2	R15	III類	
3	須恵器 壺	SD3558		墨書きあり	油煙痕	—	—	—	—	15-3	R6	墨書き文字不明	
4	須恵器 壺	SD3558		ロクロナデ 底部: 回転ヘラ切り	ロクロナデ	(13.2) 5/24	7.5 16/24	3.8	3.8	15-4	R11	III類 底部に 「×」の線刻あり	
5	須恵器 壺	SD3558		ロクロナデ	ロクロナデ	(11.3) 6/24	6.3 8/24	3.9	3.9	15-5	R16	I類	
6	土師器 壺	SD3558		ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ヘラミガキ ・黒色処理	(15.7) 5/24	5.8 10/24	5.5	5.5	—	R20	BV類	
7	土師器 壺		III 層	ロクロナデ 底部: 回転ヘラ切り	ヘラミガキ ・黒色処理	(13.0) 3/24	6.3 13/24	4.4	4.4	15-6	R7	BV類	
8	土師器 壺		III 層	ロクロナデ 底部: 回転ヘラ切り	ヘラミガキ ・黒色処理	(14.8) 4/24	8.0 11/24	4.5	4.5	15-7	R9	B I類	
9	土師器 壺		III 層	ロクロナデ 底部: 手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ ・黒色処理			10.4 11/24		—	R22	B類	

第23図 S D3557・3558溝跡、III層出土遺物



(単位: cm)

番号	種類	遺構	層位	特徴		口 様	底 残存率	径 残存率	器高	写真 図版	登録番号	備考
				外面	内面							
1	須恵器 坏		III 層	口クロナデ 底部：回転ヘラ切り	ロクロナデ	口	(13.6) 3/24	8.1 14/24	3.85	—	R8	III類 内面底部に線刻あり
2	白磁 皿		II 層			底	—	6.2	—	15~9	R17	
3	須恵器 坏	P7		口クロナデ 底部：回転ヘラ切り	ロクロナデ	口	6.4 8/24	—	15~10	R10	III類 底部に「務」の略字 墨書きあり	
4	須恵器 坏	SD3551		口クロナデ 底部：静止糸切り	ロクロナデ	底	14.5 24/24	10.2 24/24	3.6	15~8	R5	II b類

第24図 SD3551溝跡、P7、II層、III層出土遺物

【重複】 SD3558と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】 規模は長軸50cm、短軸40cmである。中央部の深さは検出面から30cmを測る。壁は底面から急角度で立ち上がる。底面には礎板と思われる板材が配置される。

【土質】 暗オリーブ灰色粘質土で、炭化物を多く含む。

【遺物】 出土遺物は無い。

ピット3（第16図）

【位置・形態】 調査区南西で確認したピットである。

【重複】 SD3558と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】 溝丸の方形であり、長軸70cm、短軸60cmである。掘り方の壁は緩やかに立ち上がる。柱抜取り穴がある。

【土質】 掘り方の埋土は黒褐色粘質土で、IV層由来のブロックを多く含む。柱抜取り穴は黒褐色粘質土である。どちらも炭化物を多く含む。

【遺物】 須恵器（Ⅲ類）が出土している。

SD3554溝跡（第17図）

【位置・形態】 調査区北側で確認した南北方向の溝である。

【重複】 SD3557と重複し、それらよりも新しい。

【方向・規模】 方向は北で約23度東に偏している。規模は全長1.7m、上端幅は約15cmで、深さは検出面から4cmを測る。断面はレンズ状を呈しており、壁は非常に緩やかに立ち上がる。

【埋土】 暗オリーブ灰色粘質土で、縮りがある。少量の炭化物を含む。

【遺物】 土師器が出土している。

SD3555溝跡（第17図）

【位置・形態】 調査区北側東寄りで確認した南北方向の溝である。北側は調査区外へ延びる。

【重複】 SD3557と重複し、それらよりも新しい。

【方向・規模】 方向は北で約12度東に偏している。規模は全長4.6m以上、上端幅は約35cmで、深さは検出面から6cmを測る。断面はレンズ状を呈しており、壁は非常に緩やかに立ち上がる。

【埋土】 暗オリーブ灰色粘質土で、灰白色火山灰を多く含む。

【遺物】 出土遺物はない。

SD3556溝跡（第17図）

【位置・形態】 調査区北側で確認した南北方向の溝である。北側は調査区外へ延びる。

【重複】 SD3557、ピット1、SD3558と重複し、それらよりも新しい。

【方向・規模】 方向は北で約7度東に偏している。規模は全長1.9m、上端幅は約30cmで、深さは検出面から10cmを測る。断面はレンズ状を呈しており、壁は非常に緩やかに立ち上がる。

【埋土】 暗緑灰色粘質土である。炭化物を多量に含んでいる。

【遺物】 出土遺物はない。

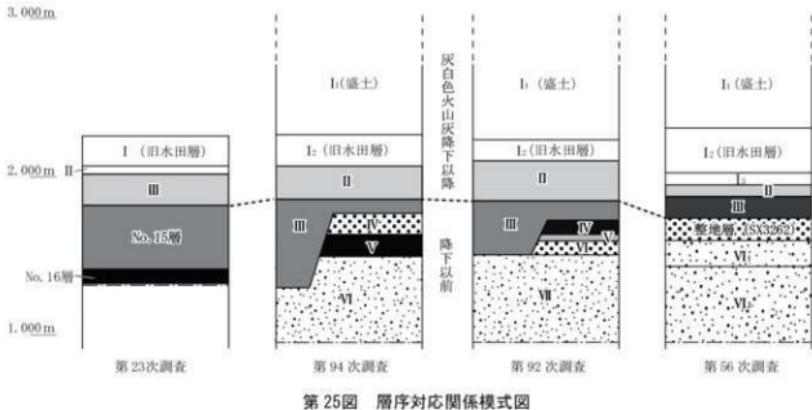
4 まとめ

(1) 調査区の層序と周辺の調査区との対応関係

初めに、今回の調査と過去の調査地との位置関係について整理する（第25図）。今回の第92・94次調査地はそれぞれ約10mの距離で東西に隣接する。第92次調査地の東側10mには第56次調査地が位置し、南1道路が発見されている。今回の第92・94次調査地の北側市道部分は第28次調査区（D102区）に該当し、灰白色火山灰降下以降の南1道路が発見されている。また、第23次調査のサブトレンドが今回の第94次調査地と重複している。第11図中の北西の搅乱がその調査跡で、今回の調査で発見した南1道路側溝は、その際にもほぼ同じ地点で確認している。この第23次調査の成果については、後述する（5）で詳しく触れる。

それぞれの土層を比較したのが、第25図である。第92・94・23次調査の基本層位について見てみると、対応関係はほぼ一致している。上層から順に、現代の水田耕作土の直下に灰白色火山灰ブロックを含むII層（オリーブ黒色粘土；厚さ20～30cm、23次：III層）、灰白色火山灰の降下以前の自然堆積層であるIII層（暗緑灰色粘土層；10～20cm、23次：No.15層）、整地層（92次：VI層、94次：IV層）、そして地山層（92次：VII層、94次：VI層）となる。

これらを10m東の第56次の層位と比較すると、基本層位に2点の違いが認められる。ひとつは、第56次調査地に分布するIII層（灰白色火山灰降下以降）が第92・94次調査地にはない点であり、二つ目は、周辺の調査地では一般的ではない河川堆積（III層：灰白色火山灰降下以前）が認められる点である。今回の調査地周辺に氾濫原となる河川等が存在していたか、もしくはそれに類似する環境があったことが推測される。

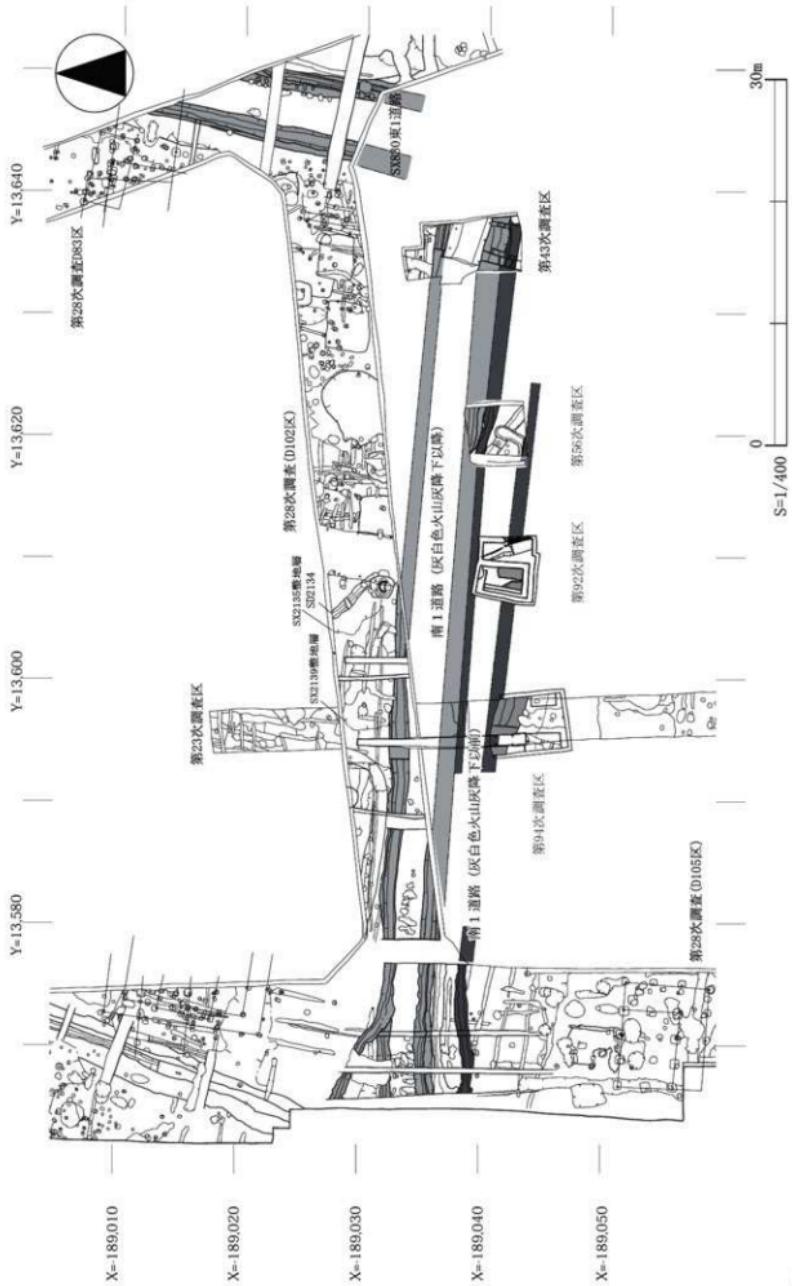


第25図 層序対応関係模式図

(2) 第92・94次調査検出のIII層について

III層は第92・94次の両調査区で確認した河川堆積等によると推測される層位である。今回の調査ではこのIII層を介在し、その上面と下層でSD3561南1道路側溝を発見した。したがって、これらの造構年代を考えるにあたっては、III層の堆積時期について考える必要がある。

まず、III層と造構の関係を見る。94次調査ではIII層上面でSD3557南1道路側溝（C期）を確認して



第26図 南1道路模式図

		第92次調査		第94次調査			
		III層	SD3557	SD3557 1層	SD3557 2層	SD3557 3層	SD3557 4層
土師器	杯	A					
		B I	2	1		1	2
		B II	5	9			5
		B III	1				
		B IV					
	甕	B V	7	5		2	3
		底径/口径比	0.51	0.51			0.48
	須恵器	器高/口径比	0.33	0.32			0.33
		A	5		1		
		B	36	70	4	9	22
		I	1		1	1	1
		II	11	5	1		2
		III	8	2	1	1	2
		IV					
		V	2	2		1	1
		底径/口径比	0.57		0.38		0.50
		器高/口径比	0.37		0.30		0.28

*第92次調査 SD3549・3550の出土遺物は無い

第27図 第92・94次調査 出土遺物集計表

いる（第14図）。また両調査区共にIII層が整地層（IV層）を覆っている。94次調査区では整地層から切り込む落ち込み（SX3559）に流れ込んでいる（第15・16図）。堆積状況を見ると、全体が均質で乱れないことから、整地層の形成後に一定の時間経過を経て堆積したことが推察される。また、III層上面で発見された南1道路側溝の埋土中に灰白色火山灰の自然堆積が見られることや、後述するとおりIII層出土土器の中にも須恵系土器が全く含まれていないことから、堆積時期の下限を9世紀後半以前に求めることができる。

次に出土遺物の傾向を見る。第92次調査のIII層からは、土師器壺・甕、須恵器壺・甕、高台付壺、瓶が出土している。土師器壺は145点、須恵器壺が111点である。土師器については、磨滅により分類不明な105点を除くと全てB類である。底部の切り離しや再調整が確認できるものとしては、B I類が2点、B II類が5点、B III類が1点、B V類が7点出土している。器形が分かるものは2点（B IIa・B III類）あり、平均すると底径/口径比が0.51で、器高/口径比が0.33である。須恵器壺は111点出土しており、底部の切り離しや再調整が確認できるものとしては、I類が1点、II類が8点、IIa類が3点、III類が8点出土している。器形がわかるものはIII類に1点あり、底径/口径比が0.57で、器高/口径比が0.37である。

第94次III層からは、土師器壺・甕、須恵器壺・甕、平瓦、砥石、製塙土器、双耳壺が出土している。土師器壺は30点、須恵器壺が25点出土している。土師器については、磨滅した1点を除き全てB類である。底部の切り離しや再調整が確認できるものとしては、B I類が1点、B II類が9点、B V類が5点出土している。器形が分かるものは2点（B V・B I類）あり、平均すると底径/口径比が0.51で、器高/口径比が0.32である。須恵器壺は25点出土しており、底部の切り離しや再調整が確認できるものとしては、II類が4点、IIa類が1点、III類が2点、V類が2点出土している。器形がわかるものはない。

これらからIII層に含まれる土器類の傾向は次のとおりである。土師器壺については再調整が施されるものの割合が僅かに高く、須恵器ではII・III類の占める割合が極めて高いことが分かる。このような土器群は、須恵器壺に限ってみれば延暦9～24年の間に位置づけられている市川橋遺跡 SX1351D・3層出土土器に近似しているが、土師器壺では9世紀中葉頃の年代が示されている多賀城跡 SK2167土壤に比べBV類の占める割合が高く、それよりも新しい傾向が伺える。III層堆積の下限年代については先に述べたとおり9世紀後半以前に求めることができ、かつ出土遺物の傾向が多賀城跡 SK2167出土土器群より新しい

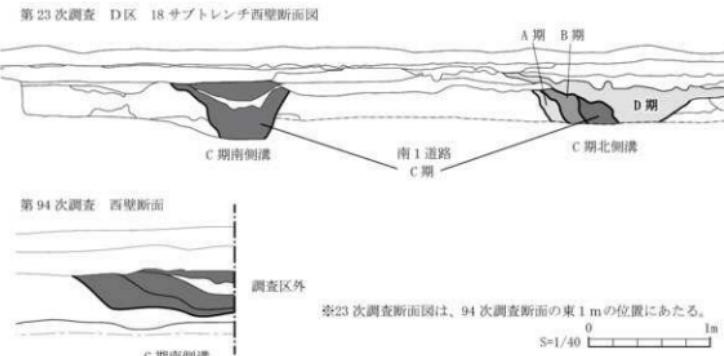
様相が見られることから、堆積時期を9世紀の中葉から後半の間と捉えることができる。

(3) 第94次調査検出のS X 3559について

S X 3559は整地層(IV層)上面で確認した遺構である。調査区を東西方向に縦断する北側への落ち込みである(第13図)。地山層上に整地層(IV層)が作られた後、それらを切って落ち込んでいる(第13図)。第94次調査による断面観察では、底部はほぼ平坦なまま調査区外へ広がる様相が見られた。一方で、さらに北側断面を観察した第23次調査では、底面にかなりの凹凸が認められる。したがって、現段階ではこの落ち込みが人為的な遺構か自然地形によるものかは判断できない。時期については、埋土にはⅢ層が流れ込むことから、9世紀中葉以降から10世紀初頭と考えられる。

(4) 第23次調査検出の南1道路について

まず南1道路についてであるが、5期の変遷から成ることがわかっている。灰白火山灰降下以前の3期(A・B・C期)と、灰白色火山灰の降下以降に道路を北に4~5m移動して作り直された2时期(D・E期)である。第23次調査では、断面で南1道路を発見しており、4时期的変遷を見ることができる(第26図)。発見された遺構は、灰白火山灰降下以前の道路側溝(A・B・C期)と移動後の南側溝(D期)である。移動前の南側溝では1时期(C期)、北側溝で3时期(A・B・C期)の存在が見つかっている。南側溝についてみると、確認できるのはC期の遺構だけで、A・B期の遺構はⅢ層形成の過程やC期の掘削によって失われたと想定される。



第28図 第23・94次調査 道路側溝対応図

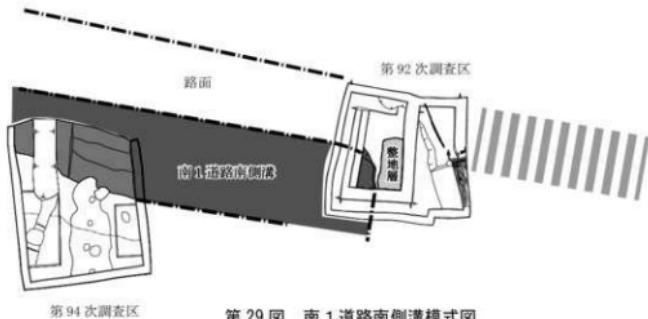
(5) 第94次調査検出のS X 3561南1道路について

第94次調査区内には第23次調査のサブトレンチの南端が延びおり、今回の第94次調査で確認されたSD 3557を断ち切る形で設定されている(第13図)。第23次の南1道路南側溝(C期)は今回の第94次のSD 3557と同一の遺構であることから、SD 3557は灰白色火山灰降下以前の南1道路(C期)の南側溝と考え

られる。Ⅲ層上面を切り込むことや、埋土の上層に灰白色火山灰の堆積層があることも、第23次調査の南・北側溝と一致している。

出土遺物を見ると、全体として土師器壺のB V類の出土数が多い。須恵器では、いずれの層からもV類が出土しているが、須恵系土器は認められない。また、層中上位には灰白色火山灰の自然堆積層が認められる。Ⅲ層の形成時期が9世紀中葉から後半の間と考えられることや、土師器壺B V類の出土数が多いことを考慮すれば、SD3557道路側溝の遭構年代は9世紀後半以降に求めることができ、灰白色火山灰が降下する10世紀前葉頃にはおよそ埋没していた状況が想定されよう。

なお、道路側溝の最下層からは須恵器壺に付着した漆紙文書が発見された。計帳様文書と見られるが、内容については現在分析中である。



第29図 南1道路南側溝模式図

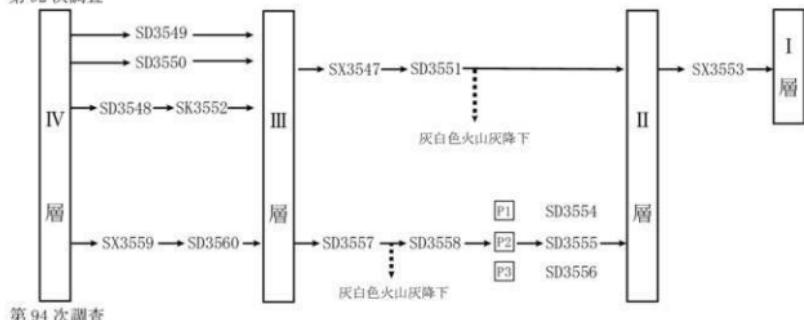
(6) 第92次調査検出のSX3561南1道路について

SD3549、SD3550はⅢ層の下層（Ⅶ層：地山層）に位置していることから、灰白色火山灰降下以前の遭構（A・B期）であることは明らかである（第6図）。重複がないためにSD3549、SD3550の新旧関係は不明だが、それぞれが南1道路南側溝（A・B期）のいずれかに対応する遭構と考えられる（第3図）。さらにその上層のⅢ層上面ではSD3551が見つかっており、その埋土には灰白色火山灰が入る。これらの層位の関係は第23次調査で発見された南1道路の堆積状況とも矛盾しない。したがって、SD3551はSX3561南1道路の南道路側溝（C期）と考えられる。

(7) 第92次調査検出のSD3551南1道路側溝（C期）および整地層（SX3547）について

第92次調査区の南西角で発見されたC期の南1道路南側溝（SD3551）は、それより東に延びることなく、この地点で止まっている（第29図）。変わって、道路側溝の延長部には整地（SX3547）が施されている。道路側溝だけがここで途切れるか、あるいは方向を南に変えるかの二通りの可能性が考えられる。92次調査区の東に位置する第43・56次調査区では、南1道路が見つかっている。南1道路から南へ分岐する道路、あるいは入口にあたる土橋状の施設である可能性も想定される。

第92次調査



第30図 遺構変遷図

参考文献

- (1) 多賀城市教育委員会『多賀城市内の道路2－平成18年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第87集 2006
- (2) 多賀城市教育委員会『多賀城市内の道路2－平成15年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第77集 2003
- (3) 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－第23・24次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第55集 1999
- (4) 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ－』多賀城市文化財調査報告書第70集 2003
- (5) 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書－第一～三分冊』多賀城市文化財調査報告書第75集 2004
- (6) 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－第19次調査－』多賀城市文化財調査報告書第41集 1996
- (7) 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』 1993
- (8) 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1994』 1994

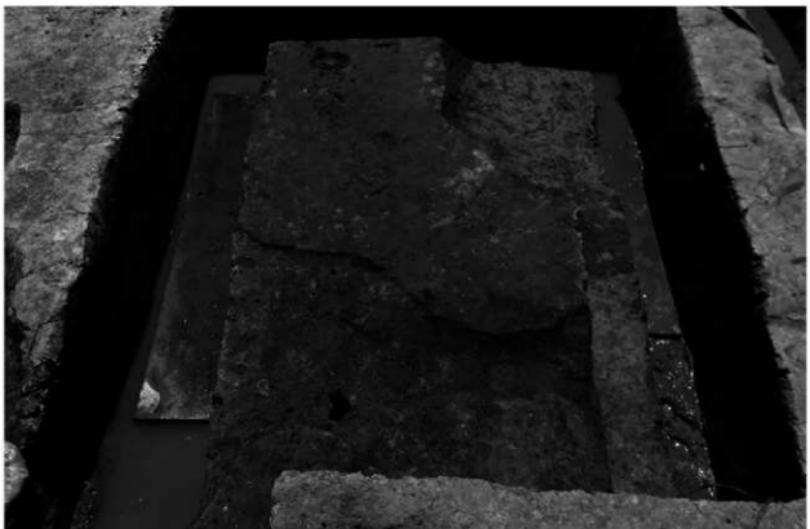


第92次調査Ⅲ層上面検出状況（南から）

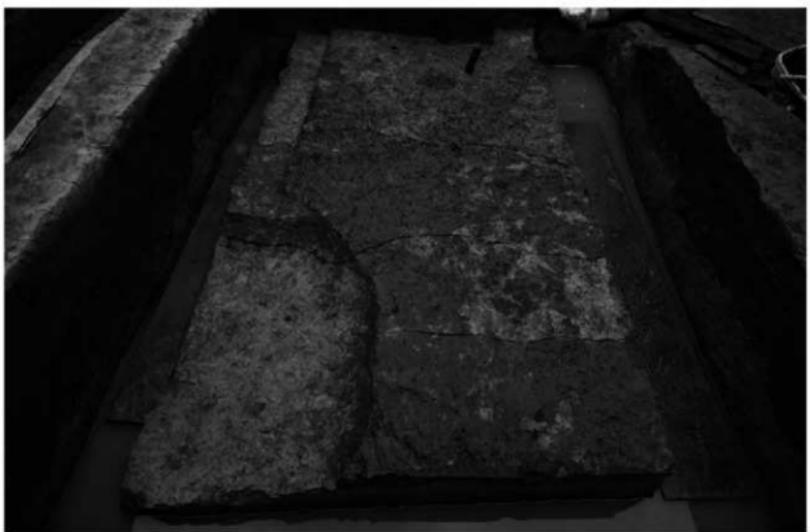


第92次調査S X 3547整地層検出状況（南西から）

写真図版 1



第92次調査IV層上面遺構完掘状況（北より）



第92次調査VII層上面検出状況（南より）

写真図版 2



第92次調査道路側溝（SD 3550・35549）検出状況（東より）



第92次調査道路側溝（SD 3549・3550）完掘状況（南東より）

写真図版 3

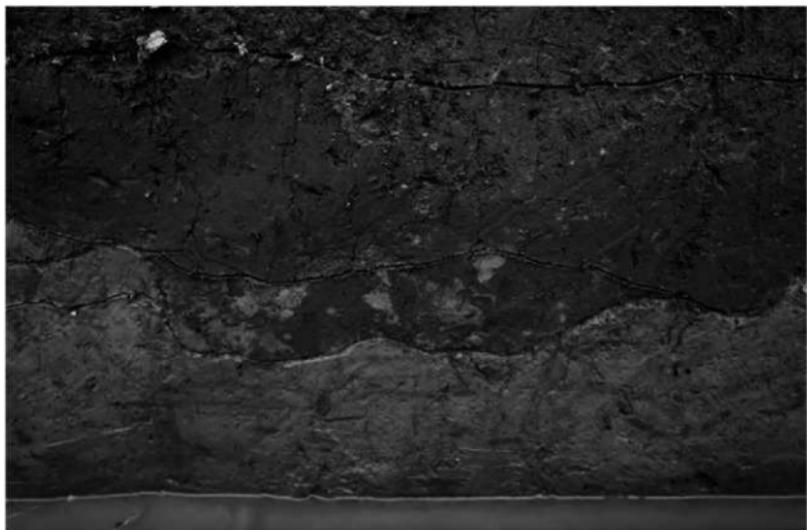


第92次調査土層堆積状況（調査区南壁）



第92次調査土層堆積状況（調査区東壁）

写真図版 4



第92次調査道路側溝断面（S D 3549）（東壁）



第92次調査流路跡（S X3553）木樁検出状況（東より）

写真図版 5



第92次調査調査区完掘状況（北より）



第92次調査木樁検出状況（北より）

写真図版 6

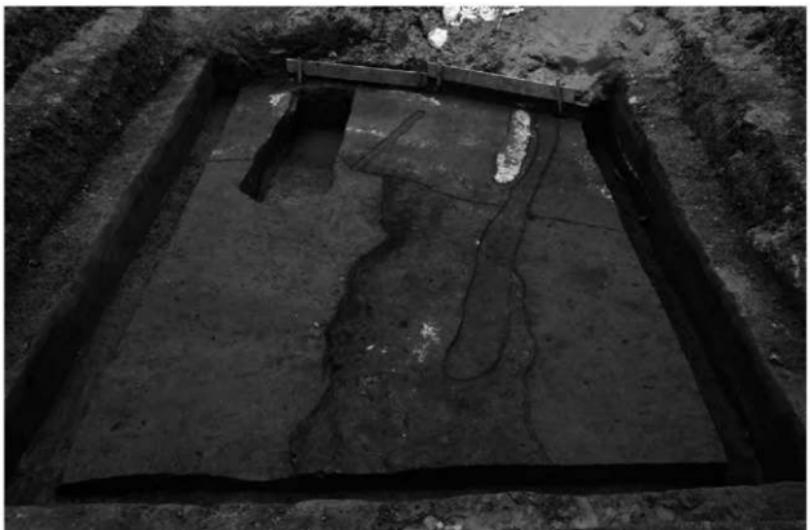


第92次調査木樁北端部検出状況（南より）



第92次調査木樁北端部和釘使用状況

写真図版 7



第94次調査Ⅲ層上面検出状況（南より）



第94次調査Ⅲ層検出遺構完掘状況（東より）

写真図版 8



第94次調査 S D3557断面（東壁）



第94次調査 S D3557断面（搅乱東壁）

写真図版 9



第94次調査土層堆積状況（東壁断面）



第94次調査ピット1基礎検出状況（南より）

写真図版10



第94次調査ビット2 碪板検出状況（西より）



第94次調査整地層（IV層）検出状況（西より）

写真図版11



第94次調査整地層を切り込む落ち込み（S X3559）（西より）



第94次調査調査区完掘状況（西より）

写真図版12



写真図版13



1



2



3



4



5



6



7



7(内面)

写真図版14



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11

写真図版15

VII 山王遺跡第160次調査

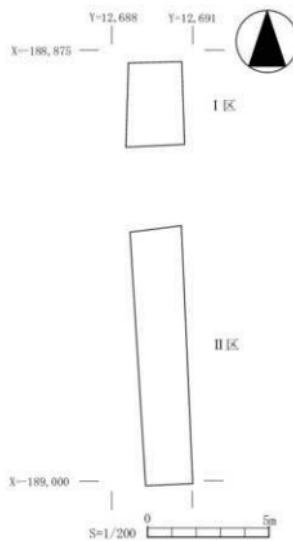
1 調査に至る経緯と経過

本件は、多賀城市山王字山王三区64他地内の長屋住宅の新築工事に伴う確認調査である。平成28年1月、地権者より当該地における長屋住宅の新築工事計画と埋蔵文化財との関わりについての協議書が提出された。計画では基礎掘削の深さは遺跡に影響を与える深さに達していなかったが、開発面積が962.94m²と広範囲に及んでいた。一方、当該区周辺では、これまで数度の発掘調査を実施しており、多賀城南面に施工された方格地割（南1東西道路）を確認していた。当該調査区でも、南端部に南1東西道路跡の推定線があり、この存在を確認することが、古代多賀城を理解するうえで重要と考えられた。このため、遺跡の状況を把握するための確認調査を実施することとなった。

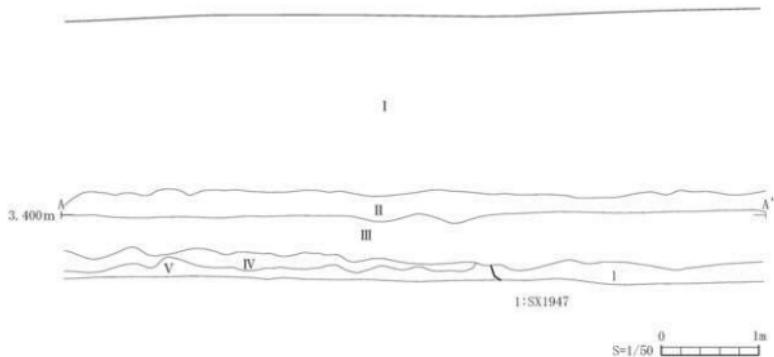
平成28年2月20日、地権者より調査に係る依頼書及び承諾書の提出をもって第160次調査として開始した。調査は3月1日より重機を使用して、盛土の除去作業に入る。当初は、南1東西道路の延長線上に調査区を設ける計画であったが、南北に長い対象地であったことから、重機等の搬入路及び作業員用の駐車スペースを確保する上で敷地南側にある程度の空間が必要であった。このため、道路確認のための調査区設定を断念し、北側居住空間の様相を把握する方針に変更した。廃土搬出の方法も考慮し、調査区は2地区（I・II区）設けた。掘削は3日に終了し、同日よりI区から作業員を動員して、遺構検出作業に入った。その結果、I区では土壌、II区では溝跡や小溝跡、土壌、ピットを見出した。9日より調査区毎に写真撮影、平面・断面図を作成した。図面作成については、調査区の幅が1.4mと狭いため、便宜上設定した任意の2点の基準を基に計測し、後から国土座標の成果を移動した。22日までに平面・断面図作成、標高値の記載や土層の注記を行い、24日には発掘器材を搬出した。翌日埋め戻しを行って現地調査の一切を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



第3図 I区東壁土層堆積状況

2 調査成果

(1) 層序 (第3図)

I層：現代の盛土層である。厚さ約1.3mである。

II層：旧水田耕作土である。厚さ15～22cmである。

III層：黒褐色土である。厚さ20～40cmである。古代の遺物包含層であり、南から北側に向かって厚く堆積している。

IV層：I区北側で確認した灰オリーブ砂質土を含んだ黒褐色粘土である。厚さ2～18cmである。

V層：I区全域、II区北側で確認した均質な黒褐色粘土である。厚さ2～18cmで、SK1947の検出面となっている。

VI層：II区のほぼ全域で確認した暗灰黄褐色土である。遺構検出面となっている。

(2) 発見された遺構と遺物

I区

対象地の北側に設定した調査区である。東西方向の落ち込みを発見した。

S X 1947不明遺構(第5図)

【位置】調査区南半部で発見した、東西方向の落ち込みである。

【検出面・重複】第V層上面で検出した。他の遺構との重複関係はない。

【平面形・規模】大部分が調査区外に及んでおり、平面形及び規模は不明である。

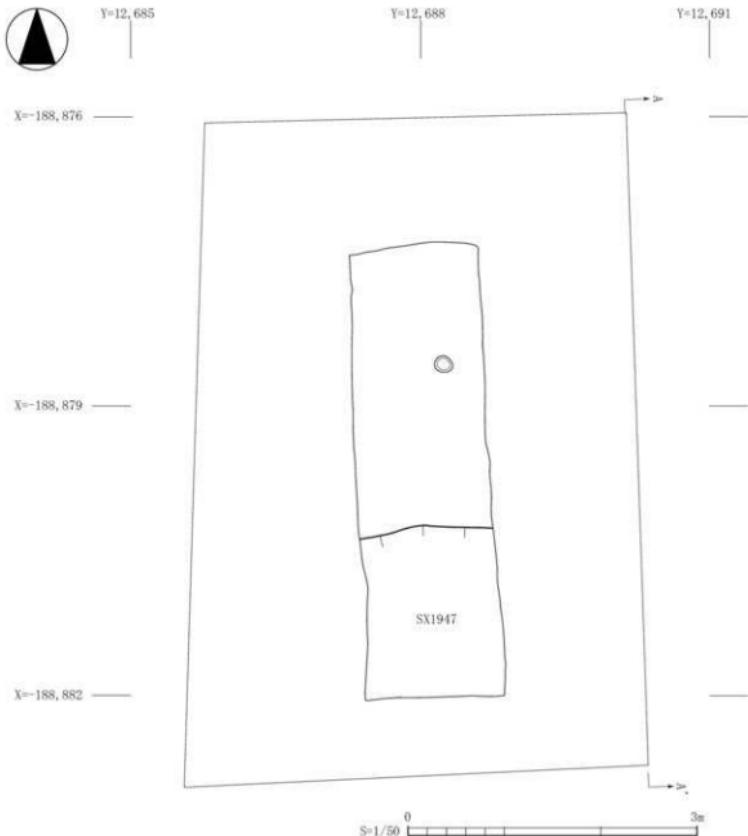
【埋土】黒褐色土である。

【遺物】土師器坏（BV類）・甕（B類）、須恵器坏（II類）・甕が出土している。



番号	種類	遺構 層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	(単位: cm) 備考
			外面	内面						
1	須恵器 环	1層	ロクロナデ 底部: 手持ちヘラケズリ	ロタロナデ	(13.6) 0.5/24	(6.4) 13/24	3.5	1-1	R3	II類

第4図 SX1947出土遺物



第5図 I区調査区平面図

II 区

I 区の南側に設定した調査区である。第VI層上面で溝跡、小溝跡、土壌、ピット（柱穴）を発見した。遺構は検出にとどめ、柱穴は柱痕跡確認のために掘り下げたが、他の遺構は掘り下げてはいない。

S D 1950溝跡（第6図）

【位置・形態】調査区北端部、S K 1948の南側で発見した、東西方向の溝跡である。両端は調査区外に延びる。

【重複】S K 1948、S D 1950と重複し、それより古い。

【方向・規模】方向は西で約28度北に偏している。規模は長さ1.8m以上、上幅1.1～1.14mである。

【埋土】黒褐色粘土である。

S D 1971溝跡（第6図）

【位置・形態】調査区南隅で発見した。東西方向の溝跡である。両端は調査区外に延びる。

【重複】S D 1966・1970・1972と重複し、それより新しい。

【方向・規模】方向は東で約7度南に偏している。規模は長さ1.4m以上、上幅1.0～1.1mである。

【埋土】地山粒を含んだ黒褐色土である。

その他の小溝跡（第6図）

溝跡は11条発見した。南北方向のもの（S D 1949・1951・1954・1957・1966・1968・1972）と、東西方向のもの（S D 1952・1959・1967・1970）がある。このうち、重複関係をみると、南北方向のものより新しいS D 1952・1970と、古いS D 1967がある。規模は上幅0.18～1.14mであり、いずれも調査区外に延びている。埋土は黒褐色粘土が主体であり、地山ブロックや炭化物が混入するものも僅かに認められる。

土壤（第6図）

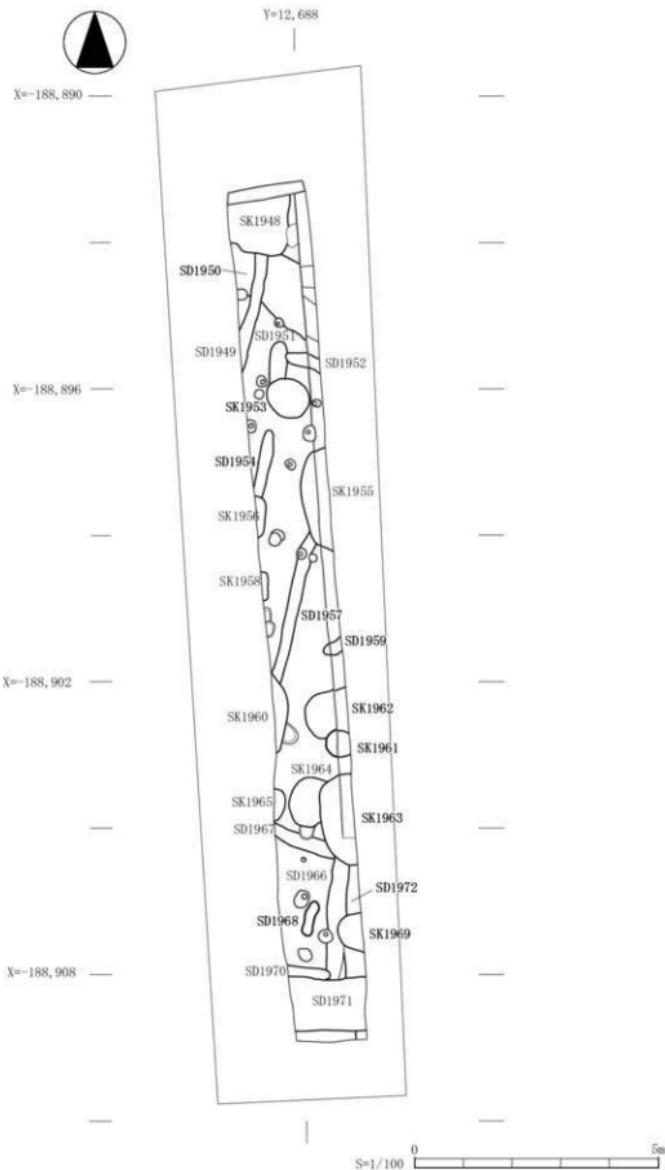
12基発見した。直径1.2～2.1mの大型のもの（S K 1948・1955・1960・1962・1963）と、直径1m以内の小型のもの（S K 1953・1956・1958・1961・1964・1965・1969）がある。いずれも埋土は黒褐色土であるが、炭化物が混入するもの（S K 1948・1953・1963・1964）と、褐色土と炭化物が混入するもの（S K 1960）、褐色土と地山ブロックが混入するもの（S K 1958・1961）がある。

ピット（第6図）

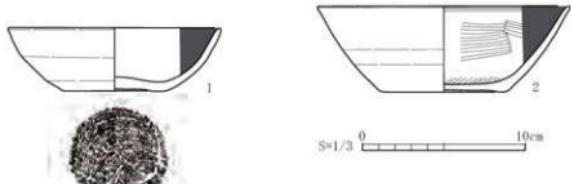
ピットは20基発見した。このうち柱痕跡の有無から柱穴と判断したものが8基ある。平面形は、方形もしくは梢円形である。長辺18～38cm、短辺12～30cmであり、埋土は黒褐色土である。柱痕跡は直径7～11cmの円形である。

堆積層出土遺物（第7図）

III層から、土師器坏（B V・B IIc類）・甕（A・B類）・高台付坏・須恵器坏（III・V類）・甕・瓶・長頸瓶、平瓦（II B類）・丸瓦（II B類）が出土している。



第6図 II区調査区平面図



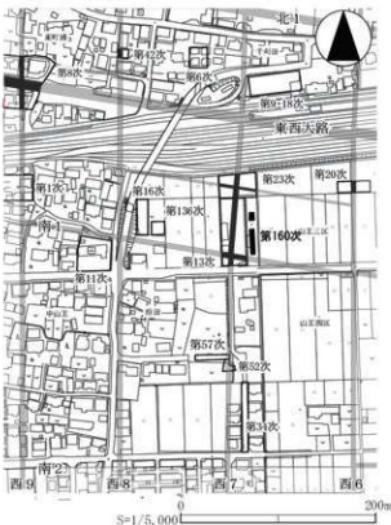
番号	種類	遺構層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	(単位: cm) 備考
			外面	内面						
1	土師器 环	III層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ヘラミガキ。黒色処理	13.0 24/24	6.1 24/24	3.9	1-2	R1	B V類 ヘラ書き 「×」
2	土師器 环	III層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り →手持らヘラケズリ	ヘラミガキ。黒色処理	(15.4) 12/24	(7.7) 20/24	5.3		R2	B II c類

第7図 堆積層出土遺物

4 小結

今回の調査では I・II 区合わせて溝跡13条、土壙12基、東西方向の落ち込み1基、ピット20基を発見した。

発見された遺構の年代については、埋土を掘り上げていないため決め手にかけるが、遺構を覆っている第III層から土師器環B類・甕B類が多量に出土しているほか、須恵系土器も若干出土している。このことから、今回発見した遺構について、大きく8世紀後葉～10世紀代の範疇におさまるものと考えておきたい。



第8図 第160次調査区と周辺の調査区



I 区遺構検出状況（南から）



II 区遺構検出状況（南から）

写真図版 1

VIII 山王遺跡第161次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字掃下し地内における集合住宅新築工事に伴う確認調査である。平成27年10月に、地権者より山王遺跡の北西部に位置する当該地での集合住宅新築計画と、埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅新築にあたって直径216mmの柱状補強体コンクリートを9.5mの深さまで118カ所充填し、擁壁工事で幅1.25m、深さ1.95mの掘削を行うため、遺跡への影響が懸念された。このため、基礎工法について盛土内で取まる在来工法への変更を協議したが、在来工法では建物を支えるための地耐力が十分に得られないとの理由により、当初計画の基礎工法で施工するとの結論に至った。2月18日に地権者より調査に関する依頼書及び承諾書の提出を受け、29日より現地調査を開始した。

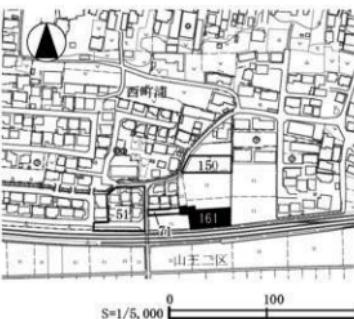
調査は建物敷地部分にあたるA区と、敷地西端に遺跡の範囲確認のため設けたB区の2箇所を対象とし、2月29日に表土除去を行った。3月2日より作業員による検出作業に着手し、表土より0.8mの深さで遺構検出面であるオリーブ黄色土層(IV層)を確認した。また、排水及び下層の断面観察のために設けたA区南側溝の壁面中央部にて、オリーブ黄色粘土層(VI層)に畦畔状の高まりを1条確認した。3日に測量基準点の設置および調査地内の測量を行い、翌日より図面作成を開始した。9日に調査区の全景写真を撮影し、15日の重機による埋め戻しをもって、現地調査的一切を終了した。

2 調査成果

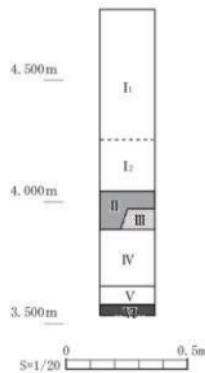
(1) 層序 (第2図)

今回の調査で確認した層序は以下の通りである。

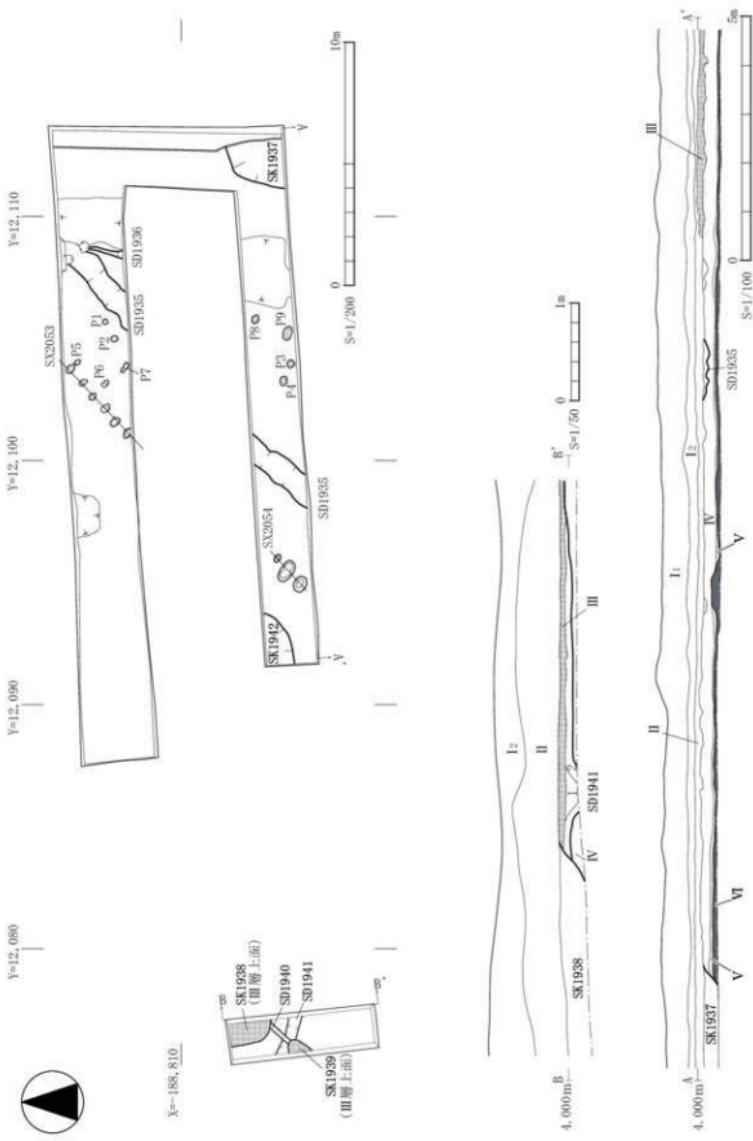
- I 層：現代の盛土層で、厚さ60cmである。
- I 层：旧水田層で、厚さ20cmである。
- II 層：灰色粘土で、厚さ20cmである。白色粒を多く含む。
- III 層：オリーブ灰色粘質土で、厚さ20cmである。A区西側およびB区にのみ堆積する。
- IV 層：オリーブ黄色土で、厚さ40cmである。
- V 層：オリーブ黒色粘土で、葉理状の堆積が認められる。厚さは3～5cmで、古墳時代前期の水田層を覆う自然堆積層である。
- VI 層：オリーブ黄色粘土で、葉理状の堆積が認められる。厚さは3～10cmで古墳時代前期の水田層である。



第1図 調査区位置図



第2図 層序模式図



第3図 IV層およびIII層道構平面・断面図

(2) 発見遺構

今回の調査では、A区のIV層上面で溝跡、土壤、ピットを確認した。また、B区のIV層上面で溝跡・III層上面で土壤を確認した。

A区

S D1935溝跡（第3図）

【位置】調査区中央部で確認した南北方向の溝跡である。北側と南側は調査区外に延びる。

【重複】S D1936との重複が考えられるが、擾乱により壊されているため新旧関係は不明である。

【方向・規模】北トレーニングから南トレーニングを縦断する。方向は北で東に約46度偏している。規模は長さ14.5m以上、幅は約1mである。南トレーニングの南壁断面で観察すると、深さは約10cmで底面に起伏をもち、壁は底面から非常に緩やかに立ち上がる。

【埋土】黒色粘質土を主体とし、IV層由来のブロックを多量に含む。

【遺物】出土していない。

S D1936溝跡（第3図）

【位置】調査区北トレーニング東部で確認した南北方向の溝跡である。北側は擾乱によって壊されており、南側はトレーニング外に延びる。

【重複】S D1935との重複が考えられるが、擾乱により壊されているため新旧関係は不明である。

【方向・規模】方向は北で東に約10度偏している。規模は長さ1.4m以上、幅は10cm～35cmである。

【埋土】灰色粘質土である。

【遺物】出土していない。

S K1937土壤（第3図）

【位置】調査区南トレーニングの南東角で確認した。北西部を検出し、その他の部分は調査区外である。

【重複】重複は無い。

【規模・平面形】確認できた規模は長軸2.4m以上、短軸2.3m以上、深さ50cm以上である。平面形は大部分が調査区外のため、全容は不明である。

【埋土】灰色粘質土である。II層が流れ込み、遺構を埋めている。

【遺物】出土していない。

S K1942土壤（第3図）

【位置】調査区南トレーニングの北西角で確認した。南東部を検出し、その他の部分は調査区外である。

【重複】重複は無い。

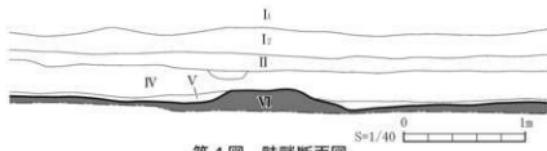
【規模・平面形】確認できた規模は長軸2.2m以上、短軸80cm以上である。平面形は大部分が調査区外のため、全容は不明である。

【埋土】オリーブ黑色粘土であり、II層由来の白色粒を多く含む。

【遺物】出土していない。

S X2053（第3図）

【位置・形態】調査区北トレーニングで確認した、6基のピットからなる南北方向の列である。堰方や柱抜取



第4図 畦畔断面図

り穴は不明瞭であり、埋土の残りも浅かったことから、本調査では柱穴ではなくピットと判断した。

南・北側はトレンチ外または調査区外のため、全容は不明である。SD1935に対し、約2.7mの間隔をとって並行している。

【重複】重複は無い。

【方向・規模・平面形】北で東に46度偏している。規模は総長4.7m以上、ピットの間隔は南から45cm、45cm、40cm、40cm、50cmである。ピットの規模は長辺45cm、短辺20～30cmであり、平面形はいずれも梢円形を呈す。

【埋土】いずれも灰色粘質土で、II層由来の白色粒を多く含む。

【遺物】出土していない。

S X 2054 (第3図)

【位置・形態】調査区南トレンチで確認した、3基のピットからなる南北方向の列である。南・北側は調査区外またはトレンチ外のため、全容は不明である。SD1935に対し、約2.2mの間隔をとって並行しており、埋土からもSX2053との共通性が見られるが、南北トレンチ間の繋がりについては不明であるため、SX2053とは別遺構と考えた。

【重複】重複は無い。

【方向・規模・平面形】北で東に47度偏している。規模は総長1.8m以上、ピットの間隔は南から25cm、25cmである。ピットの規模は南端で長辺65cm、短辺55cm、中央で長辺90cm、短辺50cm、北端で長辺35cm、短辺25cmであり、平面形はいずれも梢円形を呈す。

【埋土】いずれも灰色粘質土で、II層由来の白色粒を多く含む。堀方や柱抜取り穴は不明瞭である。

【遺物】出土していない。

P 1～9 ピット(第3図)

【位置】調査区中央部で確認した。

【平面形・規模】P 1～3は直径23cm～32cmの円形であり、それ以外は梢円形を呈す。P 4～8の規模は長辺30～40cm、短辺17～35cm、P 9の規模は長辺55cm、短辺30cmである。

【埋土】いずれも灰色粘質土で、II層由来の白色粒を多く含む。SX2053・2054と近似している。

【遺物】出土していない。

B区

SD1941溝跡 (第3図)

【位置】調査区中央部のIV層上面で確認した東西方向の溝である。

【重複】SD1940およびSK1939と重複し、それらよりも古い。

【方向・規模】方向は西で北に17度偏している。規模は長さ2.1m以上、上端は45cmである。

【埋土】灰色粘質土であり、II層由来の白色粒を多く含む。

【遺物】出土していない。

S D 1940溝跡（第3図）

【位置】調査区中央部のIV層上面で確認した南北方向の溝跡である。

【重複】SK 1938・1939、SD 1941と重複し、SK 1938・1939より古く、SD 1941より新しい。

【方向・規模】方向は北で50度東に偏している。規模は長さ1m以上、上端は約20cmである。

【埋土】灰色粘質土にIV層由来のブロック（1～5cm）をわずかに含む。

【遺物】出土していない。

S K 1938土壤（第3図）

【位置】調査区北部のIII層上面で確認した。南東部を検出し、その他は調査区外である。

【重複】SD 1940と重複し、それよりも新しい。

【規模・平面形】確認できた規模は長軸1.8m以上、短軸1.1m以上である。平面形は大部分が調査区外のため、全容は不明である。

【埋土】オリーブ黒色粘質土である。

【遺物】出土していない。

S K 1939土壤（第3図）

【位置】調査区西部のIII層上面で確認した。東半部を検出し、その他は調査区外である。

【重複】SD 1940・1941と重複し、それより新しい。

【規模・平面形】確認できた規模は長軸80cm以上、短軸70cm以上である。平面形は大部分が調査区外のため、全容は不明である。

【埋土】オリーブ黒色粘質土である。

【遺物】出土していない。

3 まとめ

今回の確認調査は、対象地に2箇所のトレンチを設けて行い、各トレンチで遺構を確認した。

(1) A区南トレンチ南壁面のVI層で畦畔状の高まりを確認した。VI層に相当する層位は、本調査区から約40m南側の第150次調査においても確認されており（VII層）、古墳時代前期の水田跡を発見している（SK 1904水田跡）。標高値についても本調査の3.6mに対して第150次では3.7mと近似していることから、VI層も同様の水田層と考える。

(2) 主な検出面となるオリーブ黄色土層（第IV層）は、周辺調査で確認している基盤層位である。本調査では出土遺物が無く遺構の年代特定には至らなかったが、第51次調査では本調査区のIV層に相当するIII層上面で古代・中世の遺構を発見していることから、この時代に相当するものと考える。

参考文献

多賀城市教育委員会「山王遺跡-第51・54・57次調査報告書-」多賀城市文化財調査報告書第81集 2006

多賀城市教育委員会「高崎遺跡ほか」多賀城市文化財調査報告書第128集 2016



A区北トレンチ検出状況（西より）



A区北トレンチ S D 1935・1936 検出状況（北より）

写真図版 1



A区北トレンチS X 2053 およびピット検出状況（北より）



A区南トレンチ検出状況（東より）

写真図版 2



A区南トレンチSK 1937 検出状況（南より）



A区南トレンチSK 1937 断面（北より）

写真図版3



A区南トレンチ S D 1935 検出状況（南東より）



A区南トレンチ S K 1942 検出状況（南より）

写真図版4



A区南トレンチ畔断面（北より）



A区南トレンチ南壁断面（北より）

写真図版 5



B区検出状況（北より）



B区東壁断面（北西より）

写真図版 6

IX 山王遺跡第166次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、保育所新築のための敷地盛土工事に伴う確認調査である。平成28年2月2日に当該地における保育所新築に伴う敷地盛土工事と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は対象地内に厚さ1.23～1.61mの盛土を行う内容であり、文化庁通知の府保記第75号における「盛土等の施工後は地形や地貌が大きく変化し周知の埋蔵文化財包蔵地であることを実態上把握しにくくなり、試掘・確認調査等を行うこともかなり困難になること等を認識し盛土等の施工以前に、地下に残る埋蔵文化財の位置と範囲、遺跡の内容・性格等を記録しておく必要がある。」との指針に従い確認調査を実施することとなった。

平成28年5月17日付で地権者より埋蔵文化財発掘の依頼書が提出され、これを受けて平成28年6月1日から6月21日にかけて現地発掘調査を実施した。表土となる現代盛土層を重機により除去したところで、比較的安定した黒色粘質土の面が検出されたため精査を行ったところ、現代遺物が出土し、盛土以前の旧水田層であることが判明した。

約20cmの厚さをもつ水田層をさらに掘り下げたと

ころで古代の遺構面となる基盤層が検出されたことから、この面で精査・遺構確認を行った。その後、確認した遺構の一部については裁ち割りを行い、写真撮影・測量等を実施した。6月8日に全景写真を撮影し、6月16日より重機による埋め戻しを行った。6月21日に地権者への現場引き渡しを完了して、現地調査を終了した。

2 調査成果

(1) 堆積土層（第2図）

I層：現代の盛土層。

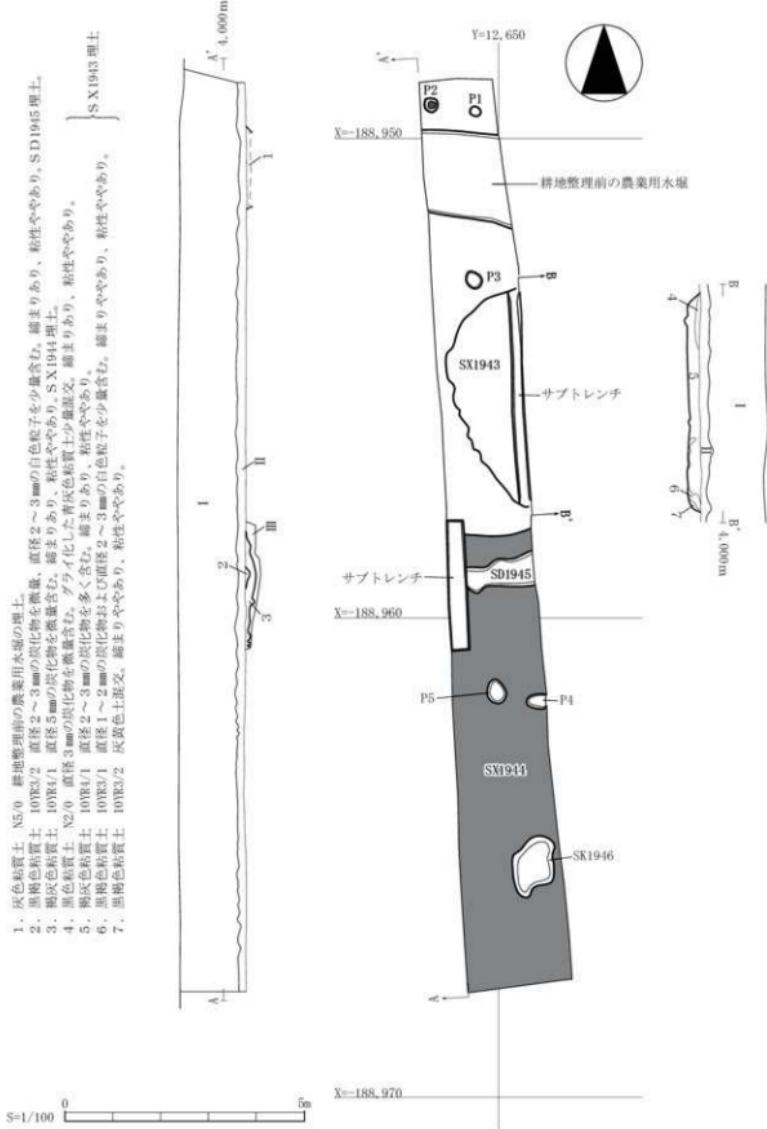
II層：黒色粘質土 N2/0 水田層。現代遺物を含む。縮まりあり、粘性あり。

III層：灰黄色土 2.5Y7/2 シルト質。縮まりあり、粘性ややあり。古代の遺構検出面。



第1図 調査区の位置

1. 黄褐色粘質土 NS-0 耕地整理前の農業用水池の圃上。
2. 黑褐色粘質土 10YR3/2 直径 2 ~ 3 mm の炭化物を微量、直徑 2 ~ 3 mm の白色粘子を少量含む。縮まりあり、粘性やややあり。SD1945 地上。
3. 黑褐色粘質土 10YR4/1 直径 5 mm の炭化物を微量含む。縮まりあり、粘性やややあり。SX1944 地上。
4. 黑褐色粘質土 SX-0 直径 3 mm の炭化物を微量含む。グリル化した黄褐色粘質土少量交。縮まりあり、粘性やややあり。
5. 黑褐色粘質土 10YR4/1 直径 2 ~ 3 mm の炭化物を多く含む。縮まりあり、粘性やややあり。
6. 黑褐色粘質土 10YR3/1 直径 2 ~ 2 mm の炭化物はより直徑 2 ~ 3 mm の白色粘子を少量含む。縮まりやややあり。
7. 黑褐色粘質土 10YR3/2 反黄色土混交。縮まりやややあり、粘性やややあり。



（2）発見した遺構・遺物

本調査地点は微高地に立地しており、西7道路（第1図）に西面する位置と推定される。発見した遺構は、古代の窪地状遺構2基（S X1943・1944）、溝跡1条（S D1945）、土壌1基（S K1946）、ピット5基、現代の溝跡1条である。今回は確認調査であるため原則として遺構の掘削は行っていないが、平面的な確認状況から遺構の性格が不明なものについては部分的な裁ち割りを行った。

S X1943窪地状遺構（第2図）

【位置・形態】調査区中央付近で発見した。東部は調査区外となる。確認できた範囲での様相からは、梢円形ないし小判形に近い平面形を呈するものと思われる。断面形は立ち上がり緩やかで底面は比較的平坦である。

【重複】ほかの遺構との重複はない。

【方向・規模】方向性不明。規模は長さ4.1m以上、幅2.7m以上、深さは検出面から30cmを測る。

【埋土】褐色灰色粘質土

【遺物】出土していない。

S X1944窪地状遺構（第2図）

【位置・形態】調査区南部一帯を覆う範囲で発見した。平面形は不明。断面形は、南に向かって緩やかに下る状況が確認された。

【重複】S D1945、S K1946、P 4、P 5に切られる。

【方向・規模】方向性不明。規模は南北幅9.5m以上、東西幅2.2m以上を測る。一部裁ち割りを行ったのみであるので最大深さは明らかではないが、確認できた範囲では検出面から20cmを測る。

【埋土】褐色灰色粘質土で、上面には部分的に灰白色火山灰が散見される。

【遺物】出土していない。

S D1945溝跡（第2図）

【位置・形態】調査区中央付近を東西に貫く状態で発見した。一定の幅ではなく、歪んだ平面形を呈しており、人為的な遺構であるのか判断としない。断面形は逆台形に近い浅いU字形を呈する。

【重複】S X1944を切る。

【方向・規模】方向は北で東に80度偏する。規模は幅70cm、深さは検出面から10cmを測る。

【埋土】黒褐色粘質土

【遺物】出土していない。

S K1946土壌（第2図）

【位置・形態】調査区南部で発見した。平面形は梢円形に近い不定形、平面での確認に留めたため断面形は不明。

【重複】S X1944を切る。

【方向・規模】方向性不明。規模は長軸幅130cm、短軸幅95cmを測る。深さは不明。

【埋土】黒褐色粘質土

【遺物】出土していない。

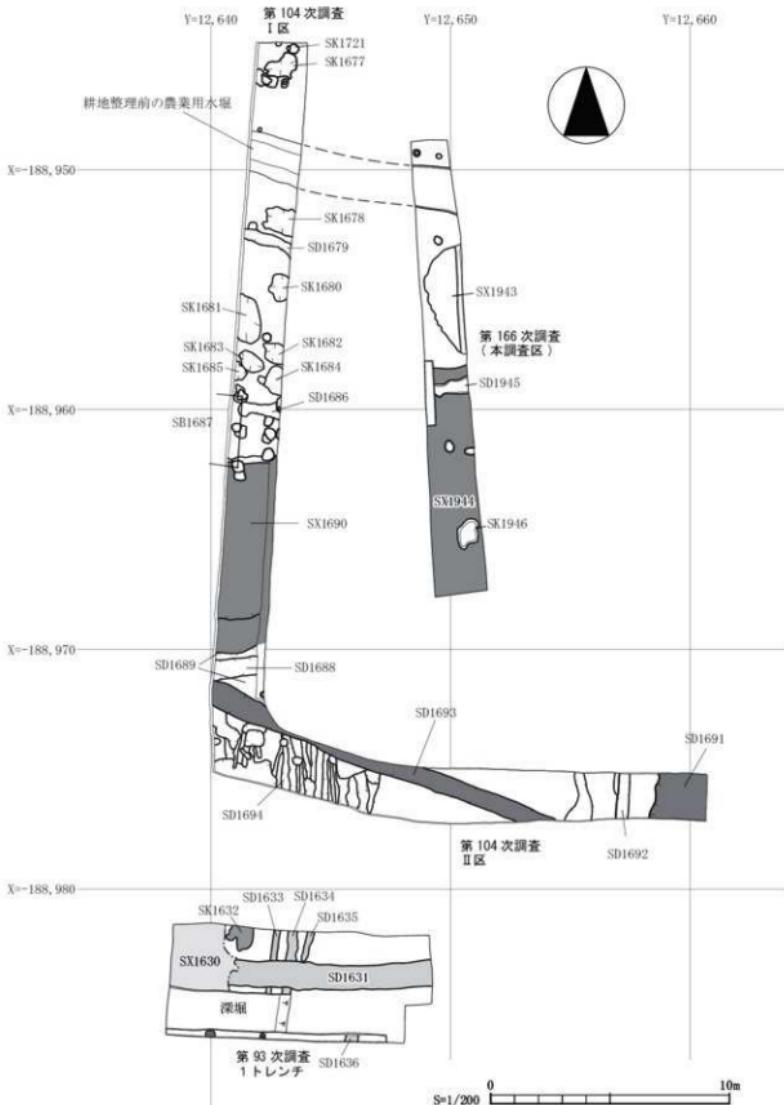
3 まとめ

今回の調査では、建物跡と呼べる配列は確認されなかつたものの、柱痕跡を残す柱穴であるP 2が確認されているほか、S X1943・1944といった窪地状遺構などが検出されており、第104次調査の遺構検出状況と近似した様相を呈している（第3図）。第93次・104次および今次調査は、ほぼ西7道路に西面する位置にあたることが推定されるものの、いずれの調査地点も建物が建ち並ぶような状況とはいはず、溝群あるいは性格不明の窪地状遺構が目立つような空間が広がっていたことが推測される。

引用文献

多賀城市教育委員会「 XII 山王道路第104次調査」『多賀城市内の遺跡2』多賀城市文化財調査報告書第111集 2013

多賀城市教育委員会「山王道路第93次調査」『多賀城市内の道路2』多賀城市文化財調査報告書第108集 2012



第3図 周辺調査地点合成図

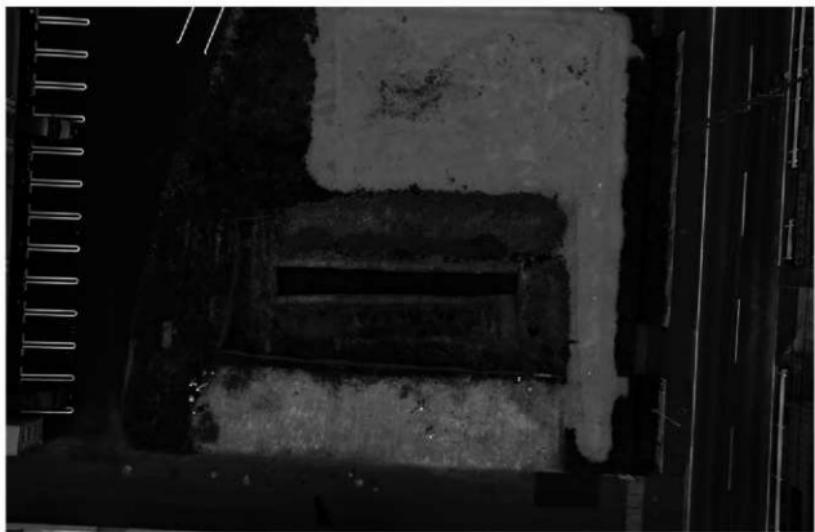


全景（右が北）



全景（南から）

写真図版 1



調査地全景（右が北）



調査区南部（右が北）

写真図版 2



S X 1943 (右が北)

写真図版 3

X 山王遺跡第169次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字町地内における個人住宅新築工事に伴う本発掘調査である。平成28年6月に、地権者より山王遺跡の北西部に位置する当該地での個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅新築の基礎として太さ直径0.4m、長さ3mのパイプを39本打ち込み、給排水・雨水管の敷設で深さ0.5～0.9mの掘削工事を行うことから、遺跡への影響が懸念された。このため、基礎工法について盛土内で收まる在来工法への変更を協議したが、在来工法では建物を支えるための地耐力が十分に得られないとの理由により、当初計画の基礎工法で施工するとの結論に至った。8月4日に地権者より調査に関する依頼書及び承諾書の提出を受け、18日より現地調査を開始した。

22日の表土掘削終了後、翌23日より作業員を動員して造構の検出作業に入った。その結果、表土より0.8mの深さで最初の造構検出面であるII層を確認したため、26日に測量基準点の設置を行い、翌日より図面作成を開始した。9月15日にII層上面の調査が終了し、完掘状況の全景写真を撮影した。台風による中断をはさんで、21日より下層造構の検出に着手し、続くIII層上面で古代と推定される土壌4基を確認した。10月3日、III層上面の調査を終了し、全景写真を撮影した。さらに下層の状況を確認するため、調査区内の二ヵ所にトレンチを設けて掘り下げを行ったところ、地山となるV層上面で東西方向の流路(SX1934)を確認した。V層より下面では砂層堆積が続き、想定されていた古墳時代の造構は確認できなかった。4日に完掘状況の写真撮影および補足調査を行い、21日の重機による埋め戻しをもって、現地調査の一切を終了した。

2 調査成果

(1) 層序 (第2図)

今回の調査では、現在の表土以下7層の堆積を確認した。

I 1層：現代の盛土層で、厚さは40cmである。調査区の西側に向かって緩やかに傾斜している。

I 2層：褐色土の旧表土で、厚さは40cmである。層中からは現代の遺物に混り、磁器皿や磁器碗が出土している。調査区の西側に向かって緩やかに傾斜している。

II 層：オリーブ黒色土の堆積層で、中世および近世の検出面である。厚さは10～30cmで、調査区の南東側で厚く堆積し、西側ほど薄くなる。全体に微量の炭化物を含む。

III 層：オリーブ褐色土が主体で、古代の検出面である。厚さは15～40cmで、全体に黒褐色土を混入しており、微量の炭化物を含んでいる。

IV 層：粒子の粗い灰色砂層である。厚さは調査区南辺で10cmだが、調査区中央から北では、東西流路



第1図 調査区位置図

(SX1934) に伴う落ち込みに流れ込んでおり、最も厚い部分では40cm以上の堆積がある。

V 層：灰オリーブ色砂質土の地山層で、厚さは40cm～50cmである。調査区の中央から北側では東西流路(SX1934)に削られ失われている。

VI 層：粗砂層である。河川堆積層で湿地性植物の根および痕跡が残る。

6.000m ——

5.000m ——

4.000m ——

I (盛土層)

I₂ (旧表土)

II (中世・近世)

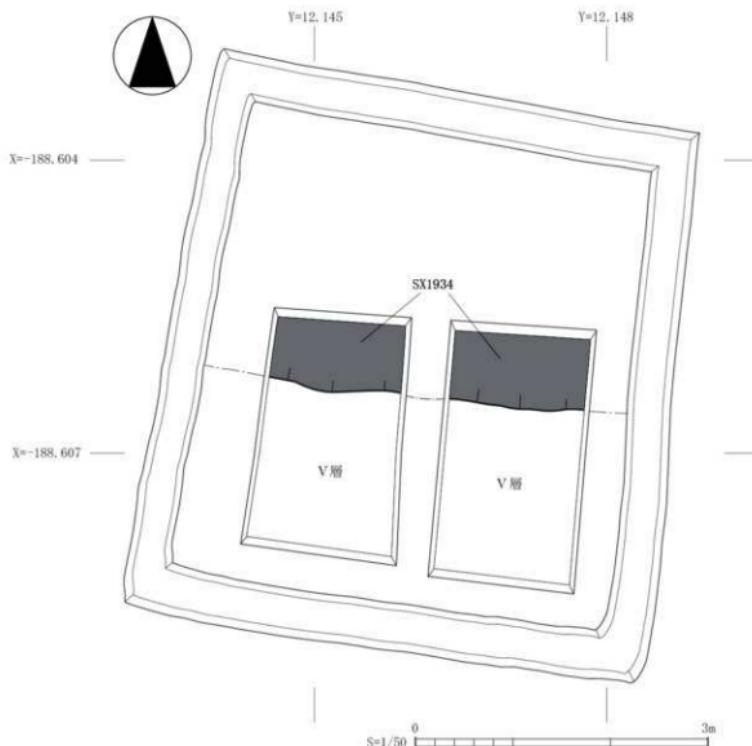
III (古代)

IV(砂層)

V(地山層)

VI(砂層)

第2図 層序模式図



第3図 SX1934 平面図

（2）発見遺構と遺物

今回の調査では、II層およびIII層でピットと土壌を、V層上面で流路跡を発見した。

①V層上面検出遺構

S X1934（第3図）

【位置・形態】調査区北側のV層上面で確認した流路の跡である。

【重複】重複は無い。

【方向・規模】調査区中央部を東西に横断するが、流路の対岸はトレンチ外にあると推測され、全容は不明である。確認できる部分での規模は東西で3.5m以上、上端は約3m以上、深さはV層検出面から40cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】灰色砂である。

【遺物】出土していない。

②III層上面検出遺構

S K2056土壌（第4図）

【位置・形態】調査区の中央東寄りで発見した。

【重複】重複は無い。

【方向・規模】平面形は楕円形で、規模は長軸70cm、短軸40cm、深さは14cmである。

【埋土】1層に灰白色火山灰が堆積する。2層はオリーブ黒色土で少量の炭化物を含む。

【遺物】出土していない。

S K2057土壌（第4図）

【位置・形態】調査区中央西寄りで発見した。

【重複】重複は無い。

【方向・規模】平面形は南北方向の楕円形で、規模は長軸80cm、短軸40cm、深さ40cmである。

【埋土】灰色粘質土である。オリーブ灰色粘質土の小ブロックが散見され、縮りがある。炭化物をわずかに含む。

【遺物】出土していない。

S K2058土壌（第4図）

【位置・形態】調査区北側の西寄りで発見した。

【重複】重複は無い。

【方向・規模】平面形は楕円形で、規模は長辺50cm以上、短辺50cm、深さ30cmである。

【埋土】灰色粘質土である。オリーブ灰色粘質土が散見され、しまりがある。炭化物をわずかに含む。

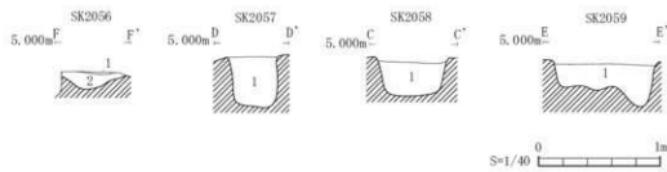
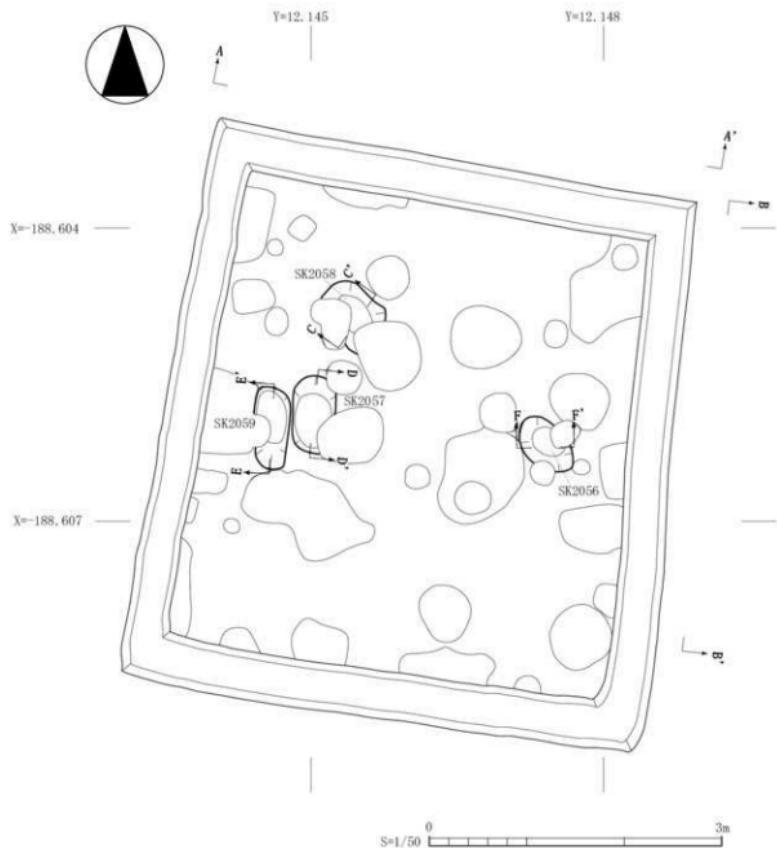
【遺物】古代の土器片が出土している。

S K2059土壌（第4図）

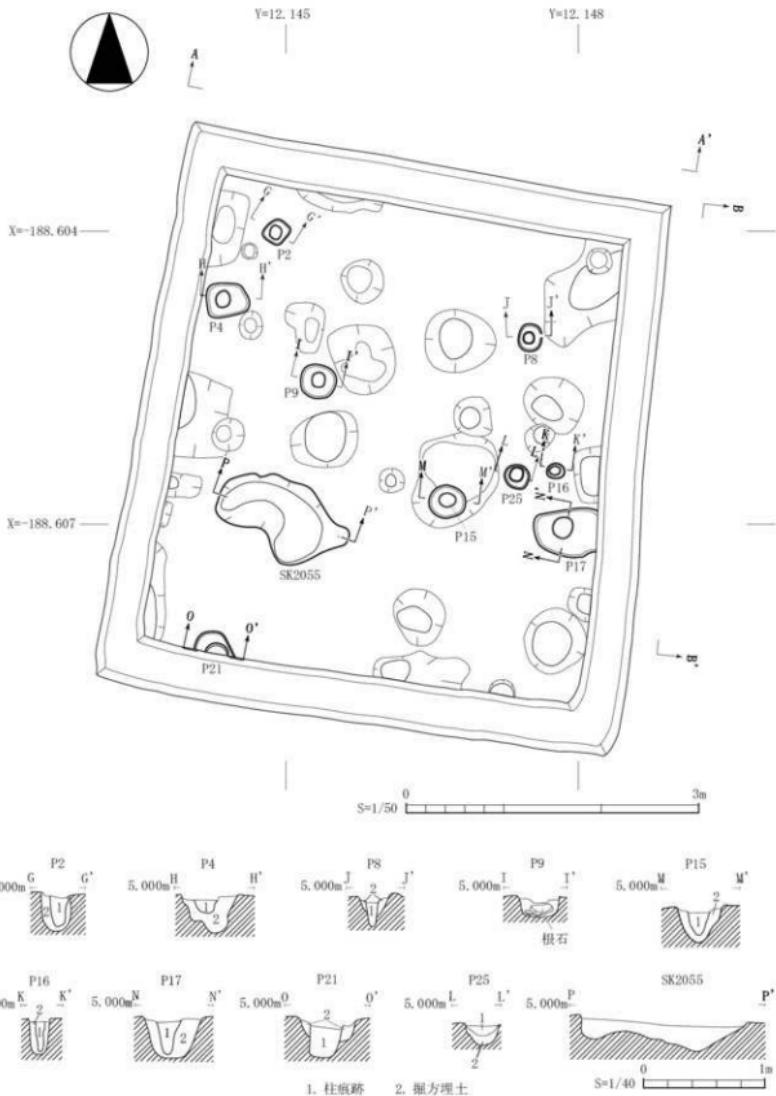
【位置・形態】調査区の中央西寄りで発見した。

【重複】重複は無い。

【方向・規模】平面形は南北方向の楕円形で、規模は長軸90cm、短軸36cmである。底面には大きな凹凸が



第4図 III層遺構平面・断面図



第5図 II層遺構平面・断面図

あり北側が深い。最も浅い部分で20cm、最深部で34cmである。

【埋土】灰色粘質土である。オリーブ灰色粘質土の小ブロックが散見され、しまりがある。炭化物をわずかに含む。

【遺物】出土していない。

③Ⅱ層上面検出遺構

S K2055土壤（第5図）

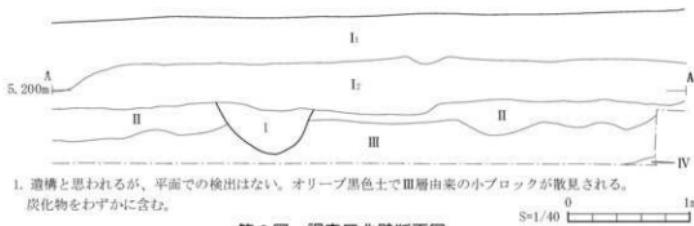
【位置・形態】調査区南の西寄りで確認した土壤である。

【重複】重複は無い。

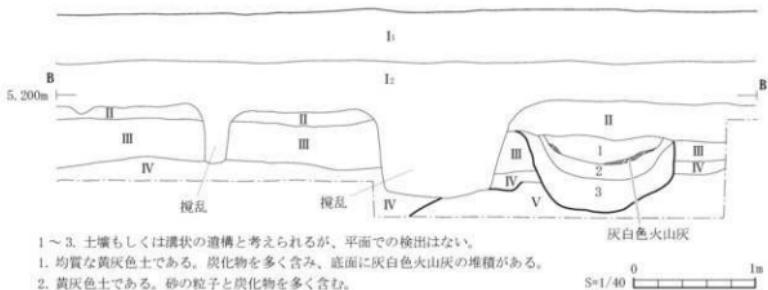
【方向・規模】平面形は東西方向の不整揃円形で、東側が湾曲する。規模は長軸140cm、短軸60cmである。底面は中央部が高く、南端と西端部に向かって緩やかに深くなる。深さは東端で20cm、西端で16cmで、壁は東端部で緩やかに立ち上がり、西端周辺部ではほぼ垂直に立ち上がる。

【埋土】灰オリーブ色土主体で、オリーブ黒色度の小ブロックを混入する。

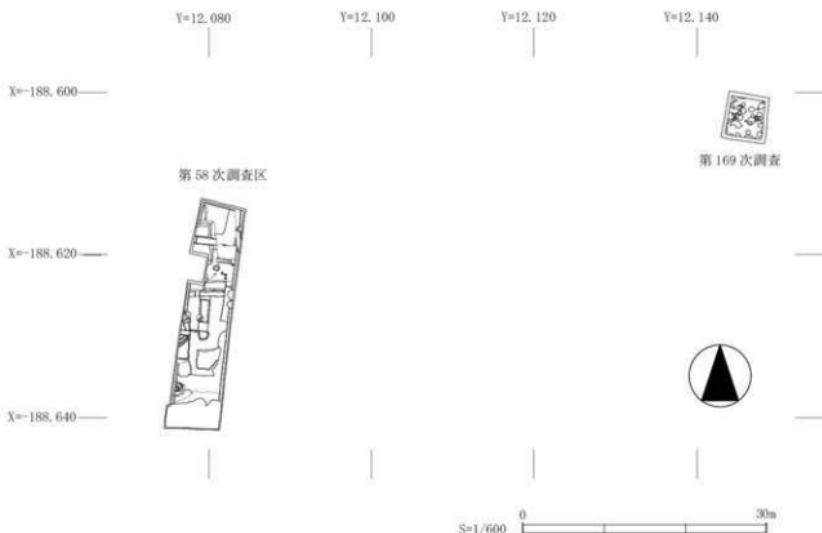
【遺物】土壤埋土の直上より銭貨1枚（紹聖通寶）と、埋土中より圧着した銭貨3枚（錢貨名判読できず）が出土している。



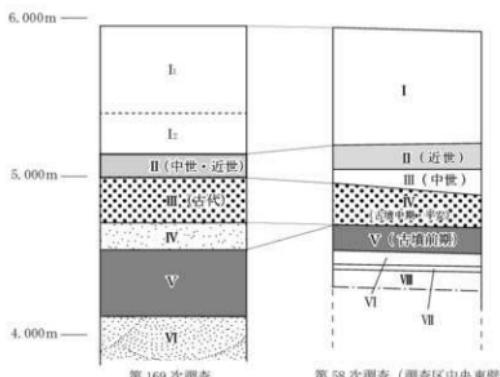
第6図 調査区北壁断面図



第7図 調査区東壁断面図



第 8 図 第 58・169 次調査位置関係図



第 9 図 層序対応関係模式図

3 まとめ

今回の調査では、II層およびIII層上面でピットと土壙を、V層上面で流路跡を発見した。しかし、遺構に伴う出土遺物が少なく断片的な資料がほとんどであるため、それぞれの遺構年代については、平成18年に実施された山王遺跡第58次調査の成果と比較しながら検討を進みたい。

山王遺跡第58次調査は本調査区より南西に約120mの地点で行われた調査で、古墳時代前期から近世の遺構を発見している。本調査区の最終検出面であるV層までの層位を比較すると、河川堆積と推定されるIV層が加わる以外は、標高値や土質がおおよそ対応関係にあることが分かる。以下、各層位の遺構年代について述べる。

まず本調査の遺構検出面の最下層に当たるV層（灰オリーブ色砂質土）であるが、その標高値と土質から、第58次調査のV層（黄灰色砂質土）に対応すると見られる。第58次調査では古墳時代前期の堅穴住居を検出していることから、本調査区のV層についても同年代以前の堆積層と考えられる。したがって、本調査V層上面で確認した流路S X1934および河川堆積と見られるIV層（灰色砂層）は、後述するIII層との関係より、おおよそ古墳時代前期から古墳時代中期に求められる。

次にIII層（オリーブ褐色土）について検証する。第58次調査と比較すると、古墳時代中期・平安時代の遺構を検出したIV層（にぶい黄橙色砂質土）に対応している。今回の調査では、III層上面で4基の土壙を確認しており、出土遺物はSK2058の埋土より古代の土器片、およびIII層土中より土師器壺（B III類）1点が出土している。また、灰白色火山灰の堆積がSK2056埋土の上層、およびIII層上面より掘り込む土壤状遺構（東壁断面）の埋土に見られること、加えて古墳時代の遺物が出土していないことを考慮すると、本調査区III層上面の検出遺構年代は、おおよそ灰白色火山灰降下前後の10世紀前葉頃およびそれ以前の時期の平安時代と考えることができよう。

本調査で最も新しい堆積であるII層（オリーブ黒色土）は、第58次調査で中・近世の遺構を検出したII層（褐灰色砂質土）およびIII層（黒褐色砂質土）に対応する。今回の調査ではII層上面で複数のピットおよび土壙を確認したが、II層が部分的に非常に薄い堆積であることから、検出したこれらの遺構の中には上層の旧表土に由来するものも含まれている可能性がある。その一方で、SK2055の埋土からは、中世の銭貨（紹聖元寶・初鑄1094年）も出土している。これらのことから、本調査で確認したII層の遺構年代については、概ね中世から近世の範疇のものとして捉えておきたい。

最後にI層についてであるが、旧表土であるI2層からは現代の遺物に交じって、近世の陶器・陶磁器片も出土している。現代の盛土I1が行われる以前、近世と現代の生活面が非常に近接しており、表土の搅乱が繰り返されたものと推察される。

参考文献

多賀城市教育委員会『山王遺跡 第58次調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第86集 2012

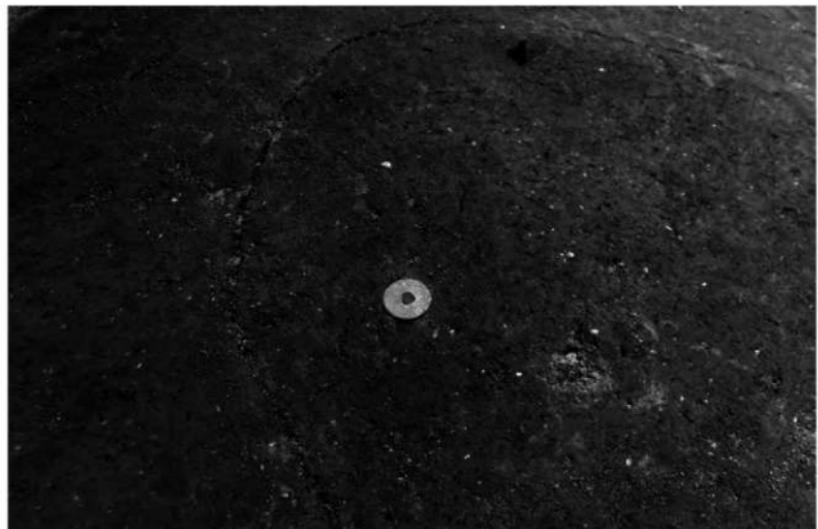


調査区全景（北東より）

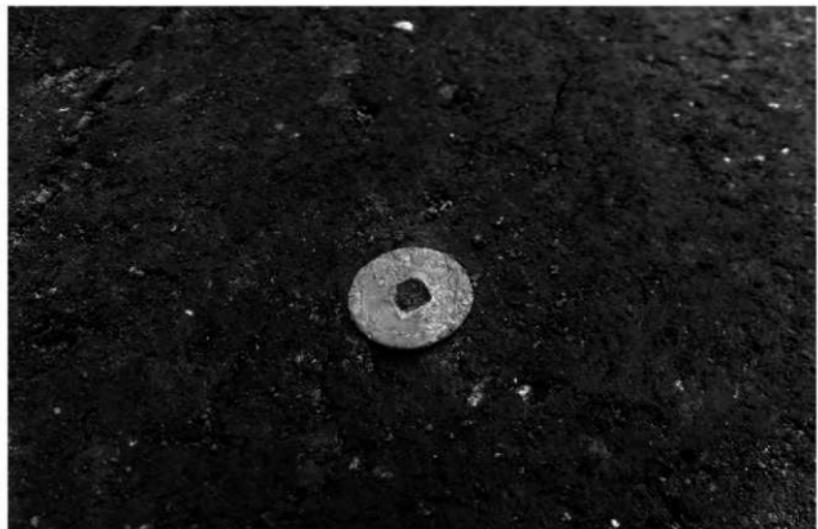


II 層積出状況（北東より）

写真図版 1



S K 11 銭貨出土状況（東より）



S K 11 銭貨出土状況（東より）

写真図版 2



S K 11 断面 (南より)

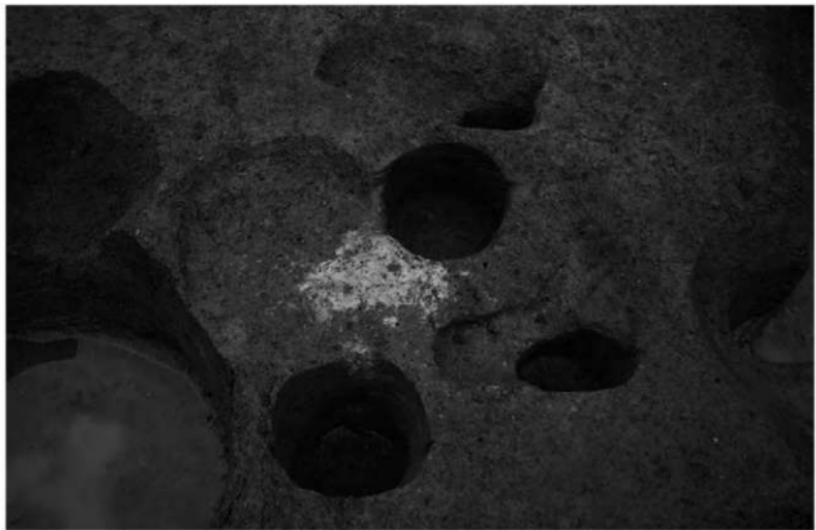


P i t 9 断面 (南より)

写真図版 3



III層検出状況（北東より）



SK 17 上面灰白火山灰堆積状況（北より）

写真図版 4



III層完掘状況（北東より）



東壁土壤断面の灰白色火山灰堆積状況（南より）

写真図版 5



V層検出状況（東より）



VI層検出状況（北西より）

写真図版 6

XI 山王遺跡第170～176次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字山王四区地内の同一の宅地分譲区画内における7件分の個人住宅建設に伴う本発掘調査である。平成28年7月1日から7月25日にかけて、地権者より当該地における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅の基礎工事の際に、直径600mm、長さ7.0mのソイルセメントバabilを16～22本施すものであった(表1)。当該地では、平成26年度に宅地造成計画に基づき、道路及び擁壁基礎部分の発掘調査(第142次調査)を実施しており、現地表から1.3m下で平安時代の道路跡をはじめ多くの遺構や遺物を発見していることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更によって遺跡を保存する協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないことから、本発掘調査を実施することになった。

調査は、掘削土置き場の確保をしながら行う必要があることから、第170～172次調査と第173～176次調査の2つの期間に分けて行った。

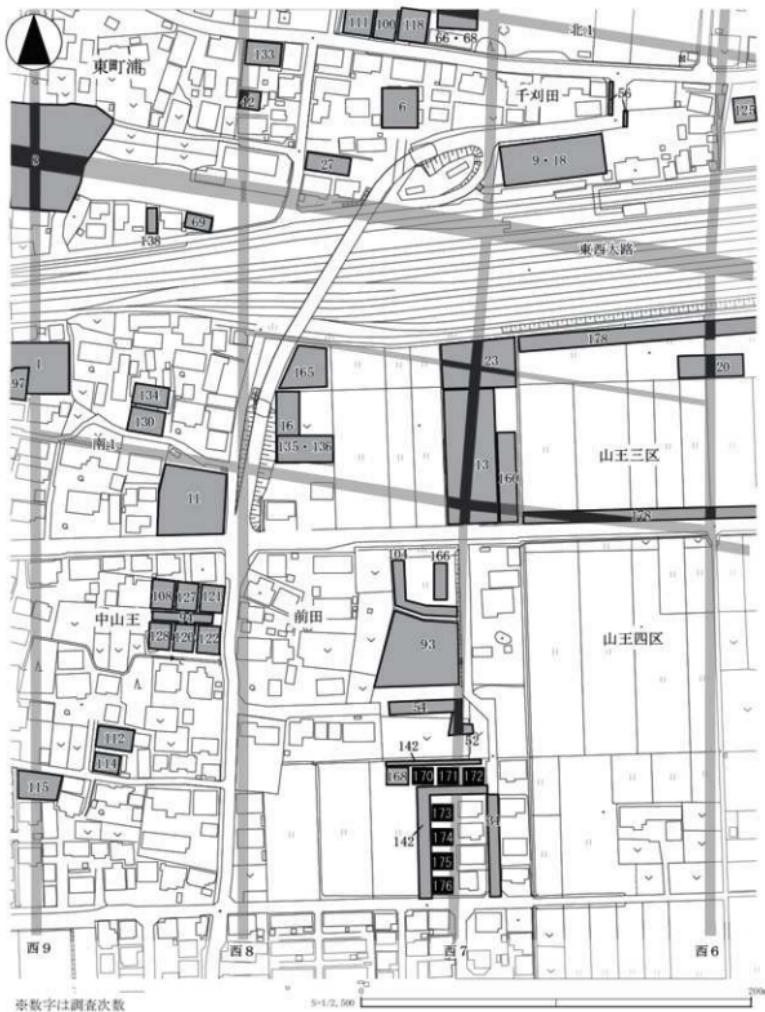
調査の主な経緯は以下のとおりである。

調査次数	かかわり協議書提出年月日	発掘調査の依頼及び承諾書提出年月日
第170次調査	平成28年7月1日	平成28年9月2日
第171次調査	平成28年7月21日	平成28年9月2日
第172次調査	平成28年7月25日	平成28年9月2日
第173次調査	平成28年7月15日	平成28年10月22日
第174次調査	平成28年7月15日	平成28年10月23日
第175次調査	平成28年7月6日	平成28年10月16日
第176次調査	平成28年7月1日	平成28年10月16日

表1 各調査ごとの協議書等提出年月日



第1図 方格地割と調査区の位置



第2図 第170-176次調査区と周辺の調査区

第170～172次調査

9月6日に重機による掘削を開始し、現代の盛土（I1層）及び現代の水田耕作土（I2層）を除去した。

9日より作業員を動員し、調査に必要な器材の搬入とフェンス等の安全設備の設置を行った。12日に重機による掘削を完了し、遺構検出作業を行ったところ、第170次調査区ではIII層上面で土壌等を、第171・172次調査区ではIV2層上面で道路跡等を検出した。この後、活発な秋雨前線の影響により雨の日が多くなり、調査区の水没からの復旧作業に日々を要した。26日に調査員により測量基準点の移設を行った。30日に第170次調査区のIII層上面での遺構検出作業完了した。10月4日に第171・172次調査区の遺構検出作業完了し、5日には第170～172次調査区の遺構検出状況写真撮影した。以降、道路跡の平面と断面を検討し、記録作成を行いながら埋土を掘り下げた。18日に道路跡の完掘状況の写真撮影を行った。20日に第170次調査区において、III層の除去作業後に、IV2層上面で遺構検出作業を行ったところ、IV1層上面で掘立柱建物跡等を検出した。24日に第170次調査区のIV2層上面検出状況と第172次調査区の畦畔検出状況の写真撮影を行った。27日に第170次調査区の一部をVI層上面まで掘り下げ、水田跡に伴う畦畔の検出作業を行ったが、確認できなかつた。31日に第170～172次調査区のすべての調査を完了。重機によって第173～176次調査の掘削を開始すると同時に、その掘削土で第170～172次調査区の埋め戻しを行う。



第171・172次調査 作業風景

第173～176次調

10月31日に重機による掘削を開始し、現代の盛土（I1層）及び現代の水田耕作土（I2層）を除去した。

11月5日には重機による掘削を完了し、III層上面で遺構検出作業を行ったところ、第175次調査区で小溝跡等を発見した。22日に調査員により測量基準点の移設を行った。12月1日にIII層の除去をおおよそ完了し、IV1・2層上面で遺構検出作業を行った。5日には第175次調査区で道路跡の西側溝に接続する東西溝を確認した。また、調査区北側で井戸跡を発見し、井戸枠内の埋土掘り下げを行った。20日に遠隔操作のマルチコプターによる空中写真撮影を行い、第173～176次調査区の全景写真を撮影した。その後井戸跡の枠内埋土をすべて除去し、井戸枠の一部を取り上げた。あわせて器材の撤収を行った。21日から重機で調査区の埋め戻しを開始し、24日に重機による埋め戻しを完了し、本発掘調査の一切を終了した。



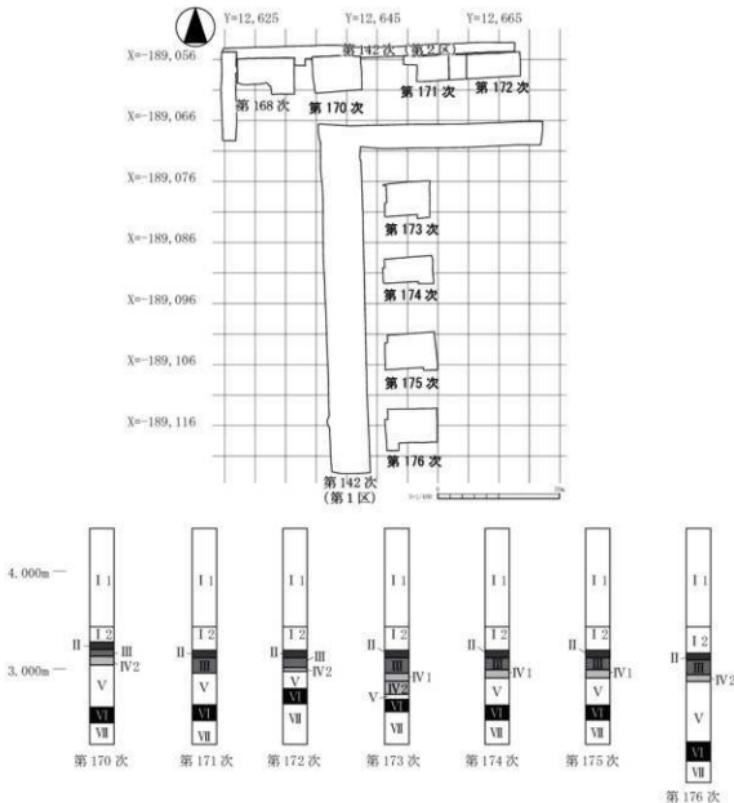
第176次調査 作業風景

2 調査成果

(1) 層序

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。(第3図)

- I 層：現代の盛土（I 1層）と水田耕作土（I 2層）である。厚さは I 1層が約 1m、I 2層が 18～25cm である。
- II 層：すべての調査区で確認しているが、一部、現代の耕作の削平によって、失われている箇所もある。すべての遺構を覆っており、灰白色火山灰を部分的に少量含む黒色粘土で厚さは 4～30cm である。
- III 層：すべての調査区で確認し、この上面で古代の遺構検出面となっているほか、S X 2000西 7 道路跡をはじめ古代の遺構を覆っている。灰白色火山灰と白色砂を含む黒褐色粘質土で厚さは 9～30cm である。



第3図 調査区配置図と層序模式図

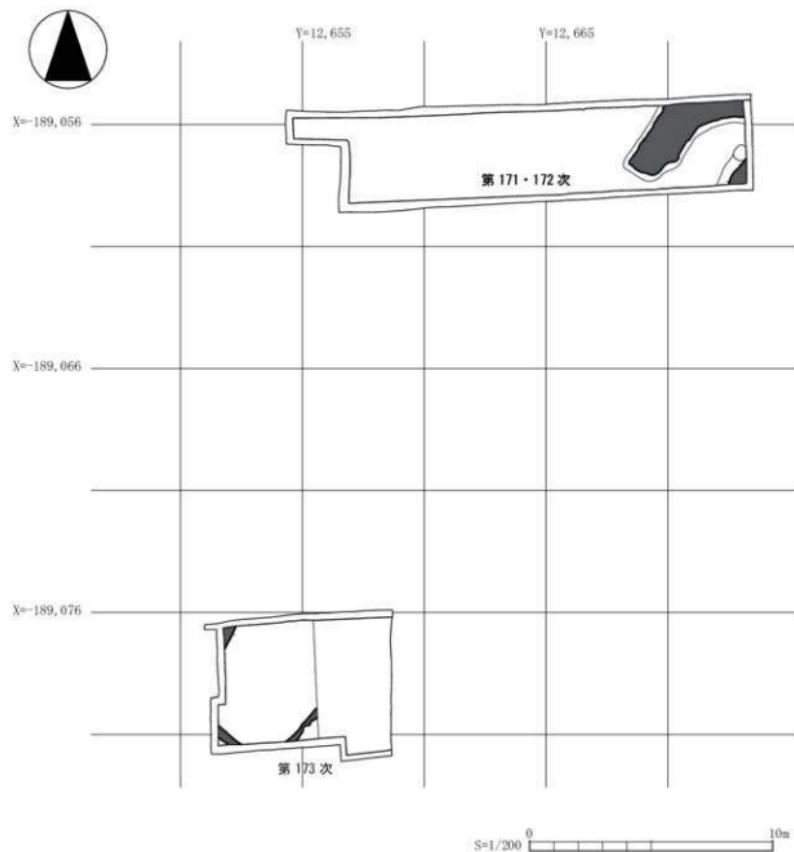
IV1層：第173次調査区と第174次調査区で確認した。この上面では、S X 2000西 7 道路跡をはじめ古代の遺構の検出面となっている。暗褐色粘土で厚さは10cmである。

IV2層：第170・172・173・176次調査で確認した。この上面では、古代の遺構の検出面となっている。オリーブ褐色砂質土でV層に起因する土を斑状に含む。厚さは4～15cmである。

V 層：すべての調査区で確認した。古代の基盤層である。黄褐色粘土と黒褐色・オリーブ褐色砂の互層で厚さは9～68cmである。

VI 層：すべての調査区で確認した。古墳時代前期の水田耕作土層である。黒色粘土で厚さは9～25cmである。

VII 層：すべての調査区で確認した。黄褐色砂である。



第4図 S X 2020 水田跡平面図

(2) 発見遺構と遺物

【VI層上面検出遺構】

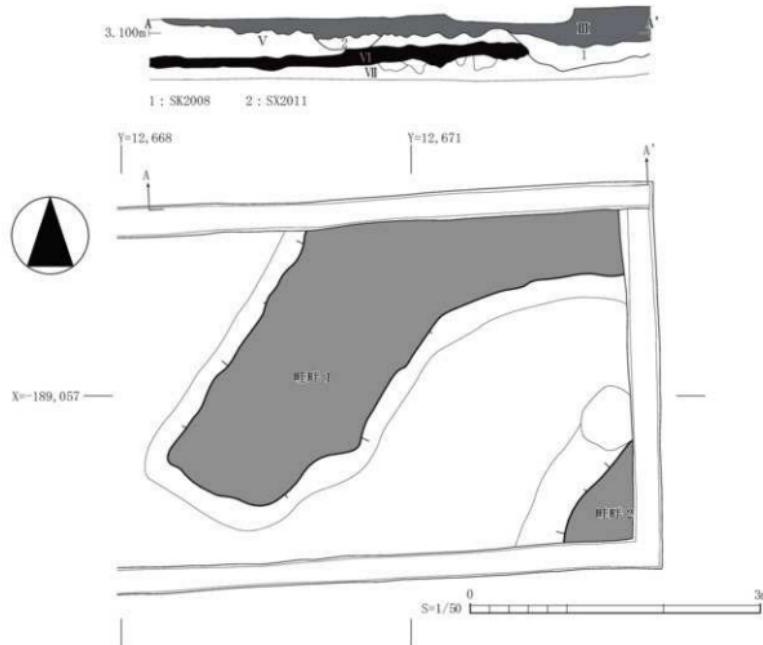
S X2020水田跡（第4～6図）

【位置・形態】第172次調査区で畦畔2条、第173次調査区で畦畔3条を確認した。

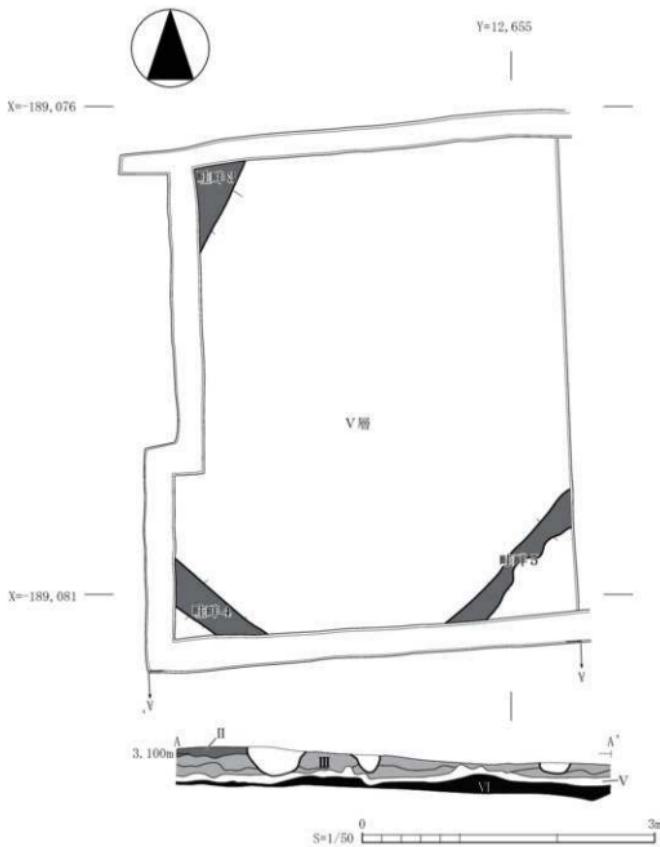
【検出面】VI層が水田層である。

【耕作土・畦畔・区画の規模】黒色粘土で、厚さは9～25cmである。底面は耕作の痕跡とみられる凹凸が一部で見られる。区画の規模について全体が明らかなものはない。第173次調査の畦畔の形状や方向から推測して、区画の形は方形であると推測される。畦畔の規模については表2のとおりである。

【遺物】出土していない。



第5図 SX2020水田跡（第172次調査区）平面・断面図



第6図 S×2020 水田跡（第173次調査区）平面・断面図

番号	検出長	方向	上端幅		下端幅		水田面からの比高
			最小	最大	最小	最大	
畦畔1	3.5m	N-38°-E	1.1m	1.6m	1.6m	2.0m	11cm
畦畔2	70cm	N-34°-E	-	-	-	-	-
畦畔3	1.0m	N-27°-E	-	-	-	-	-
畦畔4	1.2m	E-43°-S	31cm	38cm	-	-	11cm
畦畔5	1.7m	N-43°-E	13cm	30cm	-	-	8cm

表2 水田畦畔計測値

〔V層上面検出構造〕

S K1982土壤 (第7・10図)

【位置】第170次調査区の西側で発見した。

【重複】SD1976と重複しており、それより古い。

【平面形・規模】平面形は、大部分が調査区外にあり、不明である。規模は、深さ8cmである。

【埋土】黒褐色埋土である。

【遺物】出土していない。

S K1997土壤 (第8・21・22図)

【位置】第171次調査区の南西角で発見した。

【重複】他の構造との重複は無い。

【平面形・規模】平面形はほぼ円形で、規模は直径90cm、深さ17cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】2層確認した。1層は砂を多く含む黒褐色土で、2層は黒褐色砂である。

【遺物】出土していない。

〔IV 2層上面検出構造〕

S B1980掘立柱建物跡 (第9・10図)

【位置】第170次調査区西側で発見した。

【桁行・梁行】位置関係から第142次調査区で発見した柱穴

が隅柱と考えられ、桁行3間、梁行2間の建物跡と推定される。

【柱痕跡・柱抜き取り穴の有無】柱穴は7基 (P 1～7) 検出しており、そのすべてで柱抜き取り穴を確認した。

【重複】SD1974と重複しており、それより新しい。

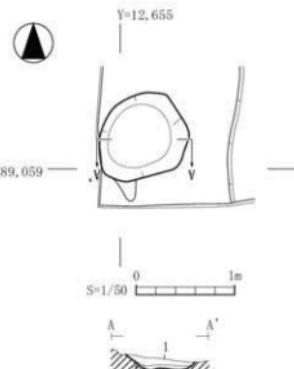
【方向・規模】方向は東側柱列で計ると北で2度東に偏している。建物の規模は、東側柱列で約3.5m、柱間は北から約1.6m、約1.9mである。

【掘方】平面形は方形もしくは円形であり、規模はP 2で長辺40cm、短辺32cm、深さ24cm、P 5で直径35cm、深さ35cmである。埋土は暗オリーブ褐色土にV層に起因する土を斑状に多く含む。

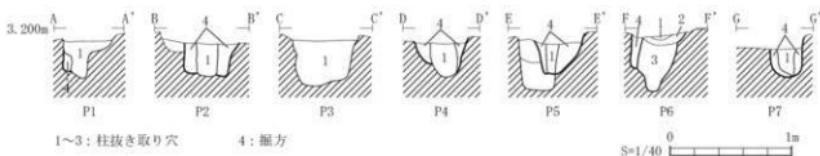
【柱抜き取り穴】P 1・2・5～7では底面に柱のあたり痕跡を確認した。埋土はいずれも黒褐色～暗褐



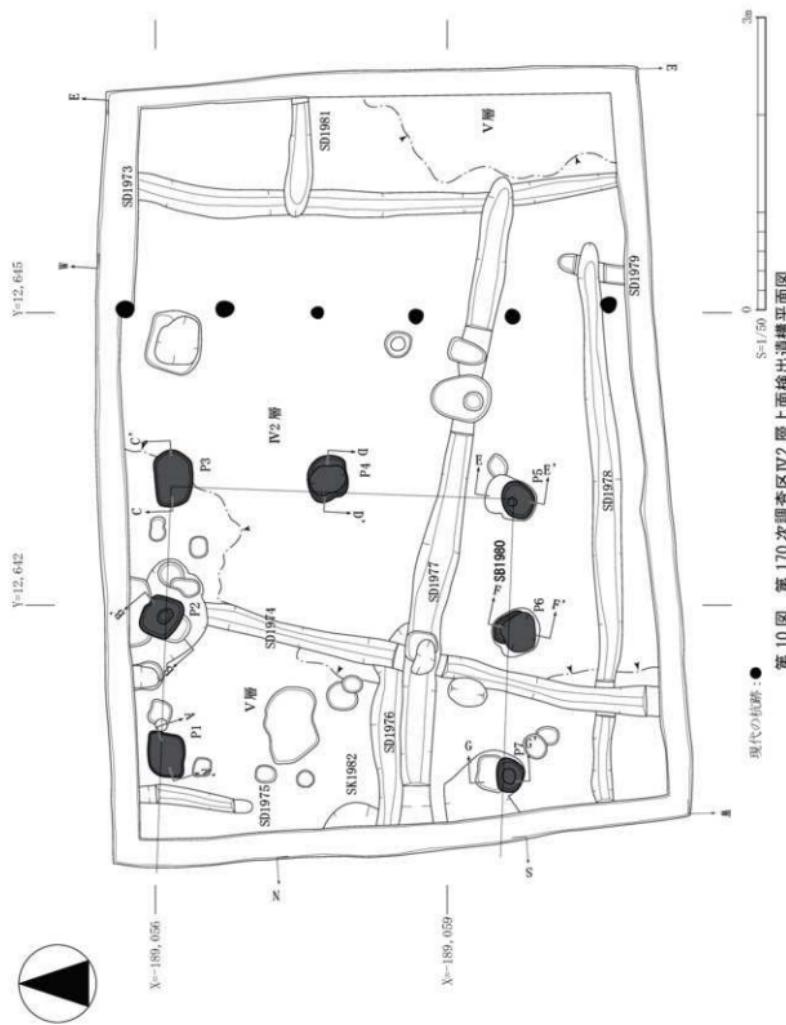
第7図 SD1976・1977溝跡、SK1982土壤断面図



第8図 SK1997土壤平面・断面図



第9図 SB1980掘立柱建物跡断面図



第10圖 第170次調查區IV2層上面檢出遺構平面圖

色土である。

【遺物】出土していない。

S A 1990柱列跡（第11・24図）

【位置】第176次調査の西側で発見した。

【柱間】2間分確認した。さらに第176次調査区を超えて南に延びる可能性もある。

【柱痕跡・柱抜き取り穴の有無】柱穴は3基（P8～10）検出しており、そのすべてで柱抜き取り穴を確認した。

【重複】SD2033・2034と重複しており、これらより新しい。

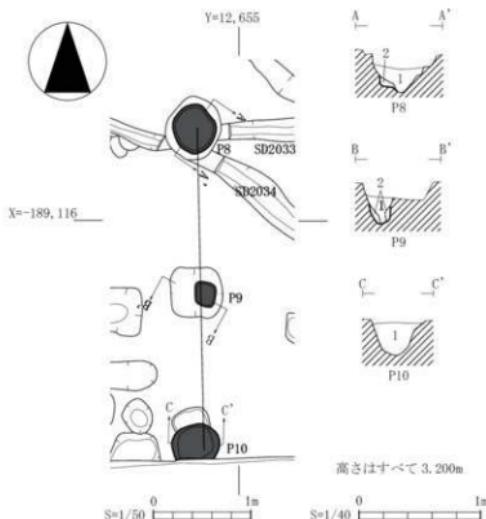
【方向・規模】方向は北で西に約1度偏している。柱列の規模は、約3.3mあり、柱間は北から約1.7m、約1.6mである。

【掘方】P8・9で掘方を確認した。柱抜き取り穴で大きく壊されており、平面形は不明である。埋土はV層に起因する土を斑状に多く含む灰オリーブ～灰色砂質土である。

【柱抜き取り穴】P8・9で底面に柱

のあたり痕跡を確認した。埋土はいずれもV層に起因する土を斑状に含む黒褐色土である。

【遺物】柱抜き取り穴から須恵器坏、土師器坏・甕（A類・B類）が出土している。



第11図 SA 1990 柱列跡平面・断面図

S E 2010井戸跡（第12・24図）

【位置】第175次調査区の北側で発見した。

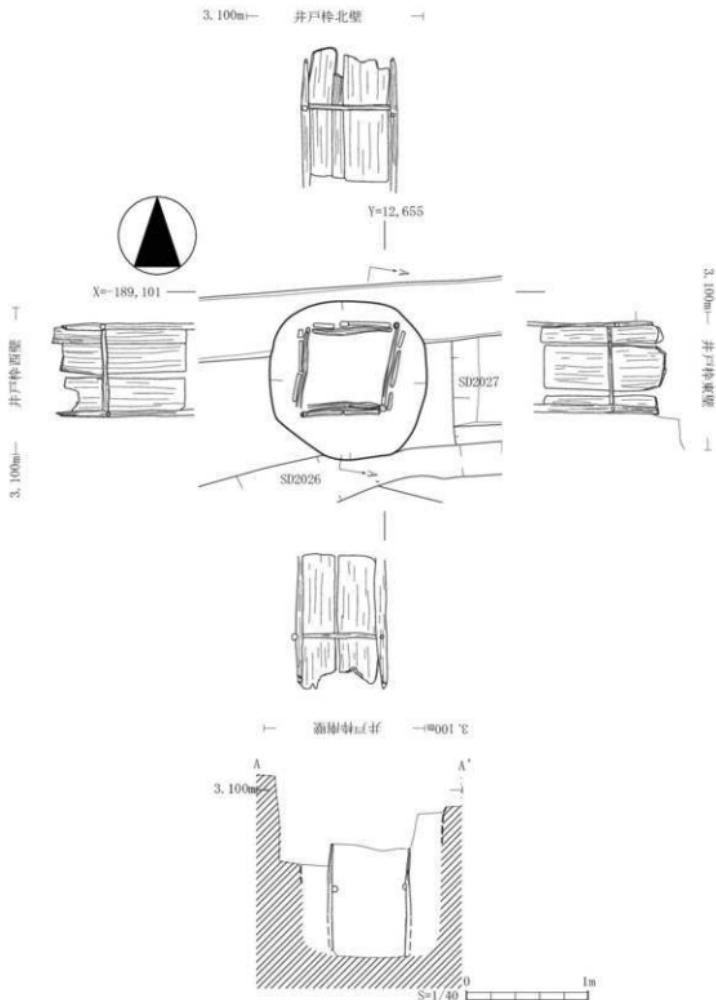
【重複】SD2026と重複しており、これより新しい。

【井戸枠】井戸枠は掘方のほぼ中央で確認した。枠の構造は、四隅に立てた支柱に横木に縦板を取り付け、周囲を裏込めとして埋めた掘方埋土の土圧で、縦板を押さえ込む構造となっている。井戸枠の平面形は方形で、北側の井戸枠でみると一辺78cm、縦板は長さ0.8～1.0m、幅が10～37cmのものを3枚組み合わせている。

【規模】検出面から井戸の底面までの深さは約1.1mである。

【埋土】井戸枠内の埋土は、砂を含む黒褐色粘土である。

【遺物】井戸枠内から須恵器坏（Ⅲ類）・甕、土師器坏（B V類）・甕（B類）、須恵系土器坏、漆器椀が、掘方埋土から須恵器坏・甕、土師器坏（B類）・甕（B類）が出土している。



第12図 SE2010 井戸跡遺構平面図・立面図・断面図

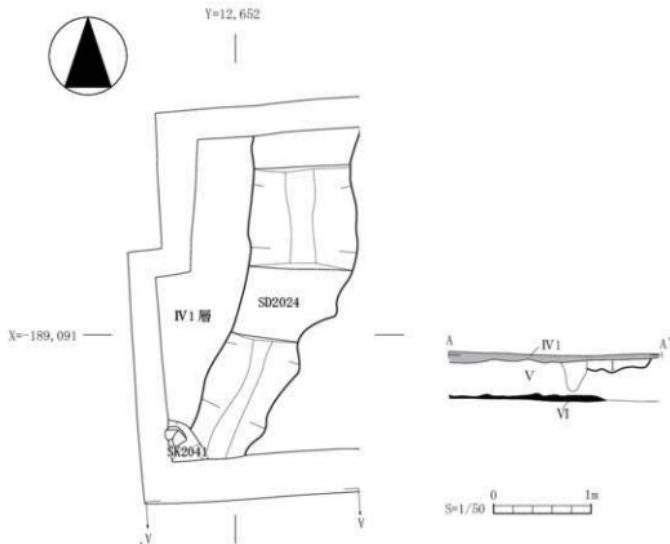
S D2024溝跡（第13・14・23図）

【位置・形態】第174次調査区の西側で発見した南北方向の溝跡である。

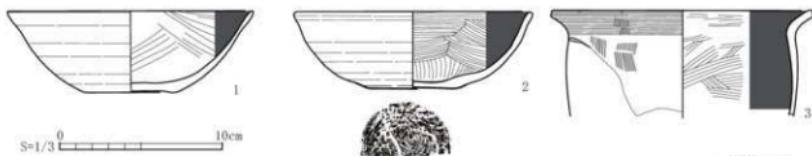
【重複】SK2041土壤と重複しており、それより古い。

【方向・規模】方向は、北で東に約16度偏している。規模は、長さ3.5m以上、上幅0.6～1.1m、深さ16cmである。

【遺物】土師器壺（BV類）・甕（A類）が出土している。



第13図 SD2024溝跡平面・断面図



(単位: cm)

番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	登録 番号	備考
			外面	内面					
1	土師器 壺	1層	クロナデ	ヘラミガキ のち黒色処理	15 0.5/24	6 11/24	5	SN174 R4	BV類
			底部：回転糸切り						
2	土師器 壺	1層	クロナデ	ヘラミガキ のち黒色処理	14.6 7/24	5.6 13/24	4.7	SN174 R5	BV類
			底部：回転糸切り						
3	土師器 甕	1層	ハケメ→ミガキ	ヘラミガキのち黒色処理	19.0 16/24	—	—	SN174 R6	A類

第14図 SD2024溝跡出土遺物

S D2025溝跡（第15・23図）

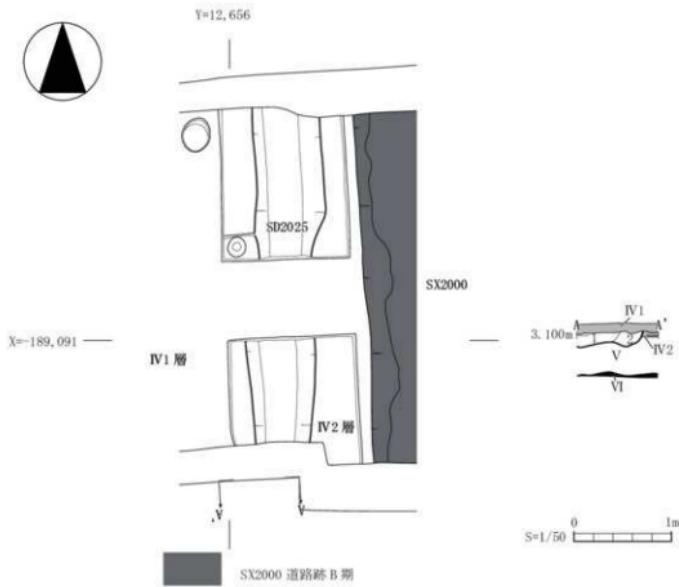
【位置・形態】第174次調査区の東側で発見した南北方向の溝跡である。

【重複】他の遺構との重複はない。

【方向・規模】方向は北で東に約1度偏しており、規模は長さ3.4m、上幅58～72cm、深さ16cmである。

【埋土】V層に起因する土を斑状に含む黒褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。



第15図 S D2025 溝跡平面・断面図

S K1998土壤（第16図）

【位置】第172次調査区の西側で発見した。

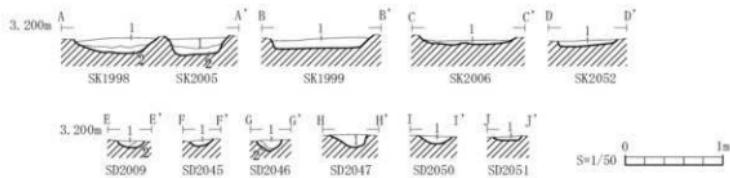
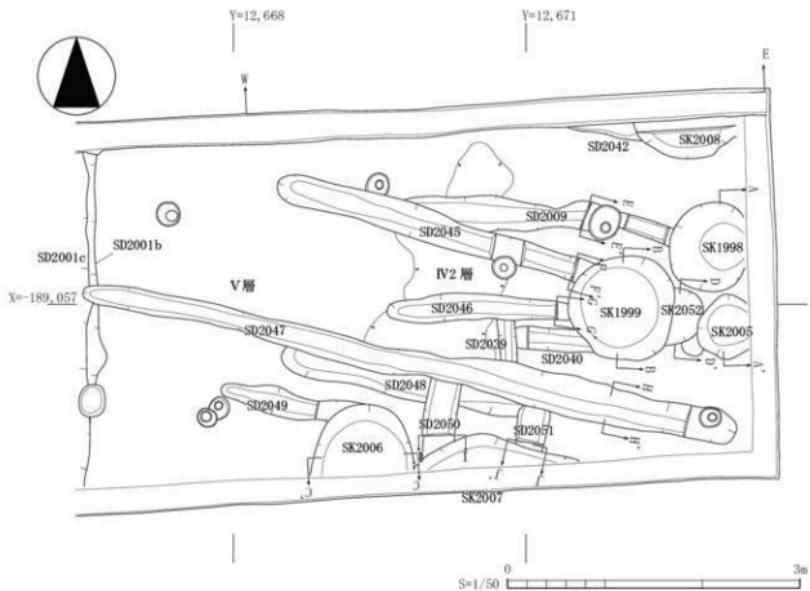
【重複】SD2009と重複しており、それより新しい。

【平面形・規模】平面形は円形で、直径92cm、深さ18cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】2層確認できた。1層は暗オリーブ褐色土で、2層は黒褐色粘土である。

【遺物】土師器甕（B類）が出土している。



第 16 図 第 172 次調査区 IV2 層上面検出遺構平面・断面図

S K1999土壤（第16図）

【位置】第172次調査区の東側で発見した。

【重複】S D2040・2045・2046、S K2052と重複しており、これらより新しい。

【平面形・規模】平面形はほぼ円形で、規模は直径1.1m、深さ11cmである。

【壁・底面】壁は急に立ち上がり、底面は平坦である。

【埋土】V層に起因する土を斑状に含む黄褐色粘土である。

【遺物】須恵器坏、土師器坏（B類）・甕（B類）、須恵系土器坏が出土している。

S K2006土壤（第16図）

【位置】第172次調査区の南側で発見した。

【重複】S D2049と重複しており、それより新しい。

【平面形・規模】平面形は円形と推測される。直径約1m、深さ11cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸があるがおおむね平坦である。

【埋土】黄灰色粘土である。

【遺物】土師器坏（B類）・甕（B類）が出土している。

S K2007土壤（第16図）

【位置】第172次調査区の南側で発見した。

【重複】S D2050・2051と重複しており、それより新しい。

【平面形・規模】大部分が調査区外に延びており、平面形は不明である。規模は東西1.7m以上、南北35cm以上、深さ5cmである。

【遺物】出土していない。

S K2008土壤（第16図）

【位置】第172次調査区の北東角で発見した。

【重複】S D2042と重複しており、それより新しい。

【平面形・規模】大部分が調査区外に延びており、平面形は不明である。規模は東西1.0m以上、南北66cm以上、深さ42cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸があるがおおむね平坦である。

【埋土】V層に起因する土を斑状に含む黒褐色土である。

【遺物】出土していない。

S K2031土壤（第24図）

【位置】第175次調査区の東側で発見した。

【重複】S X2000と重複しており、それより新しい。

【平面形・規模】梢円形と推測され長軸1.4m、短軸55cm以上である。

【遺物】出土していない。

S K2035土壤（第17図）

【位置】第176次調査区の北側で発見した。

【重複】他の遺構との重複は無い。

【平面形・規模】大部分が調査区外に延びているため全体が明らかではないが、平面形は橢円形と推測され長軸80cm以上、短軸66cm以上である。

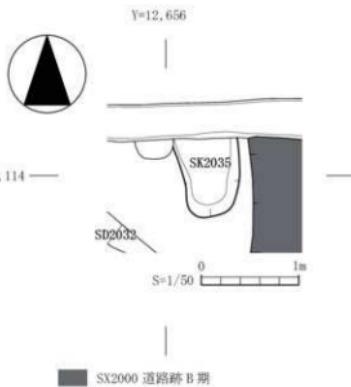
【遺物】出土していない。

S K2052土壤（第16図）

【位置】第172次調査区の東側で発見した。

【重複】S K1999・2005と重複しており、これらより古い。

【平面形・規模】S K1999に大部分を壊されているが、円形と推測される。規模は直径58cmである。



第17図 S K2035 土壤平面図

第170次調査区検出小溝群跡（第10図）

【位置】調査区のほぼ全面で確認した。

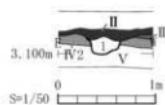
【方向・変遷】小溝跡の方向と重複関係から新しい順にA群のSD1977・1981とB群のSD1973～1975、C群のSD1976・1978、D群のSD1979に分けられる。方向はA群が東で南に約2～8度、B群がSD1973が南北の発掘調査基準線に沿うほかは約7～11度、C群が東で南に約2～3度偏している。

【重複】S B1980と重複しており、それより古い。

【規模】SD1977でみると、長さ6.7m以上、上幅22～40cm、深さ11cmである。

【埋土】暗オリーブ色粘土である。

【遺物】SD1974・1977から土師器甕（B類）が出土している。



第18図 SD1979 溝跡断面図

第175次調査区検出小溝群跡（第24・30図）

【位置】調査区の北側と東側で確認した。

【方向・変遷】南北方向のSD2027・2030と東西方向のSD2026・2028がある。小溝跡での変遷はSD2027→SD2026→SD2028となっている。方向はSD2027・2030で南北の発掘調査基準線に沿い、SD2026で東で北に約9度、SD2028で東で南に約12度偏している。

【重複】SX2000・2029、SD2003、SE2010と重複しており、それより古い。

【規模】SD2027でみると、規模は長さ1.5m以上、上幅52～59cm、深さ21cmである。

【埋土】黒褐色土である。

【遺物】SD2026から須恵器甕（III類）・甕、土師器甕（B類）・甕（B類）が出土している。

第176次調査区検出小溝群跡（第19図）

【位置】調査区の北側で確認した。

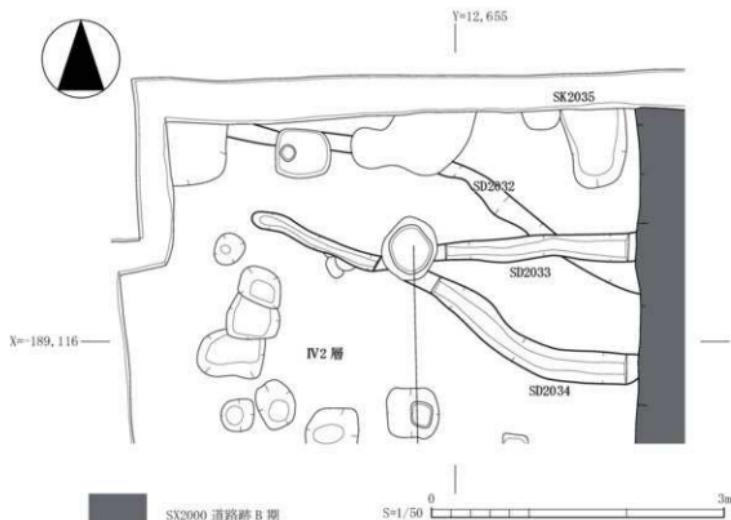
【方向・変遷】東西に蛇行しほぼ並行する S D 2032・2034と、それらより古い東西方向の S D 2033に分けられる。蛇行する S D 2032・2034は、西端で東で南に約20度、中央で約38度、東端で約4度で、S D 2033は東で北に約2度偏している。

【重複】S X 2000、S A 1990と重複しており、それらより古い。

【規模】S D 2033でみると、規模は長さ2m、上幅17～29cm、深さ7cmである。

【埋土】黒褐色土である。

【出土】出土していない。



第19図 S D 2032～2033 溝跡平面図

S X 2029（第24・30図）

【位置】第175次調査区の東側で発見した。

【重複】S X 2000、S D 2003・2026・2028と重複しており、S X 2000、S D 2003より古く、S D 2026・2028より新しい。

【平面形】S X 2000、S D 2003に壊され、平面形は明らかではない。

【遺物】出土していない。

【IV 1層上面検出遺構】

S X2000道路跡（第20～28回）

【位置・規模】第171～176次調査区で発見した南北方向の道路跡である。位置や方向、規模などから、多賀城南面に施工された方格地割を構成する道路網のうち、西7道路に相当する。調査においては、SD 2001東側溝とSD 2002西側溝を確認した。第171次調査区から第176次調査区まで長さ約65mあり、南北ともさらに調査区の外に延びている。道路幅は、C期の側溝心々間で5.5m、路面幅で約3.3mである。A・B期はC期及び攪乱に壊されており、不明である。

【変遷】道路側溝の重複関係の検討から、3時期（a期→c期）の変遷があることを確認した。

【方向】今回長く検出した西側溝で計ると、a期はおよそ南北の発掘調査基準線に沿い、b・c期は北で約2度東に偏している。

【重複】SD 2014（第172次）及びSD 2018（第173次）、SX 2029（第175次）、SD 2030（第175次）、SK 2031（第175次）、SD 2032～2034（第176次）と重複しており、SD 2014（第172次）より古く、それ以外より新しい。

SD 2001東側溝

a期：東側溝で最も古い時期にあたり、大部分を後続するb・c期に壊されている。

【規模】残存している部分で確認した規模は、上幅約40cm、深さ約15cmである。

【壁・底面】底面はおよそ平坦で、壁は急に立ち上がる。底面の標高は調査区の南北で比べると、差はほとんど無い。

【埋土】黒褐色粘土を斑状に含む褐灰色粘土である。

【遺物】出土していない。

b期：後続するc期に大部分を壊されている。a期に対してはほぼ同位置、c期に対しては約50cm東側に位置を変えてつくられている。

【規模】残存している部分で確認した規模は、深さ22cmである。

【壁・底面】底面はおよそ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面の標高は調査区の南北で比べると、差はほとんど無い。

【埋土】明黄褐色土を斑状に含む黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

c期：攪乱で一部破されている。b期に対して約50cm西側に位置を変えてつくられている。

【規模】上幅1.8～2.2m、下幅47～55cm、深さ約50cmである。

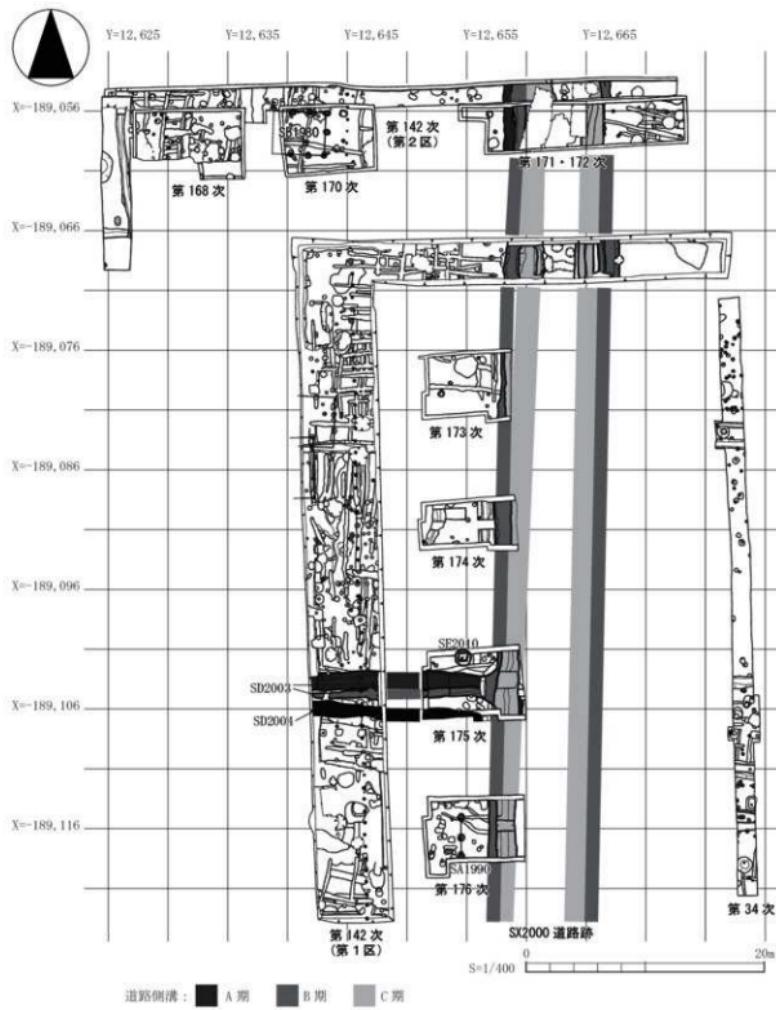
【壁・底面】底面はほぼ平坦で、壁は、a・b期に比べて緩やかに立ち上がる。底面の標高を第172次調査区の南北壁面で比べた場合、調査区北端が南端に比べ10cm低い。

【埋土】4層確認した。1層は黒色粘土、2層は黒褐色粘質土、3層は黒褐色粘質土、4層はV層に起因する土を斑状に多く含む黒褐色粘土で、灰白色火山灰の粒を含んでいる。

【遺物】須恵器坏（III類・V類）・甕・長頸瓶・土師器坏（B類）・高台付坏・甕（B類）・平瓦（IA類）・丸瓦（II類）が出土している。

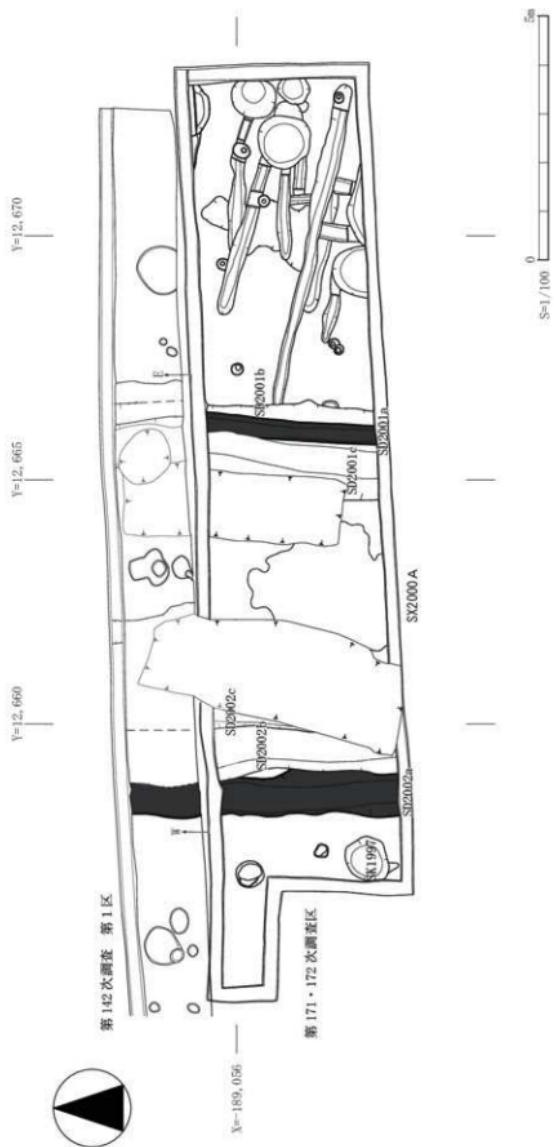
SD 2002西側溝

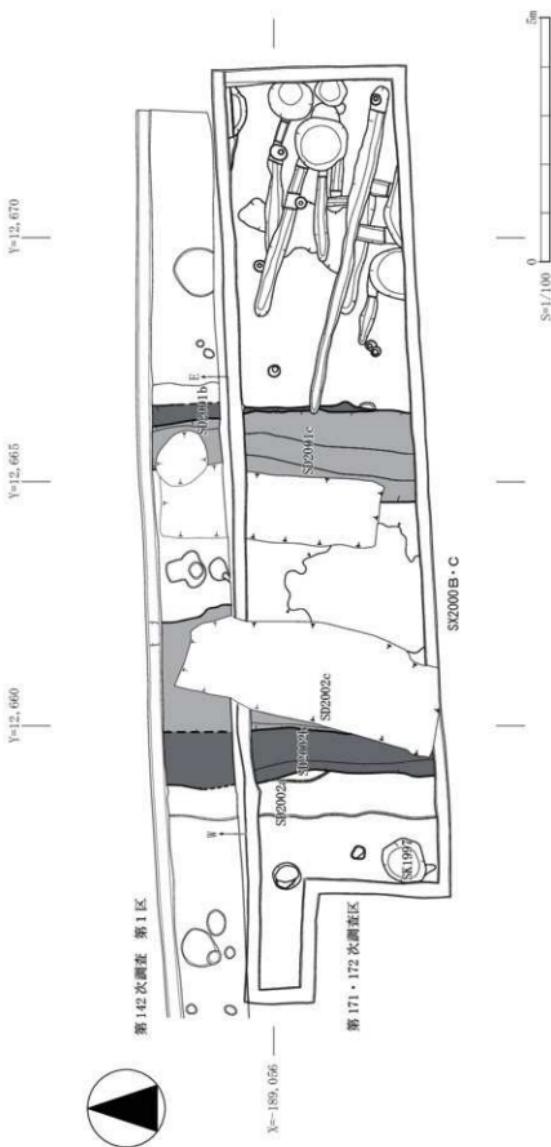
a期：西側溝で最も古い時期にあたる。第173～176次調査区では、大部分を後続するb・c期に壊されている。



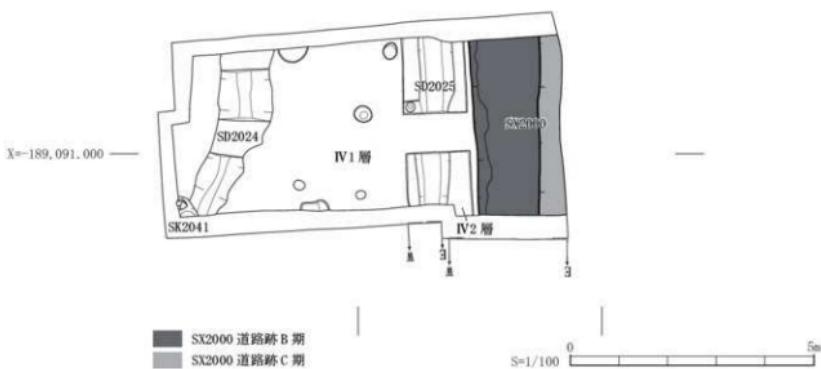
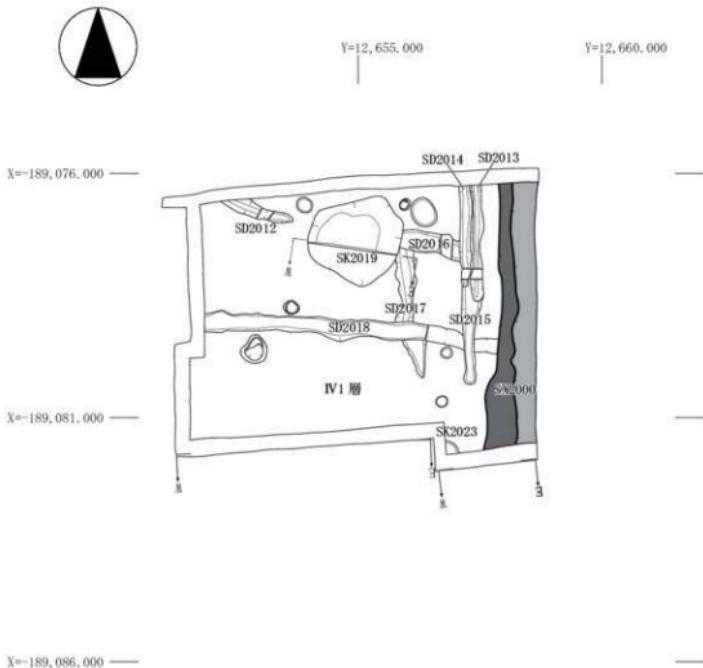
第 20 図 S X2000 道路跡平面図

第21図 S×2000道路跡A期（第171・172次調査区）平面図

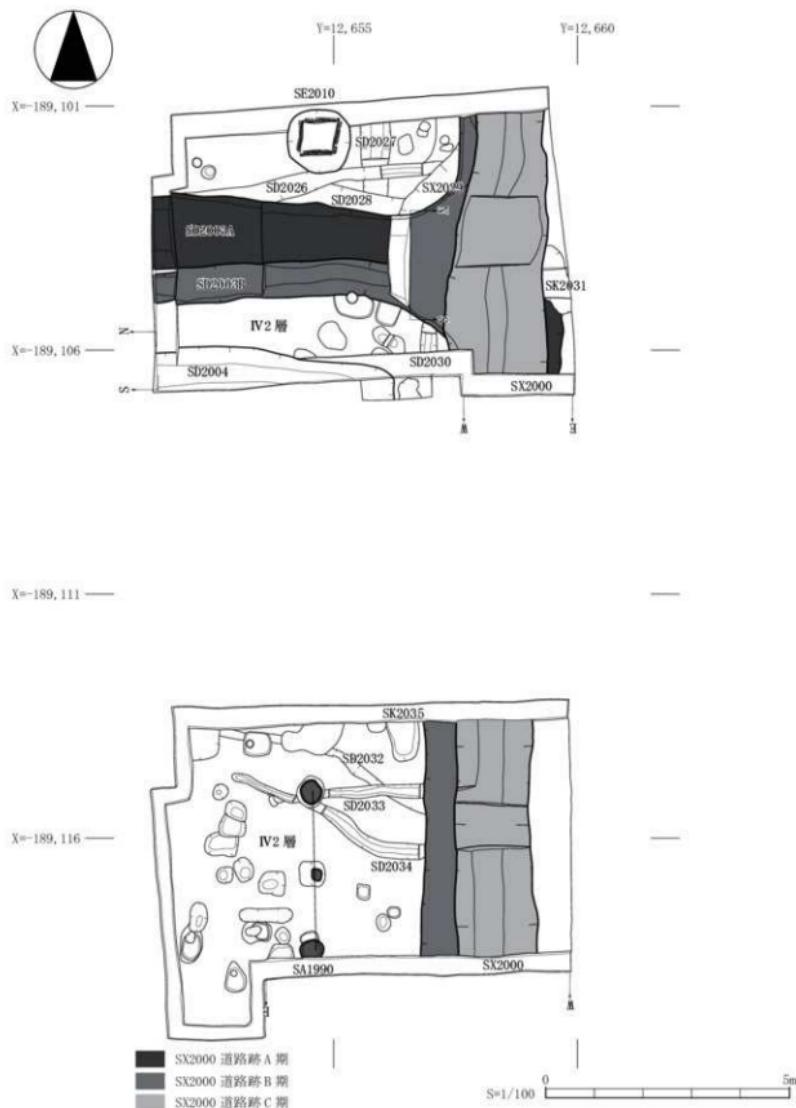




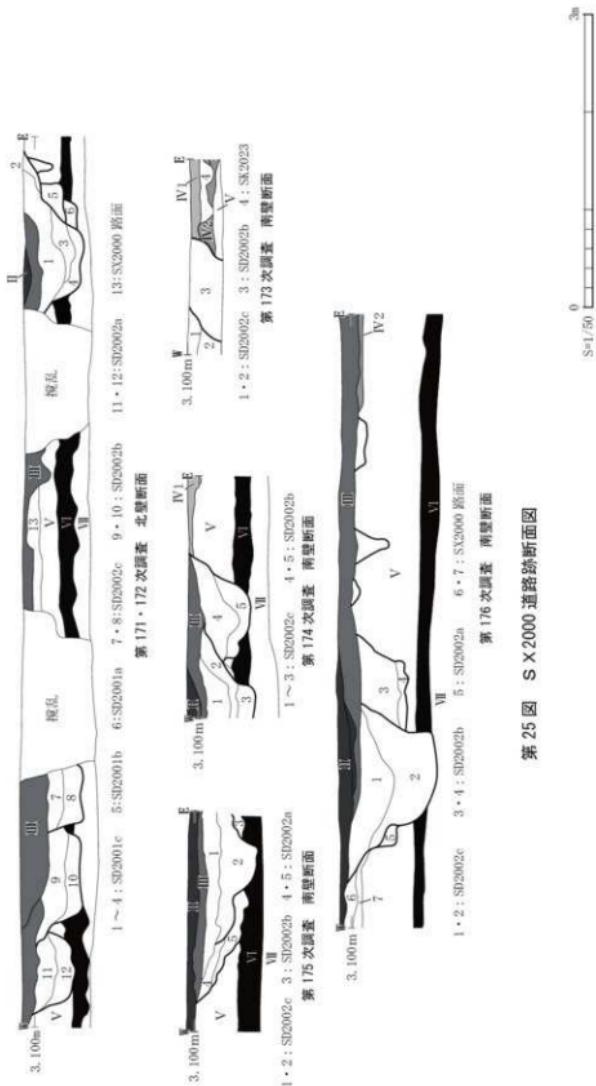
第22圖 S×2000道路跡B・C期（第171・172次調査区）平面図



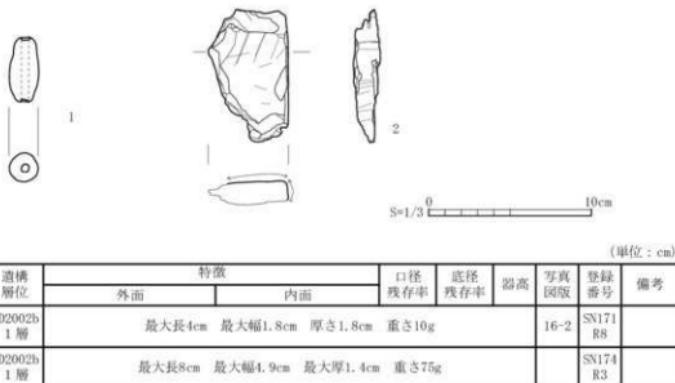
第23図 S X2000 道路跡（第173・174次調査区）平面図



第24図 S X2000道路跡（第175・176次調査区）平面図



第 25 圖 S × 2000 道路跡断面図



第26図 S-X2000 道路跡B期出土遺物

【規模】上幅73～85cm、下幅45～55cm、深さ42cmである。

【壁・底面】底面はおよそ平坦で、壁は急に立ち上がる。底面の標高は第171次調査区北壁と第176次調査区南壁で比較すると、ほとんど差は無い。

【埋土】2層確認した。1層は黒褐色～黒色粘質土で、2層は黒褐色粘質土である。いずれもV層に起因する土を斑状に含んでいる。

【遺物】出土していない。

b期：一部後続するc期に壊されている。a期に対しては約1m東側に、c期に対しては約80cm西側に位置を変えてつくられている

【規模】上幅1.2m、下幅75cm、深さ35～50cmである。

【壁・底面】底面はおよそ平坦で、壁は急に立ち上がる。底面の標高を第171次調査区北壁と第176次調査区南壁で比較すると、ほとんど差は無い。

【埋土】2層確認した。1層は黒褐色粘土で、砂と灰白色火山灰を含む。2層はV層に起因する土を斑状に含む黒褐色粘土である。

【遺物】1層から須恵器壺・甕・長頸瓶、土師器壺（B類）・甕（B類）、土錐、砥石が出土している。

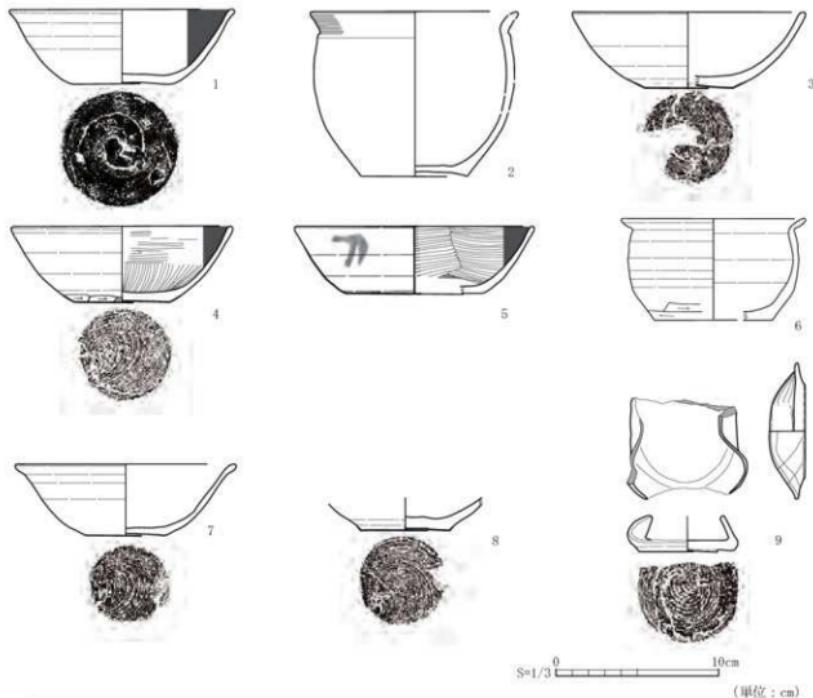
c期：第171次調査区では搅乱に大部分を壊されている。b期に対して約80cm東側につくられている。

【規模】上幅約1.2m、下幅70cm、深さ35～40cmである。

【壁・底面】底面はおよそ平坦で、壁は急に立ち上がる。底面の標高を第171次調査区北壁と第176次調査区南壁で比較すると、南側が35cm低く、緩やかに南に向かって低くなっている。

【埋土】2層確認した。1層は黒褐色粘質土～粘土に黄褐色～灰オリーブ色粘土を斑状に含む。2層は黄褐色～黒褐色粘土に灰白色火山灰を多量に含む。

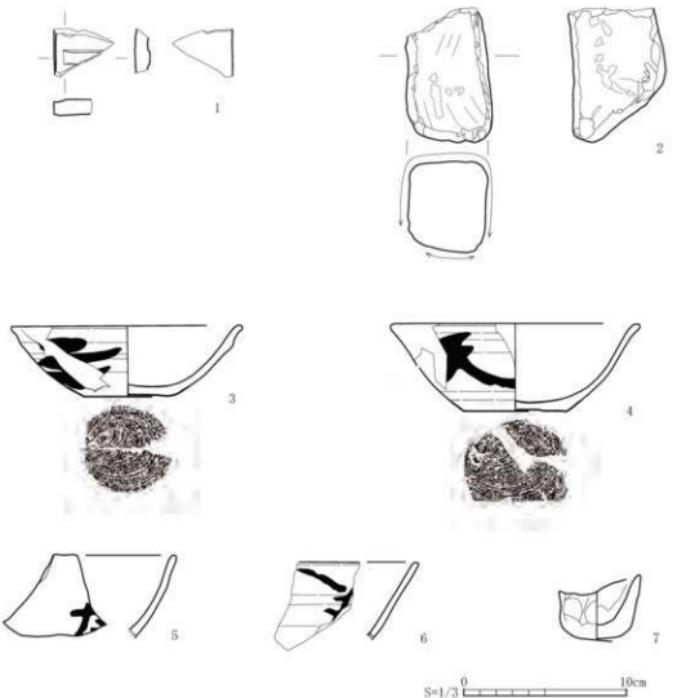
【遺物】1層からは須恵器（V類）・甕・長頸瓶、土師器壺（B V類）・高台付壺・甕（B類）、須恵系土器壺・高台付壺、丸瓦（II類）、平瓦（II B類-a）、巡方が、2層からは須恵器壺（V類）・甕、土師器壺（B V類）・高台付壺・甕（B類）、須恵系土器壺・耳皿・鉢、綠釉陶器、灰釉陶器碗、丸瓦（II類）、石帶（巡方）、砥石が出土している。



(単位: cm)

番号	種類	遺構 層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	登録 番号	備考
			外面	内面					
1	土師器 环	SD2001c 1層	ロクロナデ 底部: ヘラ切り	ロクロナデ ヘラミガキ のち黒色処理	13.7 /24	6.0 /24	4.55	SN172 R4	B III 類
2	土師器 环	SD2001c 2層	口縁部: ヨコナデ 体部: ナデ 底部: 木葉痕あり	ヨコナデ	12.6 5/24	6.4 20/24	10.1	SN172 R3	A 類
3	須恵器 环	SD2002c 1層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ロクロナデ	14.3 5/24	5.5 20/24	4.65	SN174 R2	V 類
4	土師器 环	SD2002c 1層	ロクロナデ 底部: 手持ちヘラケズリ	ロクロナデ ヘラミガキ のち黒色処理	13.5 3/24	5.7 24/24	4.65	SN174 R1	B II 類
5	土師器 环	SD2002c 1層	ロクロナデ 底部: 手持ちヘラケズリ	ロクロナデ ヘラミガキ のち黒色処理	14.6 8/24	8.3 5/24	4.1	SN176 R1	B II 類
6	土師器 甕	SD2002c 1層	ロクロナデ 底部: ヘラケズリ	ロクロナデ	11.25 9/24	7.2 2/24	6.2	SN176 R2	B 類
7	須恵系土器 环	SD2002c 1層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ロクロナデ	13.4 2/24	5.3 24/24	4.4	SN171 R6	
8	須恵系土器 环	SD2002c 1層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ロクロナデ	— 0/24	5.4 22/24	2.0	SN176 R3	
9	須恵系土器 耳皿	SD2002c 1層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ロクロナデ	8.4 —	5.9 15/24	2.2	SN175 R1	

第27図 S×2000 道路跡C期出土遺物 1



(単位: cm)

番号	種類	遺構 層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	石帶 (巡方)	SD2002c 1層		長さ3.7cm 幅2.95cm 厚さ7mm 重さ10g					16-4 R9	
2	砥石	SD2002c 1層		最大長8.25cm 最大幅5.2cm 最大厚5.55cm 重さ350g					SN173 R1	
3	須恵器 环	SD2002c 2層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り 墨書「□」	ロクロナデ	14 22/24	5.35 24/24	4.3	15-2	SN171 R1	V類
4	須恵器 环	SD2002c 2層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り 墨書「天」	ロクロナデ	15.2 7/24	6.2 24/20	5.4		SN171 R5	
5	土師器 环	SD2002c 2層	ロクロナデ 墨書「太」カ	ロクロナデ ヘラミガキ のち黒色処理	— —	— —	—		SN171 R2	B類
6	土師器 环	SD2002c 1層	ロクロナデ 墨書「夫」カ	ロクロナデ	— —	— —	—		SN175 R2	B類
7	土師器 甕	SD2001c 2層	口縁部: ヨコナデ、 体部: ナデ 底部: 木葉痕あり	ヨコナデ	12.6 5/24	6.4 20/24	10.1	15-3	SN172 R3	手挽ね 土器

第28図 S X 2000 道路跡C期出土遺物2

S D 2003溝跡（第24・29・30図）

【位置】第175次調査区の西側で発見した。

【変遷】重複関係から2時期（A期→B期）の変遷を確認した。それぞれS X2000道路跡の西側溝（SD 2002）と接続しており、B期はSD 2002 bと接続している。A期はB期に壊されて直接の接続関係は把握できなかつたが、SD 2002 aと接続していると推測される。

【方向・長さ】B期で計ると、東で北に約1度偏している。今回の調査では約6.2m確認し、西側は調査区外へと延びている。西側に隣接する第142次調査で、西側延長部分を検出しており、それとあわせると約15.5m検出したことになる。

【重複】SD 2026・2028～2030と重複しており、いずれよりも新しい。

A期

【規模】上幅約1.5m、下幅85cm、深さ49cmである。

【壁・底面】底面は平坦で壁は急に立ち上がる。

【埋土】3層確認した。1層は黒褐色粘質土に褐色粘質土を斑状に含む。2層は灰黄褐色粘質土にV層に起因する土を斑状に含む。3層は褐灰色粘土にV層に起因する土を斑状に含む。

【遺物】出土していない。

B期

【規模】上幅1m、下幅27～40cm、深さ63cmである。

【壁・底面】底面は平坦で壁は急に立ち上がる。

【埋土】2層確認した。1層は黒褐色粘質土で褐色粘質土を斑状に含む。2層は黒褐色粘土にV層に起因する土を斑状に含む。

【遺物】須恵器壺・甕、土師器甕（B類）が出土している。

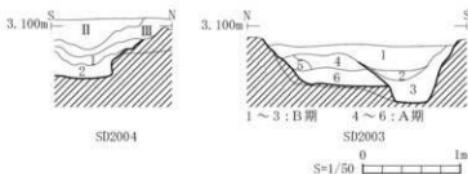
S D 2004溝跡（第24・29・30図）

【位置・形態】第175次調査区の西側で発見した東西方向の溝跡である。一部しか検出していなかったため全容が明らかではないが、S X2000道路跡と接続や重複はせず、道路跡の西隣で途切れるか、南に曲がるとみられる。

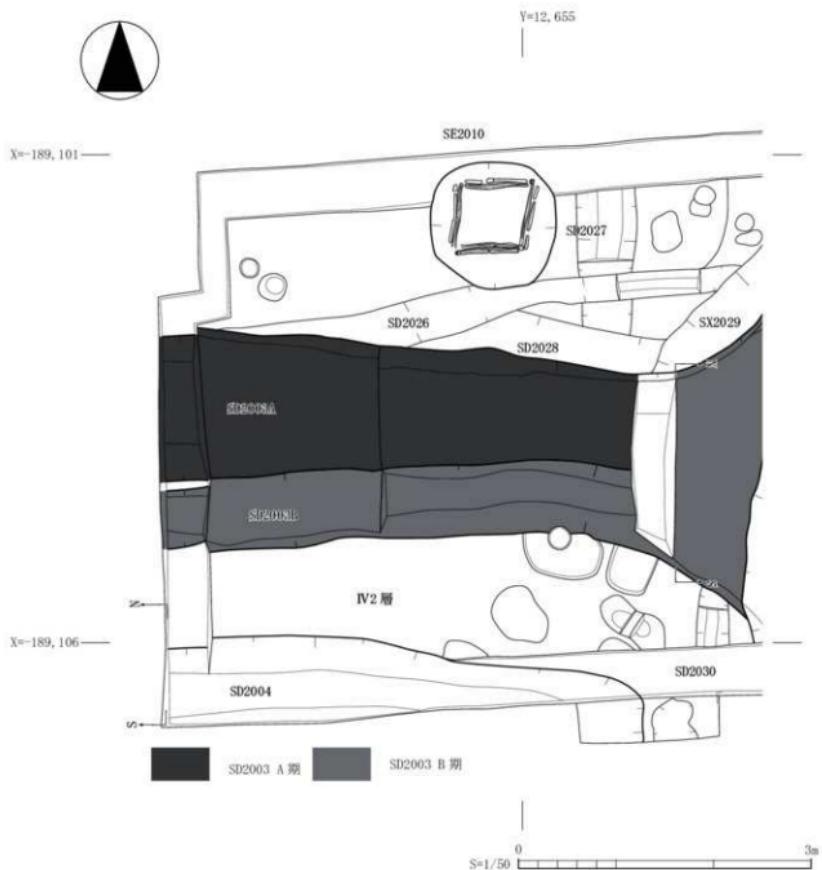
【方向・長さ】方向は東で約3度南に偏している。今回の調査では約5m確認し、西側は調査区外へ延びている。西側に隣接する第142次調査で、延長部分を検出しており、それとあわせると約12.6m検したことになる。

【規模】上幅87cm以上、下幅30～45cm、深さ35cmである。

【埋土】2層確認した。1層は灰白色火山灰の自然堆積で、2層はV層に起因する土を斑状に含む暗オリ



第29図 SD 2003・2004 溝跡断面



第 30 図 SD2003・2004・2026～2028 溝跡、SX2029 平面図

一ブ褐色土である。

【遺物】須恵器坏（I類・II類・III類）・甕・長頸瓶、土師器坏（B II類）・高台付坏・甕（B類）、丸瓦（II類）、平瓦（I類・II B類-a）が出土している。

S K2019土壤（第23・31図）

【位置】第173次調査区の北側で発見した。

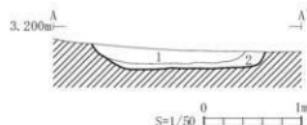
【重複】S D2016・2017と重複しており、それより新しい。

【平面形・規模】平面形は不整形であり、規模は南北1.8m、東西1.9m、深さ25cmである。

【壁・床面】壁は緩やかに立ち上がっており、底面は平坦である。

【埋土】2層確認した。1層は炭化物を含む黒褐色土で、2層は暗褐色土を斑状に含む黒褐色土である。

【遺物】出土していない。



第31図 S K2019 土壌断面図

S K2023土壤（第23図）

【位置】第173次調査区の南側で発見した。

【重複】他の遺構との重複はない。

【平面形・規模】大部分が調査区の外であるため不明である。

【壁・床面】壁は緩やかに立ち上がっており、底面には凹凸がある。

【埋土】V層に起因する土を斑状に含む黒褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。

S K2041土壤（第13・23図）

【位置】第173次調査区の南西角で発見した。

【重複】S D2024と重複しており、それより新しい。

【平面形・規模】大部分が調査区の外であるため不明である。

【遺物】出土していない。

【重複】S K1998・1999・2006～2008と重複しており、すべてそれら土壤より古い。また、S X2000とA群のS D2047が重複しており、S D2047が新しい。

【規模】最も長いS D2014で規模は長さ6.8m、上幅22～44cm、深さ14cmである。

【埋土】黒褐色土を主体とし、一部V層に起因する土を斑状に含むものもある。

【遺物】出土していない。

第172次調査区検出小溝群跡（第16図）

【位置】調査区のほぼ全面で確認した。

【方向・変遷】小溝跡の方向と重複関係から新しい順にA群のS D2045・2047・2049とB群のS D2009・

2046、C群のSD2050・2051・2039、D群の2040・2048に分けられる。方向はA群が東で南に約12度、B群が東で南に約6度、C群が北で東に約7～11度、D群が東で南に約2～12度偏している。

【重複】SK1998・1999・2006～2008と重複しており、すべてそれら土壤より古い。また、SX2000とA群のSD2047が重複しており、SD2047が新しい。

【規模】最も長いSD2014で規模は長さ6.8m、上幅22～44cm、深さ14cmである。

【埋土】黒褐色土を主体とし、一部V層に起因する土を斑状に含むものもある。

【遺物】出土していない。

第173次調査区検出小溝群跡（第23図）

【位置】調査区のおよそ北半部で確認した。

【方向・変遷】小溝跡の方向と重複関係から新しい順にA群のSD2013～2015とB群のSD2012・2016・2018に分けられる。またSD2017が単独の小溝として確認した。方向はA群がおよそ南北の発掘調査基準線に沿い、B群が東で南に約5～15度偏している。またSD2017は北で西に約9度偏している。

【重複】SX2000、SK2019と重複しており、それより古い。

【規模】最も長いSD2018で長さ6m以上、上幅27～48cm、深さ16cmである。

【埋土】黒褐色土を主体とし、一部V層に起因する土を斑状に含むものもある。

【遺物】出土していない。

〔Ⅲ層上面検出遺構〕

S D1994溝跡（第32・33図）

【位置・形態】第170次調査区の南側で発見した南北方向の小溝跡である。

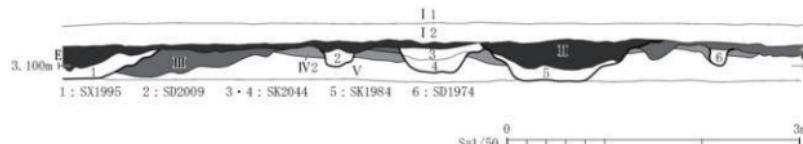
【重複】他の遺構との重複は無い。

【方向・規模】方向は北で東に約10度偏しており、規模は長さ80cm以上、深さ17cm、上幅30～36cmである。

【壁・底面】壁はやや急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】砂を含むオリーブ黑色粘土である。

【遺物】須恵器壺・甕、土師器壺（B類）・甕（B類）が出土している。



第32図 第170次調査区南壁断面図

S D 2036溝跡（第35図）

【位置・形態】第175次調査区の南側で発見した東西方向の小溝跡である。

【重複】S K2043と重複しており、それより新しい。

【方向・規模】方向は東で南に約10度偏しており、規模は長さ1.4m以上である。

【埋土】黒褐色土である。

【遺物】出土していない。

S K1984土壤（第32・33図）

【位置】第170次調査区の南側で発見した。

【重複】S K2044と重複しており、それより新しい。

【平面形・規模】平面形は不整形で、規模は南北60cm以上、東西1.1m、深さ38cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がりながら、凹凸がみられる。底面はほぼ平坦である。

【埋土】V層に由来する土を斑状に含む黒褐色土である。

【遺物】須恵器壺（V類）・甕、土師器甕（B類）が出土している。

S K1985土壤（第32・33図）

【位置】第170次調査区の南側で発見した。

【重複】他の遺構との重複は無い。

【平面形・規模】ほとんどが調査区外に延びているが、平面形は不整形と推測される。規模は南北76cm以上、東西93cm、深さ25cmである。

【壁・底面】壁は急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】黒褐色粘質土である。

【遺物】須恵器壺（III類）、土師器甕（B類）が出土している。

S K1986土壤（第33・34図）

【位置】第170次調査区の南側で発見した。

【重複】他の遺構との重複は無い。

【平面形・規模】平面形は東西に長い不整形で、規模は南北60cm、東西1.0m、深さ26cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は中央がやや低くなっている。

【埋土】2層確認できた。1層は砂を含む黒褐色粘土で、2層はオリーブ黒色粘土である。

【遺物】1層から須恵器壺、土師器壺（B V類）・甕（B類）が出土している。

S K1987土壤（第33・34図）

【位置】第170次調査区のほぼ中央で発見した。

【重複】S K1988・1989と重複しており、それより新しい。

【平面形・規模】平面形は不整形で、規模は南北85cm、東西87cmである。

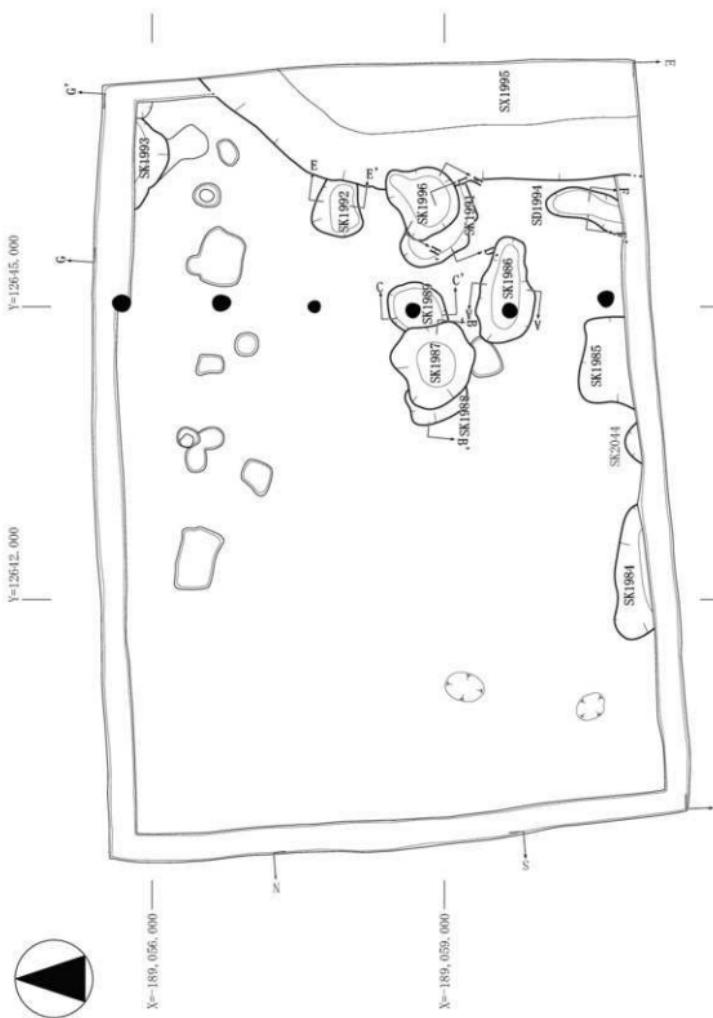
【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】2層確認できた。1層は黒褐色粘土で、2層はオリーブ黒色粘土である。いずれの層にも砂が含まれている。

Y=12945,000
G' G
X=189,056,000 —————

現代の位置：●

S=1/50 0 3m



第33図 第170次調査区III層上面突出遺構平面図

【遺物】1層から須恵器坏（V類）、土師器坏（B類）・甕（B類）、製塙土器が出土している。

S K1988土壤（第33・34図）

【位置】第170次調査区のほぼ中央で発見した。

【重複】S K1987と重複しており、それより古い。

【平面形・規模】平面形は大部分をS K1987に壊されているため、不明である。規模は南北64cm、東西34cm以上、深さ26cmである。

【壁・底面】壁はやや凹凸みられ、やや急に立ち上がっており、底面は中央がやや低くなっている。

【埋土】灰白色火山灰とV層に起因する土を斑状に含む黒褐色土である。

【遺物】須恵器坏、土師器坏（B類）・甕（B類）が出土している。

S K1989土壤（第33・34図）

【位置】第170次調査区のほぼ中央で発見した。

【重複】S K1987と重複しており、それより古い。

【平面形・規模】平面形は楕円形で、規模は60cm以上、短軸55cm、深さ28cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がっており、底面は中央がやや低くなっている。

【埋土】炭化物を含む黒色粘質土である。

【遺物】土師器坏（B V類）・高台付坏・甕（B類）が出土している。

S K1991土壤（第33・34図）

【位置】第170次調査区の東側で発見した。

【重複】S K199、S X1995と重複しており、それより古い。

【平面形・規模】大部分をS K1996とS X1995に壊されており不明である。規模は南北84cm、東西66cm、深さ25cmである。

【壁・底面】壁はやや急に立ち上がり、底面は平坦である。

【埋土】炭化物を含む黒色土である。

【遺物】土師器甕（B類）が出土している。

S K1992土壤（第33・34図）

【位置】第170次調査区の東側で発見した。

【重複】S X1995と重複しており、それより古い。

【平面形・規模】平面形は不整形で、規模は南北53cm、東西58cm以上、深さ17cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は中央がやや低くなっている。

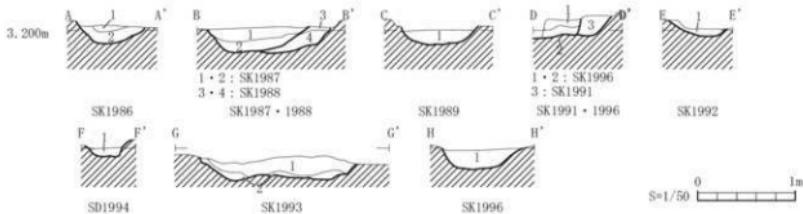
【埋土】砂を含むオリーブ黑色粘土である。

【遺物】1層から土師器坏（B類）が出土している。

S K1993土壤（第33・34図）

【位置】第170次調査区の北東側で発見した。

【重複】他の遺構との重複は無い。



第34図 III層上面検出土壙断面図

【平面形・規模】平面形は大部分が調査区外に延びており不明である。規模は南北70cm以上、東西1.6m以上、深さ24cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面にはやや凹凸がある。

【埋土】2層確認した。1層は砂を多く含む黒褐色土、2層はV層に起因する土を多く含む暗灰黄色土である。

【遺物】1層から須恵器甕、土師器甕（B類）が出土している。

S K1996土壤（第33・34図）

【位置】第170次調査区の東側で発見した。

【重複】SK1991、SX1995と重複しており、それより新しい。

【平面形・規模】平面形は不整形で、規模は南北75cm、東西72cm、深さ16cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がっており、底面は平坦である。

【埋土】砂を含む黒褐色土である。

【遺物】須恵器甕（V類）・甕、土師器甕（B V類）・甕（B類）が出土している。

S K2043土壤（第35図）

【位置】第175次調査区の西側で発見した。

【重複】SD2036と重複しており、これより古い。

【平面形・規模】平面形は大部分が調査区外に延びており、不明である。規模は南北37cm以上、東西21cm以上である。

【埋土】灰白色火山灰を含む黑色土である。

【遺物】出土していない。

S K2044土壤（第32・33図）

【位置】第170次調査区の南側で発見した。

【重複】SK1984と重複しており、それより古い。

【平面形・規模】大部分が調査区外に延びており、不明である。規模は南北41cm以上、東西87cm以上、深さ25cmである。

【埋土】灰白色火山灰を含む黑色土である。

【遺物】須恵器甕、土師器甕（B類）が出土している。

S X 1995（第32・33図）

【位置】第170次調査区の東側で発見した。

【重複】SK1991・1992・1996と重複しており、SK1996より古く、SK1991・1992より新しい。

【平面形・規模】大部分が調査区外に延びており、不明である。規模は南北4.4m以上、東西1.2m以上、深さ25cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

【埋土】V層に起因する土を斑状に多く含む黒色粘質土である。

【遺物】須恵器壺（III類）・甕・長頸瓶、土師器壺（B I・B V類）・甕（B類）、須恵系土器壺、灰釉陶器碗、丸瓦（II類）、石帶（丸輪）が出土している。

3まとめ

今回の調査では山王四区内で、7件の個人住宅に伴う発掘調査を行い、VI層上面からIII層上面までの各遺構検出面で遺構を発見した。ここでは、はじめに各遺構検出面での年代について述べたのち、SX2000道路跡について若干の考察を行う。

（1）SX2020水田跡

SX2020水田跡は、古代の最終遺構検出面であるV層よりも下層にある。本調査区から約50m北側の第54次調査区（第2図）では、IX層水田跡を確認している。畦畔などの遺構は発見していないが、土壤分析の結果多量のプラント・オバールが検出され、水田跡の可能性が高いと指摘されている。今回確認したSX2020水田跡は、層位的に第54次調査のIX層水田跡と同じとみられる。今回の調査及び第54次調査でも遺物が出土していないため、直接年代を推定する手がかりは得られなかったが、本遺跡多賀前地区や掃下し地区及び西側に隣接する新田遺跡では、同様の黒色粘土層が確認されており、出土遺物や放射性炭素年代測定から古墳時代前期の水田跡と推測されている。よってSX2020水田跡も周辺地区との位置関係や層位などを考慮すれば、古墳時代前期の水田跡と考えられる。

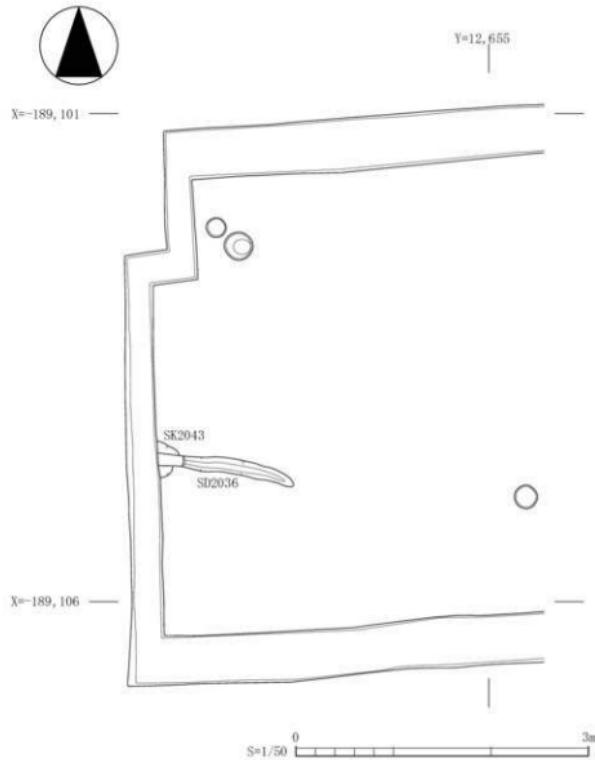
（2）IV2層上面検出遺構

IV2層上面では主要な遺構としてSB1980、SA1990、SE2010、SD2004を検出した。このうち遺物が出土しているのは、SA1990、SE2010、SD2004である。

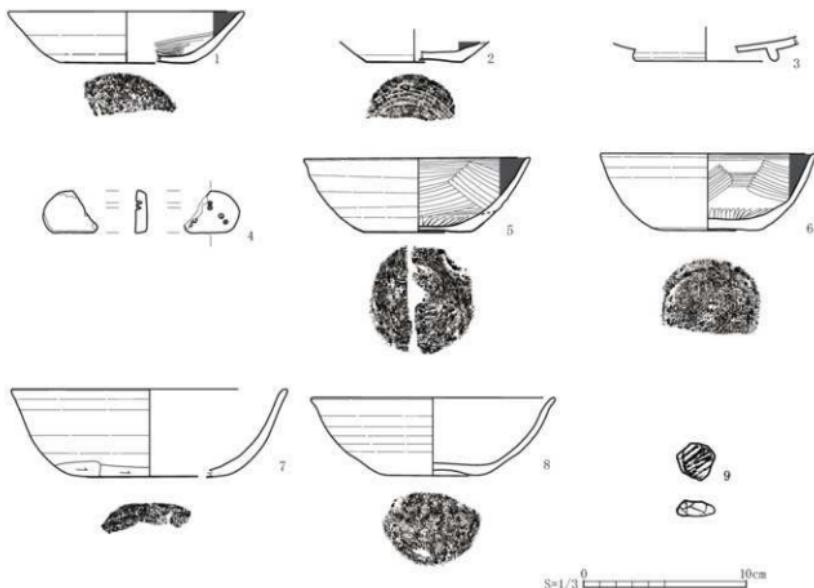
SE2010の掘方埋土からは、土師器壺（B類）・甕（B類）が出土していることから、8世紀後葉が年代の上限と推測される。また井戸枠内埋土からは須恵器壺（III類）と土師器壺（B V類）が出土している。出土した点数が少なく、また器形がわかるものが無いが、須恵器壺と土師器壺とともに再調整が施されているものが出土しておらず、また須恵系土器も含まれていないことを考慮すれば、およそ9世紀後半頃と推測される。

SB1980からは遺物が出土しておらず、SA1990の柱抜き取り穴からは8世紀後葉以降に出現する土師器甕（B類）が出土しているのみで、手掛かりに乏しい。ただし、灰白色火山灰を含むIII層に覆われ、須恵系土器も出土していないことから、およそ9世紀代におさまるものと推測される。

SD2004は、10世紀前葉に降下した、灰白色火山灰の自然堆積層が確認できたことから、10世紀前葉を中心とした年代を考えておきたい。



第35図 Ⅲ層上面検出遺構（第175次調査区）平面図



(単位: cm)

番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 环	SX1995 1層	ロクロナデ 底部: 摩滅により不明	ロクロナデ ヘラミガキ のち黒色処理	14.4 2/24	8.4 5/24	3.2		SN170 R5	B類
2	土師器 环	SX1995 1層	ロクロナデ 底部: 回転条切り ヘラ書き「×	ロクロナデ ヘラミガキ のち黒色処理	—	5.8 10/24	—		SN170 R8	B V類
3	灰釉陶器 碗	SX1995 1層	ロクロナデ 底部: 回転条切り	ロクロナデ	— 0/24	8.2 6/24	—	24-23	SN170 R16	
4	石器 (丸輪)	SX1995 1層	長さ3.1cm 幅2.1cm 厚さ7mm 重さ10g					24-3	SN170 R7	
5	土師器 环	II層	ロクロナデ 底部: 回転条切り	ロクロナデ ヘラミガキ のち黒色処理	13.8 10/24	6.4 23/24	4.55	23-1	SN170 R1	B V類
6	土師器 环	II層	ロクロナデ 底部: 回転条切り	ロクロナデ ヘラミガキ のち黒色処理	13.2 4/24	6.2 16/24	4.75		SN170 R3	B V類
7	須恵器 环	II層	ロクロナデ→ヘラケズリ 底部: 不明	ロクロナデ	16.8 4/24	9.4 5/24	5.4		SN170 R2	V類
8	須恵器 环	II層	ロクロナデ 底部: 回転条切り	ロクロナデ	14.9 3/24	6.2 10/24	4.8		SN170 R4	V類
9	須恵器 甕	II層	長径2.3cm 短径2.2cm 厚さ1.0cm 重量5g					24-1	SN170 R9	土器片 製円盤

第36図 SX1995・II層出土遺物

(3) IV 1層上面検出遺構

IV 1層上面では、SX2000道路跡を検出している。はじめに灰白色火山灰を手がかりに年代を考えてみる。SX2000道路跡は3時期（A→B期）の変遷があり、そのうちB期とC期には10世紀前葉に降下した灰白色火山灰が含まれている。このことから、B・C期は10世紀前葉以降と考えられ、A期はそれ以前と考えられる。

次に出土遺物についてみると、A期の側溝からは遺物が全く出土しておらず、またB期からは土師器や須恵器の破片が少量確認されるのみであるため、直接年代を推定する手がかりがない。

C期からは、須恵器や土師器及び須恵系土器などが出土している。須恵系土器は小型のものは含まれていない。これら出土遺物の特徴と、灰白色火山灰との関係は矛盾しない。

以上の点をまとめると、A期は10世紀前葉以前、B・C期はそれ以降とすることができる。

(4) III層上面検出遺構

III層上面では、第170次調査区で土壌11基、溝跡1条の他、性格不明の落ち込みを1基確認している。III層には灰白色火山灰を含んでいることから10世紀前葉が年代の上限と考えられる。また、III層はSX2000道路跡も覆うため、III層上面の遺構群は、道路廃絶以降のものといえる。今回土壌から出土した遺物は、いずれも破片、年代の下限を推定できる資料は得られなかったことから、10世紀前葉以降の年代を想定しておく。

(5) SX2000道路跡について

SX2000道路跡は、位置関係などから、多賀城南面に整備された道路網のうちの西7道路跡に相当する。年代については、前述したとおり、A期が10世紀前葉以前、B・C期は10世紀前葉以降と考えられる。これまで多賀城南面の方格地割は、整備がはじまつた8世紀後葉以降、方格地割I期からIV期にかけて東西大路から南北1区画ずつ段階的に整備されていったと推定されていた。今回の調査で確認した西7道路跡は灰白色火山灰降下以前がA期の1時期のみしか確認できないことから、10世紀前葉をあまり遡らない時期に建設が開始されたと考えられる。さらに、周辺の調査成果もあわせてみてみると(第2図)。西7道路跡は、今回の調査区の北側にあたる第13・23・52・54次調査においても確認している。第13次調査は確認調査であるため、変遷などは不明であるが、第23・52・54次調査では、今回の調査同様3時期の変遷を確認している。特に第52・54次調査では灰白色火山灰との関係から、新しいB・C期は10世紀前葉以降、B・C期より古いA期はそれ以前と考えられている。また、東西大路の北側で西7道路の西側隣接地にあたる第66・68次調査で確認した北1道路跡は、9世紀後半につくられはじめたことが明らかになっている。これら西7道路跡及び西7道路跡以西の北1道路の建設年代を踏まえて考えると、北1・西7道路の交差点の成立もおよそ9世紀後半が上限と推測される。

ここで、多賀城南面の方格地割の変遷の中で西7道路の年代的位置づけを考えてみる。方格地割は、現在I～IV期の4時期の変遷が考えられており、前述した年代から西7道路は方格地割III期からIV期に相当する時期に機能したと推測される。これまで、方格地割は東西大路を中心に南北1区画ずつ段階的に整備され、それに伴い西7道路も東西大路に近い北1道路及び南1道路までの区間は、方格地割II期に整備されると考えられていた。しかし、近年の西7道路跡の調査成果からは地割II期までさかのぼるような資料は確認されていないことから、西7道路の整備は方格地割III期まで降る可能性がある。今後、西7道路跡を含め、周辺の道路網の調査に伴い、方格地割の変遷の再考が必要になると考えられる。

参考文献

- 多賀城市教育委員会『高崎遺跡－第11次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第37集 1995
- 多賀城市教育委員会『山王遺跡－第51・54・57次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第81集 2006
- 多賀城市教育委員会『山王遺跡－第66・68次発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第100集 2010
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター『年報6 平成3年度』1993
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター『多賀城市埋蔵文化財調査センター年報－平成5年度－』1995
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター『多賀城市埋蔵文化財調査センター年報－平成10年度－』2000
- 鈴木孝行「多賀城外の方格地割」第32回古代城柵官衙遺跡検討会資料集 2004
- 鈴木孝行「多賀城方格地割の調査」月刊『考古学ジャーナル』9月号No604 2010
- 中島和彦・武田健市「山王遺跡」『平成26年度 宮城県遺跡調査成果発表会 発表要旨』2015



調査区と多賀城跡（南西から）



調査区と多賀城跡（西から）

写真図版 1



山王遺跡第173～176次調査区全景（南から）



山王遺跡第173～176次調査区全景（北から）

写真図版 2



山王遺跡第173～176次調査区全景（真上から）



山王遺跡第173調査区全景（真上から）

写真図版 3



山王遺跡第174調査区全景（真上から）



山王遺跡第175調査区全景（真上から）

写真図版 4



山王遺跡第176調査区全景（真上から）

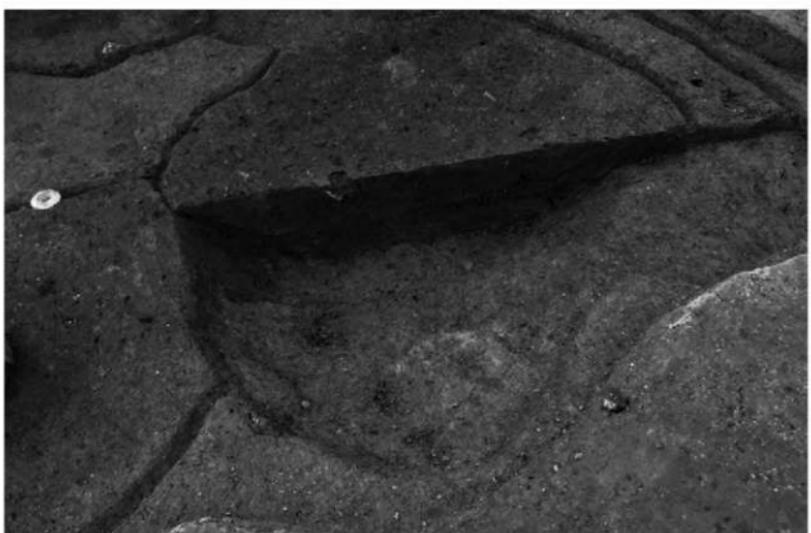


山王遺跡第170次調査区Ⅲ層上面遺構検出状況（北東から）

写真図版 5



山王遺跡第170次調査区SK1986土壤断面（東から）

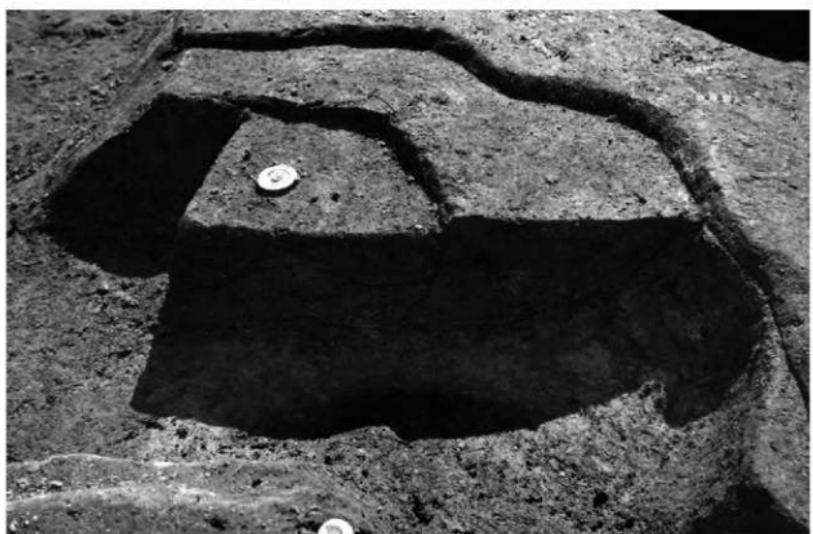


山王遺跡第170次調査区SK1987土壤断面（北から）

写真図版 6



山王遺跡第170次調査区SK1988土壤断面（北から）



山王遺跡第170次調査区SK1991・1996土壤断面（北から）

写真図版 7



山王遺跡第170次調査区SK1993土壤断面（南から）



山王遺跡第170次調査区SK1996土壤断面（北東から）

写真図版8



山王遺跡第170次調査区IV2層上面遺構検出状況（南東から）



山王遺跡第170次調査区西壁断面（南東から）

写真図版 9



山王遺跡第172次調査区IV-2層遺構検出状況（北東から）



山王遺跡第172次調査区IV-2層上面検出遺構（北東から）

写真図版10



山王遺跡第172次調査区SK1997土壤（北から）



山王遺跡第172次調査区SK1998土壤（西から）

写真図版11



山王遺跡第172次調査区 S K1999土壤断面（西から）



山王遺跡第172次調査区 S X2020水田跡畦畔検出状況（北東から）

写真図版12



山王遺跡第171・172次調査区SX2000道路跡検出状況（北東から）



山王遺跡第171・172次調査区 S X2000道路跡完掘状況（北東から）

写真図版13



山王遺跡第171・172次調査区 S X2000道路跡西側溝断面（南東から）

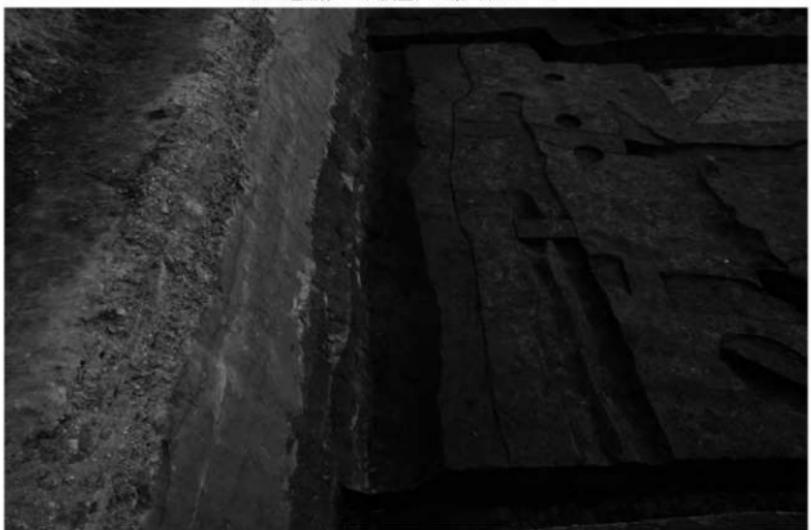


山王遺跡第171・172次調査区 S X2000道路跡東側溝断面（南東から）

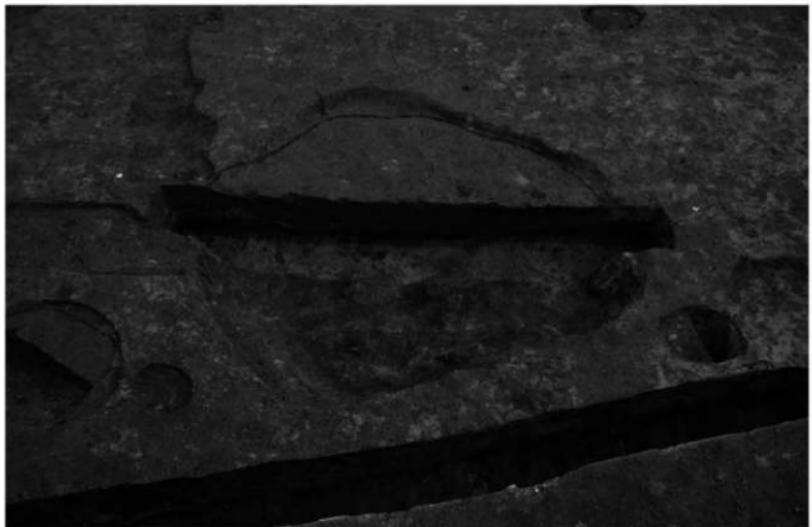
写真図版14



山王遺跡第173次調査区全景（北西から）



山王遺跡第173次調査区 SX2000道路跡西侧溝（北から）



山王遺跡第173次調査区SK2019土壤全景（北から）



山王遺跡第173次調査区SX2020水田跡検出状況（南西から）

写真図版16



山王遺跡第174次調査区全景（北西から）



山王遺跡第174次調査区 S X 2000道路跡西侧溝（北から）

写真図版17



山王遺跡第174次調査区 S X2000道路跡西側溝（南から）



山王遺跡第175次調査区全景（北西から）

写真図版18



山王遺跡第175次調査区 SX2000道路跡西側溝（北から）



山王遺跡第175次調査区SX2000道路跡西側溝断面（北から）

写真図版19



山王遺跡第175次調査区SE2010井戸跡（北から）



山王遺跡第175次調査区SE2010井戸跡（北東から）

写真図版20



山王遺跡第175次調査区SE2010井戸跡（西から）



山王遺跡第176次調査区全景（北西から）

写真図版21



山王遺跡第176次調査区 S X 2000道路跡西側溝（北から）



山王遺跡第176次調査区SA1990柱列跡（北から）

写真図版22



山王遺跡第176次調査区 S X2000道路跡西側溝断面（北東から）



1 土師器坏 (SN170 R1)



2 須恵器坏 (SN171 R1)



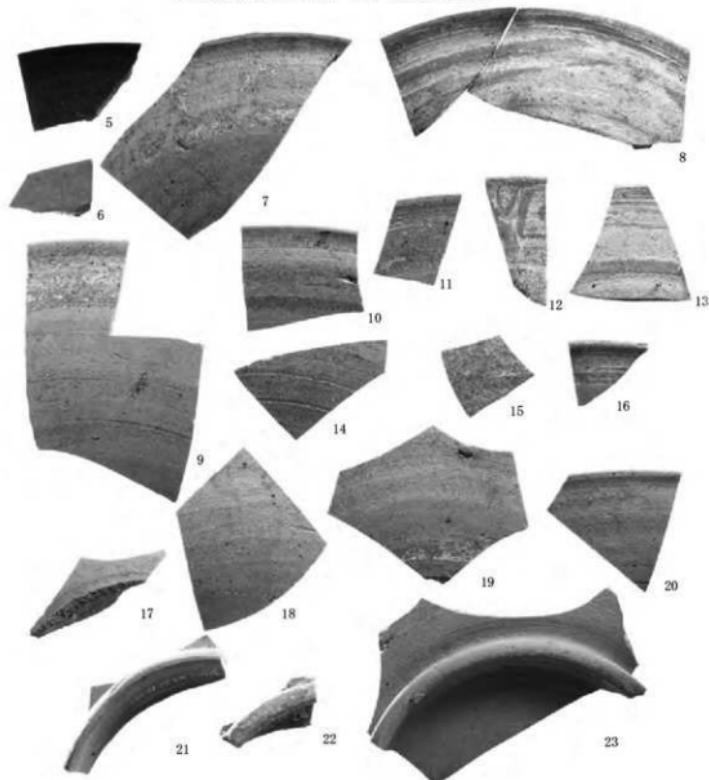
3 手捏ね土器 (SN172 R3)

写真図版23



1:土器片製円盤 (SN170 R9) 2:土錘 (SN171 R8) 3:石帶 (SN170 R7) 4:石帶 (SN174 R9)

土器片製円盤、土錘、石帶（丸鞘、巡方）



5:綠釉陶器 (SN174 R10) 6 ~ 23 : 灰釉陶器 (6:SN175 R5 7:SN170 R18 8:SN170 R25 9:SN170 R17 10:SN174 R11 11:SN170 R22 12:SN170 R29 13:SN170 R27 14:SN174 R12 15:SN175 R6 16:SN170 R23 17:SN170 R26 18:SN170 R20 19:SN170 R19 20:SN170 R21 21:SN170 R24 22:SN171 R7 23:SN170 R16

綠釉陶器、灰釉陶器

写真図版24

XII 高崎遺跡第109次調査

1 調査に至る経緯・経過と調査成果

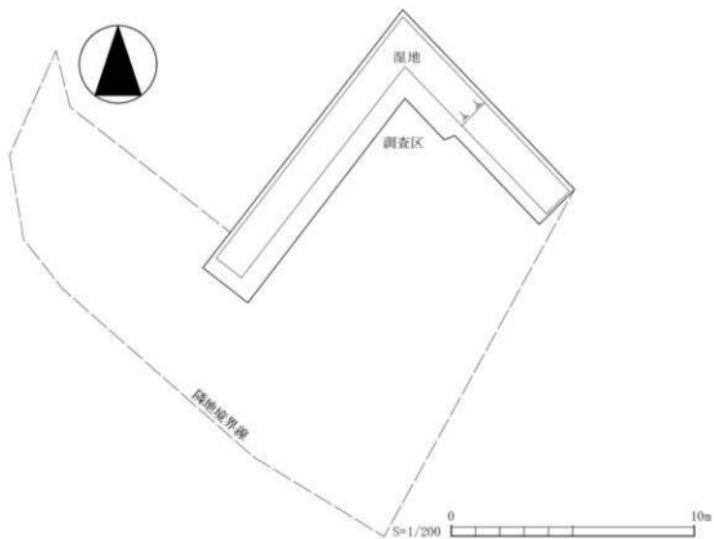
本件は、個人住宅建設に伴う確認調査である。平成28年8月23日、地権者より当該区における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、住宅部の基礎工事に先行して、擁壁による土留工事に伴い幅1.0～1.3m、深さ2.1mの掘削を行うものであった。西側隣接地の高崎遺跡第68・71次調査では、現地表から約1.5m下で遺構検出面となっていることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、擁壁を設置する方法以外では宅地の平坦面を確保できないことから、まずは遺構の有無を確認するための確認調査を実施することとなった。その後、11月1日に地権者から調査に関する依頼書と承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

調査は平成28年11月8日から実施し、工事業者から提供された重機を使用して表土を除去し、現地表から約2.1mまで掘り下げたが、東側の丘陵部は現代の削平によって大きく壊されており、西側は湿地となっていることを確認し、遺構は確認できなかった。その日のうちに写真撮影と図面作成を行い、すべての調査を終了した。

調査の結果、東側の丘陵から西側の湿地への落ち込みを確認し、遺物は表土から須恵器甕の破片が出土した。



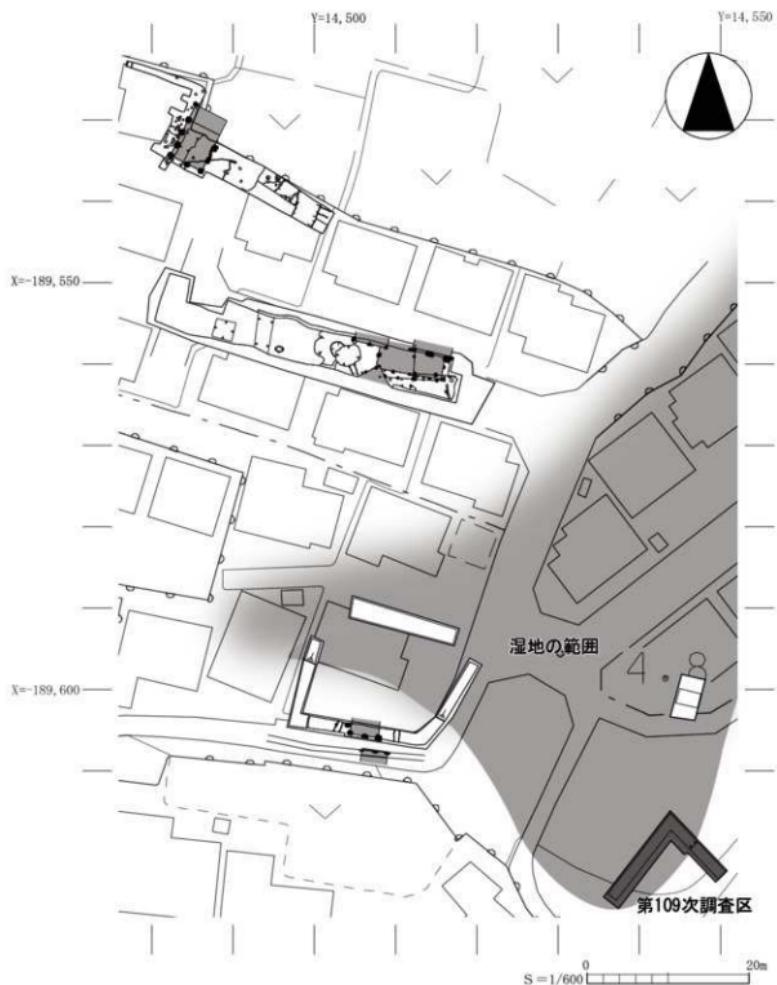
第1図 調査区位置図



第2図 調査区平面図



調査区（東から）



第3図 高崎遺跡第109次調査区及び周辺の調査区

XIII 志引遺跡第5次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、東田中二丁目地内における共同住宅新築に伴う確認調査である。平成28年1月21日、地権者より当該事業と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅の基礎工事の際に直径5cm、深さ3mの鋼管杭289本を打ち込むことから、遺跡への影響が懸念された。このため、遺跡保存の協議を行い、遺構の有無や検出される深さを確認した後に、計画変更の有無を判断することとした。3月3日、地権者から発掘調査に関する依頼・承諾の提出を受け、7日より現地調査を開始した。

はじめに、重機による住宅建築部分の表土（I層）除去から取りかかり、現表土下30～50cm下の明褐色（III層）上面でSX10堅穴遺構を発見した。8日より作業員を動員し、遺構検出面の精査を行うとともに、一部埋土の掘り下げを行い残存状況や性格等の把握に努めた。この結果、当初堆積層（II層）の一部と捉えていたSX12が小溝の集合であることを確認したものの、SX10堅穴遺構については住居跡であるか否か判断するには至らなかった。18日に検出状況の全景写真を撮影し、22日から平面図の作成を開始した。24日、重機による埋め戻し及び調査機材の撤収を行い、現地での確認調査の一切を終了した。

一方、調査と並行しながら行ってきた保存協議については、28日に事業者側から遺跡に影響のないべタ基礎工法に変更可能であるとの連絡があった。宮城県文化財保護課とも協議し、当該調査で発見した遺構には影響なしとの判断となり、本発掘調査には至らないこととなった。

2 調査成果

（1）層序

3層に大別できる（I～III層）。I層は現代の表土であり、砂利を含む盛土層である。II層は灰黄褐色土であり、東半部で発見した遺構をすべて覆っている。III層は明褐色土であり、今回確認した遺構の検出面である。



第1図 調査区位置図

(2) 発見遺構と遺物

今回の調査では、堅穴遺構、溝跡、小溝群等を発見した。また、現在の表土直下では、昭和48年に解体された建物跡の礎石も確認している。

S X10堅穴遺構

【位置・検出面】調査区東側の地山上面で発見した。

【重複】S X12小溝群と重複し、それらよりも古い。

【残存状況】東側がS X12、南半部が搅乱によって破壊されており、残存状況は悪い。

【平面形・方向】平面形はおよそ方形である。方向は、確認した北辺で測ると、東で約30度北に偏している。

【規模】東西は北辺で測ると2.8m以上、南北は1.6m以上である。

【埋土】にぶい黄褐色土(10YR5/4)が主体である。

【遺物】出土していない。

S X11堅穴遺構

【位置・検出面】調査区中央の地山上面で発見した。

【重複】S X12、SD13と重複し、それらよりも古い。

【状況】西側がS X12小溝群、東側がSD13によって破壊されており、残存状況は悪い。

【平面形・方向】平面形はおよそ方形である。方向は、確認した西辺で測ると、北で約26度西に偏している。

【規模】南北は西辺で測ると2.6m以上、東西は4.4m以上である。

【埋土】にぶい黄褐色土(10YR3/3)が主体であり、黒色土及び浅黄橙色土が粒状に混入している。

【遺物】遺物は出土していない。

S X12小溝群

【位置・検出面】調査区中央の地山上面で発見した。第II層に直接覆われている。

【重複】S X10・11と重複し、それらよりも新しい。

【規模・方向】幅15~65cm、長さ2.5~4.1m以上である。検出時は堆積層の一部と捉えていたが、一段掘り下げた結果、南北方向の小溝群であることが明らかとなった。方向は、西辺で測ると北で約14度東に偏している。

【埋土】にぶい黄褐色及び褐色土が主体であり、黄橙色やにぶい橙色土が斑状に混入している。

【遺物】出土していない。

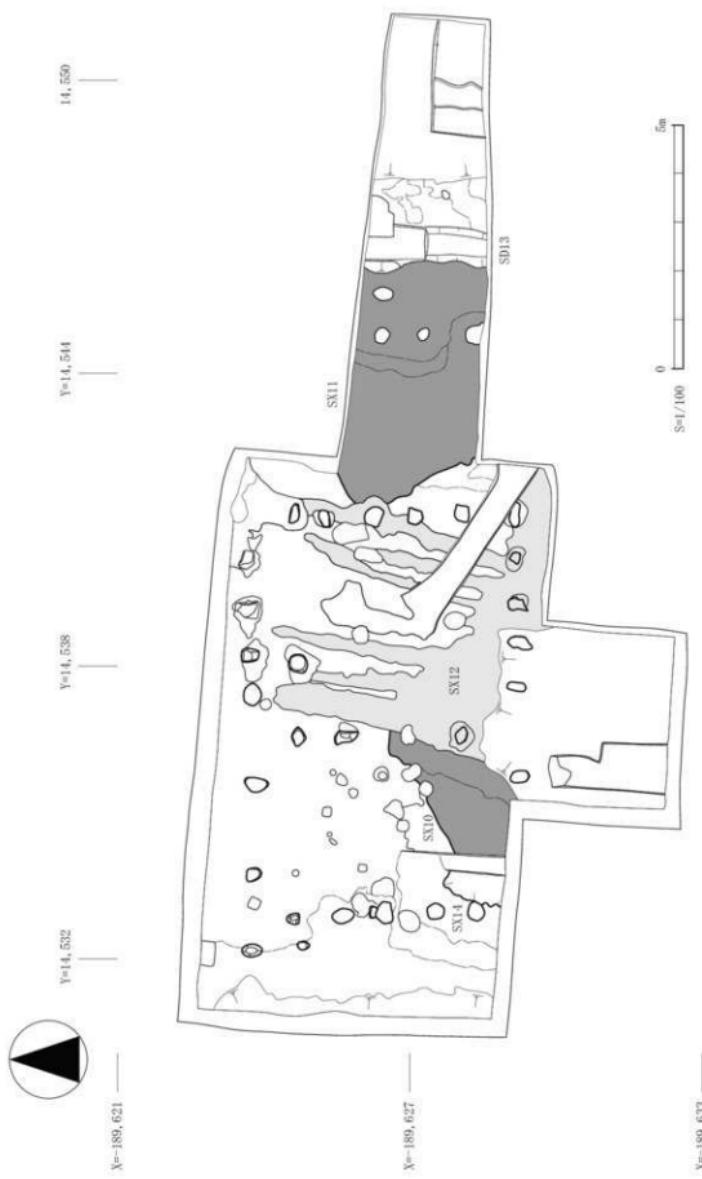


(単位: cm)

番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外 面	内 面						
1	須恵器	II 層	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	-	R1	平城京分類環II

第2図 出土遺物

第3圖 遺構全體圖



3　まとめ

今回の調査では堅穴遺構2基のほか、小溝群、溝跡を発見した。調査経過でも述べたように遺構確認に止めたため出土遺物は極めて少なく、発見した遺構の年代については明らかでないが、II層埋土中から平城京分類の環Hに類似する須恵器环身が出土しており、当該期の遺構が存在する可能性もある。

さて、本遺跡については昭和58年に実施された発掘調査以降、旧石器時代の遺跡として長く知られてきたが、平成12年に上高森遺跡で発覚した旧石器発掘捏造問題に伴う再検証の結果、当該期の遺跡は存在しないものと判断した。一方、縄文晩期とした土壤などは不自然な痕跡が確認されなかつたことや、遺跡内には正和三年（1314）と嘉暦三年（1328）の年号が記載された板碑（三重塔線刻）があることなどから、埋蔵文化財包蔵地としての性格までは否定していなかった。

今回の調査で堅穴遺構や小溝群などを発見したことから、改めて集落もしくは生産遺跡であることが確認された。



調査区全景（西より）



S X 10・14周辺（南より）

写真図版 1

報告書抄録

ふりがな	たがじょうしないのいせき 2
書名	多賀城市内の遺跡2
副書名	平成28年度ほか発掘調査報告書 高崎古墳群 新田遺跡 市川橋遺跡 山王遺跡 高崎遺跡 志引遺跡
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第132集
編著者名	武田健市、村松稔、石川俊英、熊谷満、畠山未津留、丹野修太、小原駿平、村上詩乃
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 Tel: 022-368-0134
発行年月日	西暦2017年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さんのう 山王遺跡 (第160次)	みやけんちがじょうしきんのうきんく 宮城県多賀城市山王三区64	042099	18012	38度 17分 54秒	140度 58分 58秒	20160301 ~ 20160325	32m ²	長屋建設
さんのう 山王遺跡 (第161次)	みやけんちがじょうしきんのうあざまきおさし 宮城県多賀城市山王字捕下2-1 11, 2-28, 2-1	042099	18012	38度 17分 58秒	140度 58分 17秒	20160229 ~ 20160315	357m ²	集合住宅 建設
じひきいせき 志引遺跡 (第5次)	みやけんちがじょうしきんのうあざまかにちじょうめ 宮城県多賀城市東田中二丁目410-1 1, 2	042099	18012	38度 17分 30秒	140度 59分 58秒	20160307 ~ 20160324	115m ²	共同住宅
たかさきこらんぐ 高崎古墳群 (第12次)	みやけんちがじょうしきんのうあざまくわ 宮城県高崎二丁目230-3	042099	18013	38度 17分 44秒	140度 59分 49秒	20160411 ~ 20160420	84m ²	宅地造成
にいだ 新田遺跡 (第109次)	みやけんちがじょうしきんのうあざまくわ 宮城県多賀城市南宮字一里塚33-4	042099	18013	38度 18分 02秒	140度 57分 40秒	20160426 ~ 20160427	18m ²	個人住宅 建設
にいだ 新田遺跡 (第111次)	みやけんちがじょうしきんのうあざまくわ 宮城県多賀城市山王字南寿福寺21-9	042099	18013	38度 17分 56秒	140度 57分 51秒	20160704 ~ 20160831	89m ²	個人住宅 建設
にいだ 新田遺跡 (第115次)	みやけんちがじょうしきんのうあざまくわ 宮城県多賀城市新田字西後21-1	042099	18013	38度 17分 50秒	140度 57分 26秒	20161114 ~ 20161208	39m ²	個人住宅 建設
いわわばし 市川橋遺跡 (第92次)	みやけんちがじょうしきんのうあざまくわ 宮城県多賀城市城南二丁目5-1	042099	18008	38度 17分 49秒	140度 59分 20秒	20160523 ~ 20160630	19m ²	個人住宅 建設
いちらかわせい 市川橋遺跡 (第94次)	みやけんちがじょうしきんのうあざまくわ 宮城県多賀城市城南二丁目5-13	042099	18017	38度 17分 49秒	140度 59分 20秒	20161027 ~ 20161216	26m ²	個人住宅 建設
さんのう 山王遺跡 (第166次)	みやけんちがじょうしきんのうきんく 宮城県多賀城市山王字西区5-1他	042099	18017	38度 17分 49秒	140度 58分 38秒	20160601 ~ 20160621	40m ²	保育所 新築
さんのう 山王遺跡 (第169次)	みやけんちがじょうしきんのうあざま 宮城県多賀城市南宮字町24-6	042099	18018	38度 18分 04秒	140度 58分 22秒	20160822 ~ 20161012	20m ²	個人住宅 建設

さんのう 山王遺跡 (第170次)	みやびけんた がじょうし さんのうあざらんのうよんくばん 宮城県 多賀城市山王字山王西区91番 ほか いもど くわくく 3外の一部(区画NO. 7)	042099	18018	38度 17分 49秒	140度 58分 40秒	20160906 ～ 20161104	49m ²	個人住宅 建 設
さんのう 山王遺跡 (第171次)	みやびけんた がじょうし さんのうあざらんのうよんくばん 宮城県 多賀城市山王字山王西区91番 ほか いもど くわくく 1外の一部(区画NO. 6)	042099	18018	38度 17分 49秒	140度 58分 41秒	20160906 ～ 20161104	35m ²	個人住宅 建 設
さんのう 山王遺跡 (第172次)	みやびけんた がじょうし さんのうあざらんのうよんくばん 宮城県 多賀城市山王字山王西区91番 ほか いもど くわくく 1外の一部(区画NO. 5)	042100	18019	38度 17分 49秒	140度 58分 41秒	20160906 ～ 20161104	39m ²	個人住宅 建 設
さんのう 山王遺跡 (第173次)	みやびけんた がじょうし さんのうあざらんのうよんくばん 宮城県 多賀城市山王字山王西区91番 いちど くわくく 1の一部(区画NO. 4)	042101	18020	38度 17分 48秒	140度 58分 41秒	20161031 ～ 20161224	42m ²	個人住宅 建 設
さんのう 山王遺跡 (第174次)	みやびけんた がじょうし さんのうあざらんのうよんくばん 宮城県 多賀城市山王字山王西区91番 いちど くわくく 1の一部(区画NO. 3)	042102	18021	38度 17分 41秒	140度 58分 41秒	20161031 ～ 20161224	38m ²	個人住宅 建 設
さんのう 山王遺跡 (第175次)	みやびけんた がじょうし さんのうあざらんのうよんくばん 宮城県 多賀城市山王字山王西区91番 いちど くわくく 1の一部(区画NO. 2)	042099	18018	38度 17分 47秒	140度 58分 41秒	20161031 ～ 20161224	52m ²	個人住宅 建 設
さんのう 山王遺跡 (第176次)	みやびけんた がじょうし さんのうあざらんのうよんくばん 宮城県 多賀城市山王字山王西区91番 いちど くわくく 1の一部(区画NO. 1)	042100	18019	38度 17分 47秒	140度 58分 41秒	20161031 ～ 20161224	51m ²	個人住宅 建 設
たかさき 高崎遺跡 (第109次)	みやびけんた がじょうしだかさきにちょうの 宮城県 多賀城市高崎二丁目20-2	042099	18047	38度 17分 48秒	140度 59分 38秒	20161108	60m ²	擁壁工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
山王遺跡 (第160次)	集落・都市	古墳、古代、中世	土壤、溝					
山王遺跡 (第161次)	集落・都市	古墳、古代、中世	水田跡、溝跡					
志引遺跡 (第5次)	集落			須恵器坏				
高崎古墳群 (第12次)	古墳							
新田遺跡 (第109次)	集落・屋敷							
新田遺跡 (第111次)	集落・屋敷	古墳、古代、中世	道路跡	土師器、施釉陶器、無釉陶器		奈良時代の東西道路跡を発見		
新田遺跡 (第115次)	集落・屋敷	古墳、古代、中世	土壤	土師器、須恵器、須恵系土器				
市川橋遺跡 (第92・94次)	集落・都市	古墳、古代、中世	南1道路跡	土師器、須恵器、漆紙文書		須恵器坏に付着した漆紙文書 が出土		
山王遺跡 (第166次)	集落・都市	古墳、古代、中世	溝跡					
山王遺跡 (第169次)	集落・都市	古墳、古代、中世	土壤	土師器				
山王遺跡 (第170～176次)	集落・都市	古墳、古代、中世	西7道路跡	土師器、須恵器、須恵系土器、石帶				
高崎遺跡 (第109次)	集落			須恵器				

要 約	高崎古墳群第12次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
	新田遺跡第109次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
	新田遺跡第111次調査では、古墳時代前期の土壌、古代の道路跡、中世の溝跡を発見した。
	新田遺跡第115次調査では、古墳時代中期の土壌及び溝跡、古代の土壌を発見した。
	市川橋遺跡第92・94次調査では、多賀城南面の道路網のうちの南1道路を発見した。
	山王遺跡第160次調査では、古代の土壌、溝跡を発見した。
	山王遺跡第161次調査では、古墳時代前期の水田跡、古代以降の溝跡を発見した。
	山王遺跡第166次調査では、年代不明の溝跡及び窪地状遺構を発見した。
	山王遺跡第169次調査では、古代の土壌、中世～近世の土壌を発見した。
	山王遺跡第170～176次調査では、多賀城南面の道路網のうちの西7道路を発見した。
	高崎遺跡第109次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
	志引遺跡第5次調査では、年代不明の堅穴遺構を発見した。

多賀城市文化財調査報告書第132集

多賀城市内の遺跡2

—平成28年度ほか発掘調査報告書—

平成29年3月24日 発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022) 368-1141

印刷 株式会社工陽社

塩竈市尾島町8番5号

電話 (022) 365-1151
